
とある暁の傀儡師(エクスマキナ)

平井純譚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある暁の傀儡師^{エクススマキナ}

【Nコード】

N9615K

【作者名】

平井純譚

【あらすじ】

とある科学の超電磁砲×

NARUTOのコラボ作品

親の愛情を十分に受けられず暁に身を落として
実の祖母に殺された

天才傀儡師 サソリ

彼が転生をしてとある科学の世界に入った
カップリングはサソリ×佐天となります。

1、天才の死（前書き）

やっちまっ
たぜ

1、天才の死

ガッ

サクラ「ハア、ハア」

サソリ「止めておけ、この体は痛みすら感じない
殴るだけお前の拳が痛むだけだ」

桃色の髪をした女の忍サクラが暁のメンバーのサソリを殴った

サソリの殴られた頬はヒビが入り所々欠けていた

サクラ「ハア、ハア」

サソリ「女つてのは無駄なことをするのが
好きな奴らだな・・・

クク・・・

オレは血の繋がった

そのババアが死のうが

何も感じはしない

心も・・・

この体と同じだ

今まで

何百何千と殺してきたが・・・

その内の一人と同じだ

もつと物事は単純だ」

すでにサソリの体には忍刀が急所を貫いており

あとは壊れるのを待つだけであつた。

サクラ「アンタは人の命を・・・何だと思つてんだ!!
肉親を何だと思つてんだ!!」

サソリ「おい・・・

それが忍びの言うセリフか？」

サクラ「・・・!」

サクラ「何で・・・

何でそんな考え方しか出来ないんだ・・・
アンタは!!」

チヨバア「もういい・・・サクラ・・・
こやつをこんな風にしてしまったのは
ワシら砂隠れの悪しき風習と教えじゃ・・・」

サクラ「・・・」

サソリ「お前もこの体になつてみるか？

そうすればオレの言つてゐる事も

少しは分かるだろうぜ

朽ちぬ体だ・・・

傀儡人形ならいくらでも造り直せる

寿命に縛られることもない・・・

人など傀儡でいくらでも造り出せばいい・・・

欲しけりやだが・・・」

淡々と自分の考えを言つていくサソリ

サクラ「・・・・・・・・・・」

思わず口元に力を入れサソリを睨むサクラ

サソリ「数を増やせばいいってもんじゃない・・・・・・・・
コレクションは質だから」

サクラ「・・・・・・・・・・」
アンタは一体何なんだ・・・・・・・・？」

刀の突き刺さった急所からとめどなく血が出ていく

サソリ「あえて言うなら
人形になりきれなかった

人形・・・・・・・・・・か・・・・・・・・・・オレは傀儡だが・・・
生身の”核”を持つ不完全な傀儡だ・・・
人でもなく・・・・・・・・人形でもない・・・・・・・・」

サクラ「・・・・・・・・・・」

「もうじき動かなくなる

その前にオレも無駄な事を一つしてやろう・・・
オレを

倒した褒美だ・・・」

サクラ「・・・・・・・・！？」

チヨバア「・・・・・・・・・・」

サソリの言葉に黙る二人

サソリ「お前は・・・大蛇丸の事をしりたがっていたな・・・
雲隠れの里にある天地橋に十日後の真昼に行け・・・」

サクラ「どういう事!？」

サソリ「大蛇丸の部下にオレのスパイがいる・・・
そこでそいつと
落ち合う・・・ことに
なっている・・・」

ガシャツ

サソリと両脇にいるサソリの両親（傀儡）がその場に倒れていった
まるで親子が川の字で寝るかのように

暁のメンバーとの戦いで最も悲しい戦闘

天才傀儡師 サソリの最期であった

だけど・・・

その死は終わりではなく
物語の始まりだったら

サソリが自分の罪を認め
とある科学の世界に行ったら

彼は何を考えるだろう

何を思うだろう

これはIFの物語

とある科学の超電磁砲

NARUTO × (赤砂のサソリ)

> i 7 5 6 1
— 1 1 9 1 <

スタート

2、赤い髪の少年（前書き）

原作にそつたりアニメにそつたりオリジナルも入れたり
何でもあります

2、赤い髪の少年

時間軸

佐天と御坂が出会っている幻想御手事件はまだ起きていない

レベルアップ

ピ

と体温計の数字が37、3度を表示している

「ゲホゲホ」

布団に入り具合悪そうに横になる女子中学生

彼女は 初春 飾利

ジャッジメント

風紀委員に所属している

コンピュータを自在に操る体力は全然（腕立て伏せ一回も出来ず）
レベル1の能力者

「ま、微熱だけど今日は一日大事をとって寝てた方がいいっしょ」

彼女は佐天 涙子

初春の親友

レベル0

都市伝説に興味あり

「すみません

わざわざ・・・」

コホッと咳をしながら申し訳なさそうに初春が言う

「ううん

昨日無理矢理付き合わせちゃったのはあたしだしね」

「それを言ったら

私こそ変な事件にまきこんじゃって・・・」

「あほ

初春が悪いわけじゃないじゃない」

初春が寝ている2段ベッドの梯子から飛び降りる佐天

「よっ

通知表 初春の分もあずかってきてあげよっか」

「後日自分で取りに行きますよ」（汗）」

焦る初春

「ま

明日から夏休みなんだし

風邪は今日中に治しちやいなさいよ」

公園で御坂と白井に偶然出会い

三人でかき氷を食べていた

味

御坂・・・いちご

佐天・・・レモン

白井・・・いちご（玉砕）

そして会話は幻想御手の話になる

「何か他に知ってる事はない？」

佐天が幻想御手の噂を二人に話すと真剣に質問をする御坂

「え・・・

え~~~~とお

自称ですけど

「幻想御手」を使っただけで奴らが

ネットに書き込みをしてるみたいですけど

ただ怪しい連中っていうか不良っぽいのかで

どこまで信用できるか・・・」

指を顎に触れながら思いたすように話す佐天

「どう？」

「信じられません・・・」

そういった物が実在するなら一連の事柄に説明はつきます

一応当たってみる価値はあるかもしれませんがね」

佐天の話を聞いた二人は何かを調べにいくように去っていく

「ありがとね

佐天さん」

「あついえ・・・」

「・・・え？」

「幻想御手」ってマジモンなの？」

一人になったので微熱を引いている親友に夕食を作りに行くかという感じでベンチから立ち上がる

「やっぱ

風邪にはお粥よね

優しい佐天さんが今から行きますよ」

スーパーで材料（と言っても卵や飲み物くらい）
買い

初春の部屋に向かう

「ちよつと近道するかな・・・」

都市の大通りからはずれ

近道をするため裏路地に侵入する佐天

スイスイと歩いて行くと

「・・・！？」

目の前に黒い物体が置いてある

人型に・・・

「え．．．．．し、死体じゃないわよね．．．」

おそろおそろ物体に近づいてみる

赤い髪の毛が黒い服から覗いている

やっぱり人みたいだ

ひっくり返すと自分と変わらない年代の少年が倒れていた

「ちよつと！！大丈夫ですか？」

「何だかほつとけなくて連れて来ちゃったけど．．．．．すごい軽いよこの子！」

初春の部屋の扉の前で赤い髪の毛の少年をおんぶする格好で来たが
思ったよりも全然
軽かったことに驚く

「とりあえず中に入るう」

意を決して扉のノブに手を回す

ガチャ

初春の部屋に入る

台所に買った物をおき

赤い髪の少年をベッドの隣の空いたスペースに寝させる

「それにしても変な服」

やたら首元が広く

黒を基調とし所々赤い雲のような模様が怪しさをさらに際立っている

「まあ、目覚めるのを待ってみるか」

悩んでも仕方ないので

お粥作りを開始することに決めた

初春の方を見るとぐっすり眠っていた

トントントントン

「んん・・・」

包丁で何かを切る音で初春が目を覚ます

ムクツと起き上がり台所の方をみると

佐天がエプロンを付けて料理をしているのが見えた

「佐天さん！

また来てくれたんですか」

「あ ゴメン

起こしちゃった？

夕飯作りに来たよん

ってもお粥だけど」

「わあー・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！？」

ベッドから降りようと初春が梯子に手を置くと
目の前に奇妙な服を着た
赤い髪の少年が飛び込んできた

「さ、佐天さん

どうしたんですか？

この子・・・・・・・・・・」

「ん・・・・・・・・・・

ああ何か学園都市の裏路地に落ちてた」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

イマイチ今の状況が理解出来ない初春

「というのは冗談で

行き倒れみたいでほっとけなかったから連れて来ちゃった・・・・・・・・・・
・テへ」

かわいこぶっているが

内容がついて行ってない

「えっと・・・・・・・・つまり・・・・・・・・

勢いで連れて来ちゃったと・・・・・・・・・・」

「そゆこと」

ニコツとする佐天

なんとなく理解 初春

「どうするんですか？
この子」

「んゝ．．．．．そこまで考えてなかったなゝ！！
初春ゝ．．．今晚この子泊めてあげて」

「えゝ何ですか！！！！！！
私は病み上がりなんですよ」

「．．．．．」

「．．．．．」

しばらく黙る二人

その時

グウーキュルルル

盛大な腹の音

音源は初春のストマック（胃）

「あゝはっはっは！！
とりあえずお粥食べる？
ほとんど卵雑炊みたいだけど．．．」

「むーうつうつ．．．．．」

顔を真っ赤にしてうなだれる初春

（アンタは人の命を・・・
何だと思っ てんだ！！）

わかっていたさ・・・

オレが間違っていることぐらい

傀儡の体になつてまで

オレは何を求めていたんだ？

結局何も手に入らず

実の祖母に殺される

滑稽だな・・・

偉そうなことを言つても
所詮空っぽの人形だ

オレの人生ってなんだろう

視界が変わる

「んん・・・」

サソリが目を覚ます

「ここはどこだ？」

まだ覚醒せず視界がぼやけている

だんだん霧が晴れるように視界が戻ってくる

見慣れない部屋だった

そして目の前の二人に気が付く

「ん!!?」

一人は上半身裸になり

もう一人が背中をタオル
で拭いていた

二人の動きが止まり

上半身裸の女の顔がどんどん赤くなっていき

「きゃ————!!!」

きゃ————!!!」

大パニック

鼓膜を破るような叫び声

何が起ったのかわからないサソリ

もう一人の方を見ると

いかにも「あちゃー」と言いたげに苦笑い

なんだコイツら・・・！？

3、和解（前書き）

基本的にサソリは女性に興味がないのでサソリからアプローチはな
いと思っています

3、和解

佐天と初春（服を着た）は先ほど目を覚ました赤い髪の少年と向かい合っている

少年は片膝を立て隈のある両目を半目にしながら

「ここは何処だ？」

少年の問いに佐天が答える

「えっと……ここ学園都市って呼ばれているけど

あなたは何処から来たの？服装からして違うけど……」

「が……くえ……ん……とし……？」

聞きなれない単語だった

（どういうことだ……オレは確かに急所を刺されて死んだはず……）

ぶつぶつと一人言を言うサソリ

「どうする初春？」

「どうするって……佐天さんが連れて来たんじゃないですか……！

もしかして「置き去り」（チャイルドエラー）じゃないですか！？」

「そりゃそうだけど……ねえ、あなた名前なんて言うの？」

赤い髪の少年は顔を上げ

「サソリだ……何故オレがここにいるかわからん……」
口調を変えずに話す少年

「サソリさんですか……（初春と佐天の頭にスコーピオンがシヤーと言っている映像が浮かぶ）変わった名前ですね……」

注）スコーピオン 蠍はシヤーと鳴きません

「えっと……あたしは佐天！！佐天涙子
この子は（初春を指さしながら）初春飾利」

「どうも」

二人の自己紹介を聞き終わるか終わらないかの所で
サソリが立ち上がり

「じゃあ
世話になったな」

「え！！！？」

入口に向かって袴のような服を翻し進んで行くサソリ
その背中から寂しさが滲み出ている気がした

「待つて！！」

咄嗟に彼の服を掴む佐天

サソリは驚いたように首だけを回し佐天を見下ろす

「あなた他に行く所あるの！！！！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

姿勢を変えず黙るサソリ

この人をほつといてはいけない！！！！

そんな強い義務感が佐天の頭に響いていた

「関係ねーだろ！！

離せ！！！！」

あまりの迫力に一瞬たじろぐ佐天だが

「関係なくなんかないよ

お互い名乗りあつたんだから！！！！」

怒鳴るようにサソリに言う佐天

それを聞くとサソリは隈のある目が大きく開き驚く

ちなみに初春は二人を見てあたふたしている

初めてだった・・・・・・

赤の他人にそんなことを言われたのは

両親が死んで・・・寂しかった

生き返って欲しくて人傀儡の造り方を発明した

傀儡系を付け両親の間に入り抱いて貰う

一時は落ちつく

だが・・・まだ幼い自分にとってチャクラの扱いが難しく
気を抜くと傀儡から糸が切れ両親は崩れおちる

痛感した

死んだ人間は戻らない

どんなに頑張っても・・・
どんなに努力しても・・・

オレの中で何かが弾け飛んだ

今まで先頭に立って傀儡の研究を里のためにやったが

どうでも良くなった・・・

砂隠れの里にいる義務感もなくなり

オレが抜け忍になったのはほどなくしてからだった

そして憎しみの対象が人間のオレに向いた

弱い人間・・・

いつか滅びの時が来る虚しさ・・・

オレは人傀儡の技術を自分に使い

暁に入った

思えば・・・

あの時にオレは死んだんだろうな

あれ??

そう言えば・・・

オレの体は今どうなっている?

体がひどく重い

まるで弱い人間に戻ったみたいに・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ずっと黙ったままのサソリ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

自分のせいでこんなことになっているかは知らないが何となく気まずいので

佐天も黙る

しかしその空気は長くは続かなかった

「はいー！！黙る時間はそこまでですよー！！」

あまりにも重い空気に初春が耐えきれず声をあげる

「んー！？」

「とりあえず（サソリと佐天の手をとり握手させる）
これで仲直りですし

サソリさんはもう私達と友達ですよ」

握手した手を二人で見つめる

「じゃあー！！これからよろしく
サソリ」

佐天がニコツとサソリに微笑む

「ああ・・・・・・・・」

オレはもう一度やり直せるのか？・・・

と思った直後に大停電がおきる

わあーわあー

と騒ぐ二人の声を聞きながら

やり直・・・せるのか？

少し幸先が不安になるサソリ

4、初めてだらけのサソリさん（前書き）

今回ギャグ要素多し

サソリってこんなキャラだっけ？

4、初めてだらけのサソリさん

「おい、これは何だ？」

「それはテレビって言って遠くからの情報を受信して映像を映す機械だよ」

「ふん．．．てれびか．．．」

興味深気に眺めスイッチを押したり後ろの方を見たりしているサソリ

（はあ．．．なんか勢いで家に泊めることになっちゃったけど．．．．．
テレビも知らないってどんだけ田舎から来たんだろう）

身寄りがないサソリを佐天が自分の一人暮らしの部屋に居候させることにした

（まあ．．．親が「友達が泊まりに来た時に便利だから．．．」
と言って予備の布団を渡してくれたから大丈夫だけど．．．．．初め
て男の人を部屋に入れた．．．．
ゴメン！！お父さん、お母さん（何となく）

やはりオレがいた

世界とは違ってみたいだな

遠くの情報が映像として伝わるなんて技術なんてないし
(忍は伝書鳩みたいなもんで情報を伝えます)

それにさつき乗った

動く箱
エレベーターのことです

にも驚いた

気分が悪くなったが………(重力の影響で)

テレビの観察もし終わり

次の興味対象を見つげるためにキョロキョロと見回すと

「はい、コーヒー………って知ってる？」

テーブルにマグカップをおきながら「まさか、これも知らないのか
？」と考えるおかしな文面になってしまった

サソリは黙って首を横にふった………

さいでつか………

「………え………と………」

温かい飲み物だよ

飲んでみて!!」

「飲み物」という単語を聞いてサソリは訝しげにコーヒーを眺める

（こんな真っ黒な飲み物は生涯で見たことがないぞ・・・）

少し飲んでみようとした時

（あれ、オレの体どうなってんだ・・・）

「悪いな、ちょっと調べたいことがあるから・・・向こうに行ってくれ」

絡繰りの体を見せる訳にもいけねーから

「・・・！？」

佐天は首を傾げて「なんで」って言ったが

サソリのあまりに真剣な表情なので言う通りに台所に行った

佐天が行ったことを確認するとサソリはおもむろに

上着を脱ぎ出し

上半身裸になった

「！！！！？」

これはどういうことだ・・・

あれほど仕込みを済ましたはずのオレの体

腹部の刃のついた綱

背中のようなカッター

他にも作った仕込みが綺麗さっぱりなくなっていた

いや・・・綺麗さっぱりではない元仕込みのあった所は深い傷になりオレの体に痛々しく刻みこまれていた

（まあ、一度死んだ身だしもう驚かないけどな
何でもいいか・・・）

サソリはもう一度暁の衣をはおりながら

「いいぞ、入って」

「なんかぶつぶつ言ってたけど大丈夫？」

佐天がサソリの前に姿を現した

「いや、何でもない
それよりも・・・（マグカップを手にとり）これは本当に飲める
のか？
なんか毒々しいが・・・」

「うん、あたし結構好きで良く飲むけど・・・」

「そうか・・・よし！！！」

サソリは思い切ってコーヒーを口に含む

「！！！！！！！！」

みるみる顔色が変わるサソリ

「ぐあゝああああ！！！！」

舌がしびれぐおお

（やはり毒！！痺れ薬か！！）

尋常じゃないほどの声をあげるサソリに驚く佐天

「え！！！？ひよつとして苦いのだめ！！！！一応砂糖（スティックシュガー三本分（約15g））入れたけど……………ちよつと待つて……………」

舌を出してなんとも言えない表情をしながら懸命にコーヒーの苦さと闘うサソリを横目で見つつ佐天が台所から砂糖を持ってくる

「はい、自分の好みに合うように調整して」

サソリは砂糖をどんどん投入していく

三本追加（合計30g）

「苦い……………」

さらに三本追加（合計45g）

「飲めなくはないが

好んで飲みたいとは思わん」

さらに二本追加

で結局……………

スティックシュガー

12本分（合計60g）

凄いよ砂糖会社のりっぱなお得意様だよアンタ!!!!!!

「なかなか美味しいな」

「ええ……（もうそれコーヒーじゃないから……砂糖水に着色料でコーヒー豆使ってるだけだから……）」

佐天はうまそうにコーヒーをすするサソリを見ながら苦笑いをする
ことしか出来なかった

（明日御坂さんに紹介しようかな……初春も誘って）

結構偉そうなこと言ってるけどなかなかかわいい所があるなあと思
いながら今後の予定を立てる

果たしてどうなるやら

5、幻想御手（レベルアップ）（前書き）

次回からちよいちよい戦闘を入れたいと思います

5、幻想御手（レベルアップ）

「あーーーーー」

見つからないなあ「幻想御手」

佐天が大量の資料を机に乗せパソコンとにらめっこしているが目的の物の情報が手に入らず

グイ〜と椅子の背もたれに寄りかかる

「せっかく、御坂さんと連絡取ろうと思ったのに……………」

先程携帯にかけたが

「デンゲンガハイッテイナイカデンパノトドカナイトコロニイルタメツナガリマセン」という機械音に嫌気がさし

仕方なく常々気になっている幻想御手について調べているが収穫ナシ

レベルアップ

「お・・・」

イナバウアーの格好になった佐天の目の前にiPod（イヤホン付き）が飛び込んできた

椅子から降り

眠そうな目をしながら

「コイツにも何か新曲入れとくかね」

iPodを手に取り眺める

（イヤホン プランプラン）

「何かオススメのヤツあるかなあ

結局本体の無線LANって使わないのよねー」

「何だ、むせんらんって？」

「ふえ！！??」

ガクッ

「ちょ・・・・・・・・・・

だあっ！！」

ドスン

急に佐天の目の前に出てきたサソリの赤い髪に驚き

そのまま椅子ごとひっくり返った

「ぬぐう（汗）」

その时机の上にあつた大量の資料がバランスを崩し盛大に床に散らばる

偶然にも資料の一部がマウスに触れた

カチッ

「大丈夫か？佐天・・・」

サソリが倒れこんだ佐天を上から覗きこみつつ言っ

相変わらずの隈目

それは置いて・・・

「イタタタ・・・タ

ん？」

強打した腰をさすりながら立ち上がるとパソコンに変化があった

「何だこりゃ？」カチ カチッ

不自然にNewsの所がマウスポインタで色が変わっていた

ダブルクリックをすると

NewsからGossipに変わり

画面が異様に黒かった

画面の変化にサソリも驚き佐天とともに見続ける

「隠しページ？」

クリクリっと画面を下にずらしていく

「何でわざわざ

こんな・・・」

そしてある文字が目に入る

TITLE: Level Upper
ARTIST: UNKNOWN

「これって・・・」

思いがけない情報に驚き
胸が高鳴るのを感じる佐天

一方サソリは・・・
「なんだこれ・・・見たことない文字だな・・・」

英語が読めないので

佐天と温度差が激しくなった

「んーーーー」

変なオブジェのある所の前で初春が携帯を眺め誰かを待っている

その後ろから忍びよる影・・・

「遅いなあ佐天さん」

ズイ

初春のスカートをたくしあげる佐天

顔を真っ赤にしてポコポコと佐天を叩く

「あう あう あう」

「あれ？夏休み入ったのに何で制服？」

「何やってんだ、おまえら」

佐天の後ろからサソリが歩いてきた
いつもの暁の装束で

「ひゃーーーーー」

サソリさんもいるじゃないですか」

「かたいこと言わないの

サソリも見えて嬉しいだろうし」

「いや、オレは別に・・・」

それにしてもこの世界はこんな挨拶をするのか？」

「ち、違いますよ！！！！！！」

佐天さん嘘を教えないで下さい！！！！！！」

恒例行事であった

「で、初春体調は？」

「まだ本調子ではないんですけど仕事がたまってるんで・・・」

腕を組ながらプイと横を向く

いかにも「私は怒ってます」という感じだった

「・・・で

「見せたいものがある」ってメールにありましたけど」

「フッフッフ

よくぞ聞いてくれたわね」

得意気に手を腰にあてながら話を続ける佐天

「刮目しなさいっ」

ビクッと身構える初春

「ああ、あれか何かごそごそやってたな」

サソリは思い出すように佐天の方を見る

「ついに見つけちゃったのよ

あの噂のアイテム」

ポケットから噂のアイテムを取りだし

「じゃじゃーん!!」

コレよ コレ！
「

グイッとアイテムを自慢気に出す

バンツつとね

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（興味の対象が変わり街の様子を見る
サソリ）」

しばしの沈黙

「・・・・・・・・・・・？」

音楽プレーヤー・・・・・・・・ですよね
何度も見たことありますよ

「中身が問題なのよ
中身が」

チツチツチツと指を振りながら佐天が自慢気に答える
「じゃあ見てもわかんないんじゃないじゃ・・・・・・・・」

「何とこの中には・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・」

「まっ茶店にでも入ってから教えてあげよう（ハート）……………」
行くよサソリ！！！！」

「もったいぶるなあ」

「……………ん！？」

話は終わったか……………？」

話についていけないサソリは街の電光掲示板の方を見て暇を潰していた

三人は茶店に向かって歩き出す

6、木山博士（前書き）

あ！！！戦闘は次回です
すいません！！！！

予告 次回 サソリと人傀儡三代目風影コンビが悪を切る（ぱちぱち）
お楽しみに

6、木山博士

「それでサソリさんはどうですか？」

「んゝ．．．まだね自分のこと話さないけどね．．．．．でも結構かわいい所がたくさんあったよ」

（砂糖海戦術コーヒーより）

「かわいい．．．．．所ですか．．．．．？」

茶店まで歩く道のりでサソリについて話をしているが佐天のサソリかわいい発言に首を傾げる初春

「おい、これから何処に行くんだ？」

「えー！！！？言ってなかったけ茶店だよ！！茶店何か飲もうや」

振り返りながら手を上に出しながら佐天が元気よく言う

「佐．．．．．天．．．．．！！！！」

お前の家に行くのか？」

「あははは！！違うよ

まあついてくれば分かるよ！！！！」

ずんずんと先に進んで行く佐天

後ろではサソリと初春が首を傾げていた

「さて

先程の話の続きだが

同程度の露出度でもなぜ水着はよくて下着はダメなのか――」

「いや

そっちではなく」

目に隈を持ち髪が癖毛だらけの科学者 木山に突っ込む御坂・白井
コンビ

三人が茶店で話をしている頃窓の外では……

「あれ！！佐天さん！！

あそこにいるの御坂さん達じゃないですか！！

「え！！……ホントだ！！！！一緒にいるの誰だろ？
よし行ってみよう」

御坂達が座っている所に近づき一番近い窓にベタァと引っ付いて
アピール

「何やってんだ……」

今まで睥にいた頃には考えられない行動に驚くサソリ
(不思議だ……コイツらと一緒にいても煩わしさが……
悪くないな)

一人小さな笑みを浮かべるサソリ

「ところでさつきから気になっていたんだが
あの子達は知り合いかね」

木山が窓にベタアと張り付いている佐天と少し離れた所でお辞儀を
している初春

そして変わった衣を着ているサソリの方を見ながら
二人に質問する

・・・・・・・・・・・・・・・・

「どうもー!!」

御坂さん 白井さん!!」

「佐天さん!!久しぶり初春さん・・・・・・・・
・・・・・・・・後ろの赤い髪の子誰??」

カランカランつと自動ドアから入ってきた三人に向かって御坂が手
をあげながら言ったが

変わった姿をしたサソリに目がいき疑問を述べる

「フッフッフ分かってしまいましたたわ黒子!!!
その殿方は佐天さんか初春の彼氏ですわね・・・・・・・・
・なかなか特徴的な姿ですわね」

白井が不気味な笑みを浮かべている

「やはり彼氏とするならちゃん・・・ガン!!!!
痛いすわお姉様〜!!!」

「二人とも困っているでしょ!!!!!!」

白井の頭を叩きながら御坂が子供を躡るように言う

佐天と初春はそんな様子を眺めながら苦笑いをする

「へえ〜!!」

じゃあその子は行き倒れになってて佐天さんが助けたんだ」

佐天達はサソリのことを説明

「ではそちらの殿方・・・もといサソリさんは何処からいらっしや
ったのですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・答えたところでお前らが知ってる所では
ないな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

氷ついたようにその場のみんなが固まった

それ以降自分の身の上の話をしないサソリに対して
素性の詮索をやめ

木山博士から幻想御手についてに戻すことにした

「幻想御手に話を戻しますわ・・・・」

と白井が切り出すとババロアに食い付いていた佐天が反応する

「それなら私」「幻想御手の所有者を搜索して保護する事になると
考えたほうが良いでしょう」

白井の言葉に遮られる佐天そして内容を理解すると

さっと持っていたiPodを隠そうとする

しかし誤って木山の飲み物をひっくり返してしまい

バシッと木山のストッキングにかかる

「わーーーーー
ス、スイマセン」

「いや気にしなくていい
かかったのはストッキングだけだから脱いでしまえば・・・・・・・・」

その場でスカートを外しストッキングを脱いでいく

店中の男達（サソリを除く）が顔を赤くし目のやり場に困った

ちなみにサソリは目の前のコーヒーを飲み

「に、苦い……」

苦さに敏感のサソリでした

「だーーーーーかーーーーーらーーーーー

人前で脱いじゃダメだと言ってますでしょうが……！」

ただいま白井と佐天が木山を叱っています（説得力なし）

（省略）

「お忙しい中ありがとうございました」

「いや

こちらこそ色々迷惑をかけてすまない
ちよつと怖かったが」

丁寧にお礼を言う白井

しかしサソリは妙な違和感をこの女から感じていた

（この女……何か隠しているな……オレとタイプ
が似ているから分かるが……）

隠していることは分かるが何を隠しているのか分からないため

みんなと木山を見送った

「そういえば

佐天さん見せたい物って」

ギクツ「あ！！

えーと」

「何を狼狽えている？

佐天？」

「あー！そうだった！！私これから用事があったんだ
サソリは先に家帰ってて
じゃあまたね初春」

「はあ・・・」

不自然すぎる行動であつたが・・・

「わかった先に行ってるぜ・・・」

佐天と別れるサソリ

いよいよ幻想御手は佳境に入る

7、発動（前書き）

風影が暴れるのは次回です

7、発動

（なんだ！・・・妙な胸騒ぎがする・・・）

サソリはなんとも言えない感覚を抱いていた

「クソ！！落ちつかねー！！」

サソリは暁の装束を翻し学園都市に飛び出して行った

「佐天は何処だ？」

軽々と建物の間や上を通りすぎていく

ビルの建設現場

「ヒャーハッハア

うわキツッー

オマエ今日死んじまうかもなー」

「かつかんべんしてくれー」

佐天が考え事をしながら歩いている時

偶然に幻想御手の取引を目撃してしまったが

不良が商売をしているため買う側にとって理不尽な取引だった

（何だって

こんなトコロに出くわすのよー

やんなら

あたしの見てない所でやってよ

ビルの物影に身を潜める佐天

（と、とりあえず
ジャッジメント
アンチスキル
風紀委員が警備員に通報を・・・）

しかし

ピーッ

バッテリー切れであつた

（やば！そーいや

ここんとこ充電してなかった）

焦りが出てくる

「オイ

そこに誰かいんぞ」

見つかつてしまった

「何見てんだ コラ」

「文句あるならこっちこいや」

「いえ 別に

ただの通りすがりでして

これにて失礼・・・」

通行人を装いその場から離れようとし

（しょ　しょうがないよねあたしに何かできるわけじゃないし）

必死に自分の行動を正当化させようとするが
思考の大半は別のことに使われ

佐天の中に「葛藤」を生み出した

（あつちはいかにもな連中が三人
こっちは数ヶ月前まで小学生やってたんだし）

考えとは反し立ち止まる

そして彼女はもう一度元の場所へ……

「もっ

もうやめなさいよ！
その人ケガしてるし

（って何戻ってきてんのあたし！
バカ言ってるでさっさとこの場から）

す……すぐに警備員アンチスキルが来るんだから」

ガアアン

不良のリーダー格が佐天の背後にあつた壁を蹴りあげる

建物全体に振動が伝わる

「今なんつった？」

「あ あ」

あまりの恐怖に言葉が出てきてくれない佐天

髪をガツとつかまれ

「ガキが生意気言っじゃねーか

何の力もねえ非力なヤツにゴチャゴチャ指図する権利はねーんだよ」

「なるほど

確かに一利あるな」

ザッ

突然目の前に黒い服を着た男が姿を現した

「そうなる」と

ゴチャゴチャ群れるオマエらにも言えるだぜ
一人じゃ何も出来ないくせに」

「サ、サソリ！！」

そこにいたのは赤い髪をしたサソリであつた

「ハッ何かと思えばガキが一匹増えただけじゃねえか」

殴りかかる不良その？

サソリは一度伏せ不良の拳をかわす

「あの女よりも遅いぜ」

一気に人間技とは思えない蹴りをくり出し

ビルの壁に突き刺さる

不良その？ ダウン

「さて、どうするこのままオレと殺るか？」

不気味な笑みを浮かべ不良を見下ろすサソリ

「言ってくれるな

どうやら何らかの能力者みたいだな

ガキのくせにその傲慢ちきな態度ムカツクぜ」

不良その？が手を出すとその場にあつた資材がフワフワと浮かびだす

（すごい

鉄柱があんなに・・・）

佐天は

ただ見ていることしか出来なかった

「ヘシ折ってやるぜっ」

不良その？が思い切り腕を前に突き出すて

サソリ目がけて一斉に鉄柱などの資材が飛んでいく

サソリは軽々ジャンプをし乗り越える

「なあ！！！？」

「嘘なんで？」

佐天と不良その？は驚きを隠せない

なぜならサソリは約3メートル近くジャンプしているからだった

「何処を見ている！？

まだオレの攻撃は終わってないぜ」

慌て視線を戻すと先程飛んで行っただけの鉄柱が不自然に空中にピタッと止まっていた

「じゃあ・・・そのまま返すぜ」

手を思い切り下から斜め上に向かって振りあげると

止まっていた鉄柱が不良その？に一斉に飛んでいく

「はあ？

ぐぼらっ！！！！！！」

ドシャとリーダー格の男の足元に転がりこんで行った

「カカカカッ

おもしれー能力だな

サイコキネシス
念動力の強力バージョンってか

ネタはわかるぜ

一回目の蹴りは自分自身にかけてスピードを上げ
飛んでくる鉄柱も同じようにかけ操作する
ここまで強力な奴は初めてだ」

読者の皆さんにはわかっていると思いますが

サソリには念動力の能力などという物は持っていない
一回目の蹴りはサソリの超人的な運動能力によって

飛んできた鉄柱を受け止めたのはサソリの得意の傀儡の糸を引っか
けただけであつた

「だがよ！！！！そんな能力じゃ俺には勝てねーよ」

一気に間合いを詰め攻撃を仕掛けてきた

サソリは余裕でかわし蹴りかかる

しかし

スカッ

「な、何！！？」

自分の足があり得ない方向に曲がり男に当たらなかった

「カカカカッ

何処狙ってんだ！！！！」

「クッ!!」

男の拳がサソリのから空きになった脇腹にヒットしサソリは衝撃で後ろ吹き飛ぶ

間一髪で体制を立て直しブレーキをかける

（どういうことだ・・・）

確かに狙いはあっていたはず・・・まさか幻術か!!! それなら合点がいく

・・・仕方ねー

ちんたらやってる場合じゃねえな

サソリは暁の装束から巻物を取り出した

「さーて久しぶりの傀儡だ少し実験体になってもらうぜ
オレのお気に入りだ」

「あゝ!! 何だ？」

そんな紙きれで俺を倒せると思ってんのか」

サソリは構わず巻物を広げた

ボンッとも大量の煙が辺りを包む

煙がだんだんと晴れていく

サソリの他にもう一人の影が映る

否それは人の姿ではなかった
まるで人間をそのまま人形にしたかのような現実感^{リアル}

「クク・・・」
さて・・・やるか」

8、砂隠れ最強の武器（前書き）

あー！サソリの毒は設定上よろしくないので外しました

だって死んじゃうぜー！

8、砂隠れ最強の武器

サソリが巻物からサソリと同じような服を着て
関節の部分と可動部分に切れ込みが入れてある
からくりが出現した

> i 7 6 6 4 — 1 1 9 1 <

砂隠れの里史上最強の風影であり

練り込んだチャクラを磁力に変えることが出来る特別な体質によって

砂隠れで最も恐れられた武器「砂鉄」

あらゆる形状に砂鉄を変化させ

状況に応じた武器を作り出す

しかしそれほどの忍もサソリに勝つことが出来ず
サソリの人傀儡となってしまうた……

「おもしれー手品使うな！！だが彼女の前で無惨にやられも恨むな
よ」

高笑いをする男

無惨にやられるのはあなたです……………

「さあーて

リハビリだ……………

少しは楽しませろよ」

ブンツと風影を前飛びたたせ不良の男に向かわせる

「いくぜ……………仕込み」

サソリが小指を倒すと

風影の右腕から五つの刀と両刃の大きな剣が飛び出す

（擦っただけでも致命的だ……………オレの開発した最強の毒でな……………）

「あ……………!!クッ

トリックアート
やべえ偏光能力」

ズギャン

サソリの風影が男から外れビルの壁を切り付ける

「チツ……………!!なかなか厄介だな早めに片付けねーとヤバイな（↑やばくありません）

他の幻術も使い出すかもしれんからな（使えません）」

スチャ

ギシギシと風影が壁に刺さっている右腕を出しながら不良の男を睨む（睨んでいるように見える）

「な、何だこれ！！！！」

（こんな化け物と・・・）
クソ！！」

廃ビルへと逃げこむ不良の男

「しまったここは奴の領域テリトリー！！！！
迂濶に入ったら奴の思う壺だ！！！！」

入口で風影を携えサソリの思考が始まる

（攻撃の部分を曲げる能力・・・まさかアイツは「万華鏡写輪眼」が使えるのか

（違います）

一回イタチのやろーに見せてもらったが・・・
用心にこしたことはねえな」

「建物に入ったのが失敗だったな

毒煙でいぶり出してやる！！」

サソリが右手の小指を手前に引くとパカッと腕に筒のようなものが
飛び出してきて

「息を止めている！！！！」

佐天」

「え！！！！？」

オングツ（息を吸い込んで止める）」

シーン・・・・・・・・・・

「ん!!!・・・何故出ない?・・・」

サソリが風影に近づき仕込みを確認する

「おいおい、仕込みに全部毒がなくなっているぞ
刀にも砂鉄にも・・・」

(何故だ・・・仕方ねえさっさと使うか)

サソリが右手の上に左手を乗せクロスさせるようにした

ガシャッ

風影の口部分が大きく広がり中から黒い煙のようなものが染み出てくる

砂隠れ最強の武器 砂鉄

ズズズ・・・

ズズズ

全てを吐き終わるとカシュッと閉じる

「冗談じゃねー!!!」

何だあの能力・・・

偏光能力じゃあ話にならね・・・・・・・・..
だがこのビルは俺のたまり場だからな地の利はこっちにある
隙についてぶっ殺してやる」

刹那

パリンパリンパリンパリンパリンパリンパリンパリンパリン

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

窓ガラスを大量の黒い物体が突き破り内部の壁に突き刺さっていく

「ひいー！！！！！」

間一髪柱の影に身を潜めやり過ごす
頭をおさえながら・・・・・・・・

シーンと静まりかえる内部
「な、何だっ！？？」

終わったか・・・・・・・・！？」

柱から身を乗り出し辺りを確認する不良の男

何もなくてホッと一息いれ
「こんな所にいたか！」

全身に氷柱が突き刺さる感覚が貫く

汗をだしながら機械のような動きでゆっくりと首を声のした方を見る

・ 割れた窓ガラスを踏み潰しながら近づく二人の悪魔が……………

「砂鉄時雨！！！」

サソリがビル全体に攻撃を仕掛けて自分もそれに紛れて侵入する

「何これ……………サソリって能力者なの？……………」

ただ呆然とサソリを見ることしか佐天には出来なかった

「大丈夫ですか！！佐天さん」

「白井さん！！！！どうして！！？」

「一般市民から通報が入りましたの

それで……………誰がこんなことを……………」

白井がボロ雑巾のようになった不良達を見ながら質問をくりだす

「さ、サソリが……………助けてくれて……………今……………ビルの中で幻想御手を使った不良と戦ってくれてます……………」

「本当ですの……………！！？」

（まずいですわ幻想御手を使っていると……………）

白井がビルの内部にレポートし侵入する

「何処ですの……」

カンカンとビルに自分の足音が反響を繰り返す

その時!!!

「ぎゃああああ

ゆるしてくれー……」

奥の方から叫び声が響いてきた

「あそこですわ!!!!……」

白井は走り出し部屋に入る

既に勝負がついたようで無惨にびくびくと震える男

「あれ……………
……………（サソリが頑張っ
て思い出しています）……………
……………忘れた
確か茶店にいたな」

男の傍らに奇妙なからくりを持ったサソリが眠そうな目で白井を見る

「白井黒子ですわ!!!!」

それにあなたがやったのですか!？」

「ああ、スゲー弱かったけど……」

その後警備員が片付けにきて事件は幕を閉じた

アンチスキル

いや始まりでもあった。

無事助け出された佐天は一人で商店街を歩いていく

（イヤだな……

この気持ち

同じくらいのサソリも能力を持っていたなんて……
別に無能力だと思ったから助けたわけじゃないけど……

）

ぎゅっ……

自分のiPodを握りしめた

そして虚しさが押し寄せてくる

もう何回も自分の無力さに嘆いてきた

自然と顔の部分がうつむいていく

「ルイコーーーーー」

パツと声のした方を見ると

「おひさ！

終業式以来」

「アケミ！

むーちゃん マコチンも」

中学校の三人の友達が手を振っていた

9、絶望　そして（前書き）

あ~~~~暗いよ~~~~!!!!

9、絶望 そして

サソリは不良達との喧嘩（というかりんち？）が終わった後

アンチスキル
警備員に連れられ

レベルアップについての取り調べ（まあ、証言です）を受けた

「どんだけ拘束するんだ………全く！！！」

ガチャッと取り調べ室の扉を開けサソリがフラフラと出てきた

長い時間、拘束されたサソリは軽くイライラしていた

「ちょっとよろしいですか？サソリさん」

「ん！？お前は………
………「白井黒子ですわ……」
ああ！！で何のようだ白井！？」

なかなか名前を覚えないサソリに白井が呆れながら名前を言う

「………少しお話があります………佐天さんについて」
ピクッとサソリが動く

近くの待合室みたいな所で白井にテーブルを挟んでサソリが座る

「・・・・・・・・・・というわけなるべく佐天さんの前では能力は使わないでくださるかしら」

そこで白井は

佐天が無能力であり本人はそれを気にしていると

サソリに説明をした

「・・・・・・・・・・」

しばらくサソリが黙る

「・・・・・・・・・・それは・・・佐天に悪いことをしたな・・・」

頭をかきながらサソリが重い口を開く

自分の無力さは知っているから

どんなに頑張っても越えられない壁

オレは親の死・・・・・・・・

佐天は自分の能力・・・・・・・・

苦しみは同じだった

「・・・わかった
努力しよう・・・」

「あら！！素直じゃないですか！！！」

白井が腕を組ながらサソリの素直さに感心する

「あと・・・ねべるあっぱーだったかな
あの男が使ってたのは」

慣れないカタカナ語を発音しつつサソリが聞く

あの時アンチスキル警備員が出てきた後

不良の男にとんでもない変化があった

「オレ タチは行ける
るんだ
実際にイけば わかる
だ」

目が虚ろになり言うことが意味不明の言葉を発している

白井にそのことを話すと
雑な洗脳によって起きていることを知った

今この状態になる患者の多くが「幻想御手」（レベルアップ）を
使用しているとのこと

白井と分かれサソリは商店街を歩きながら佐天の家へと向かう

しかし

ある考えがサソリの脳内を駆け巡る

近くのベンチに座り思考に集中していく

レベルアップ
幻想御手

能力値が上がる

洗脳

さらに思考を進める

無能力者でも使える

佐天は能力無し・・・・・・・・・・・・・・・・

ある恐ろしい考えがよぎる

サソリはいきなりベンチから立ち上がる

(ま、まさか・・・・・・・・・・)

辺りをキョロキョロし

「おい!!ちよつといいか?」

「何ですか!!??わたくしは急いでいるのですよ」

扇子を口元にパンとおき

高飛車そうな通行人を呼び止めた

「れべるあっぱー・・・・・・・・・・てどついう字を書く?」

「レベルアップー!!?」

そんな都市伝説のものを聞いてどうするのかしら!?

「いいから!!!!!!」

「そんな怖い顔しなくてもよろしくてよ・・・・・・・・・・」

ポケットから紙とボールペンを出し

漢字で書き始めた

「あゝ!!!!違う!!」

漢字じゃなくて・・・・・・・・・・えええと・・・

何だ!!!!・・・かぎかつこみたいな形があるやつ」

一生懸命説明するサソリ

「かぎかつこ・・・・・・・・!?

・・・・・・・・・・もしかして英語かしら

ちよつとまちなさい」

スラスラと英語を書いていく

「・・・・・・・・・・・・・・・・これかしら」

紙をひっくり返してサソリに見せる

そこには・・・・・・・・・・

先日佐天と一緒に見た文字と瓜二つであった

サソリは血相を変え走りだす

「ちょっと!!!!!!何なのよ!!!!?」

後ろで女性が何かを言っていたが今のサソリには耳に入っていないかった

(ヤバイ!!!!!!佐天が危ない何故気付かなかった!!!!!!???あの時気づいていれば・・・・・・・・・・)

サソリは佐天が行きそうな所を回っていく

「いない・・・・・・・・!!」

どこだ!?佐天」

茶店も回ったが姿はなかった

(何処だ！？絶対に使うなよ佐天！！！！！！！！！！)

自宅に戻っていればいいが・ ・ ・ ・ ・
真っ直ぐ家に帰ってくれば・ ・ ・ ・ ・

そんな淡い期待を込めサソリがドアノブを回す

ガチャ

開いた・
・
・
・
・
・

少しホツとするサソリ

だが……現実には容赦なくサソリを叩きつける

「あゝん」

おい！！大丈夫か」

ベッドの脇に死んだように倒れている佐天

サソリの中で佐天と自分の両親が重なる

またいなくなるのか

オレの前から・・・・・・・・・・

もう一つの考えが生まれる

茶店で会った女について

何かを隠している

脳の研究者・・・・・・・・・・・・・・・・

「あの女!!!!!!」

殺してやる」

サソリはこの世界に来て初めて本気で怒りだす

佐天のアパートから飛びだしていく黒い影

かつて S 級犯罪者を集めた組織「暁」に所属していた男

通称 赤砂のサソリ

天才的な傀儡さばきによって

多くの人を殺し

人傀儡の材料にしていた

その数 298 体

そんな彼がたった一人のために走りだす

遠くで誰かが静かに微笑んだ気がした

10、多重能力者（デュアルスキル）（前書き）

日に日にアクセスが増えていつて内心びくびくしています

小学生の時、作文が苦手で先生に呆れられたほどの作者なのに・・・

10、多重能力者（デュアルスキル）

事件の真相にたどり着いたサソリは木山を捜すため奔走していた・
・・・・

「クソ!!!!!!!!!!・・・一刻を争うな・・・あれで捜すか・
・・・」

サソリは巻物を取り出し三代目風影を出す

（とは言っても・・・オレは探査型じゃないからな・・・
膨大なチャクラを使うな・・・）

カッと目を開き風影をコントロールできる上空ギリギリまで傀儡糸
を伸ばす

上空にピタッと止まった風影を下から見上げながら

サソリは両手をクロスさせる形をとる

ガシャッ

上空に上がった風影の口が大きく開き砂鉄が溢れ始める

ズズズ・・・

ズズズ

（この街から出ていたらアウトだな・・・）

．．．．．よし」

「散らばれ！！！」

風影を中心に砂鉄の小さな塊達が四方八方に散っていった

（茶店で会った時！！

あの女の発している電磁波は覚えている．．．．．
．．．飛ばした砂鉄で街の主要道路全てに検問をはってやる！！！！
奴が砂鉄の間を通れば受信機の風影に伝わり
場所がわりだせるな．．．．．）

サソリはあっさりとやっているがこの考えを実行するにはリスクが
高過ぎた

膨大なチャクラを必要とするため
もし木山が検問を通らなかつたら
無駄にチャクラを消費し最悪の場合 死にいたるからだ

（必ず捜しだしてやる．．．）

その場で目を瞑り風影に意識を集中する

「そんな怖い顔をしないでくれ
シミュレーションが終われば みんな解放するのだから」

木山は学園都市の高速道路を車で走っていた

助手席には両手に手錠をはめられた初春が木山を睨み付けていた

「嘘だと思ukai?」

白衣のポケットから何かを取出し

「……君に預けておくのも面白いかもしれないな」
「？」

初春は木山の行動に警戒しながら機械をみる

「レベルアップ幻想御手をアンインストールする治療用のプログラムだ
後遺症はない
全て元に戻る
誰も犠牲にはならない」

「信用できません
臨床研究が十分でない物を安全だと言われても
何の保障もないじゃないですか」

「ハハ
手厳しいな」

「それに一人暮らしの人やたまたまお風呂に入っていた人なんかは
どうするんですか」

発見が遅れたら命に関わりますよ」

と言いつわった瞬間

ギヤ ギヤ ギヤ

ギヤ ギヤ

大きく車が進路からズレ

凄まじい蛇行運転になった

慌て車の進路を元に戻すが初春は一瞬何が起きたのかわからなかった

「……………まずいな

学園都市統括理事会に連絡して全学生寮を見回らせなければ…………

」

「想定してなかったんですか!？」

あまりの動揺に初春も顔色が悪くなる

木山が運転している車が黒い物体の間を通過していく

しかしあまりにも細かいので気付く者は誰もいなかった

「見つけた……………」

目をゆっくり開きサソリが木山の場所を見つけた

「佐天の友達もいるな．．．．．」

上空に飛ばしてある風影を回収しサソリが探知した場所に向かっていく

結構な量のチャクラを使ってしまった

「!!--」

目の前に黒い服を着た男が木山の運転する車の前に出現した

その直後木山の車がプスプスと音をあげ黒い煙を出しながら止まった

砂鉄によつて制御不能になったのだ

「やれやれ君も邪魔をするのか．．．．．」

木山が車のドアを開けて出てきた

「佐天にかけたものを解いてもらっぞ」

サソリはかつての殺人鬼のような冷酷な目付きで木山を見る

「私の用事が終われば全て元に戻すつもりだ（ちよつと予想外のことが起きたが．．．．．）それでいいだろ」

「お前の言ってるようなことは取引にならん・・・
双方に利益があって初めて成り立つんだよ
すぐに元に戻せ！！！」

サソリは風影の人傀儡をギシギシ動かしながら臨戦体制を作り上げる

「変わった能力を持っているな・・・」

それでも木山は普段と変わらず落ちついて話す
まるで何か秘策があるかのように・・・

その時！！

「そこまでだ！！木山春生
レベルアップ！
幻想御手領布の被疑者として拘留する」

アンチスキル
警備員が現場に到着した

「現場で少年を保護！！」

サソリは被害者のようにふるまわれた

「離せ！！オレはこの女に・・・！！！！」

木山の右手にエネルギーが集まり出し一気に放出する
「な！？」

「バカな！学生じゃないのに」

「能力者だと！！！！！！！！！！」

ドオン

凄まじい爆音が辺りに響きわたる

サソリは間一髪でかわしたが警備員がアンチスキルほぼ壊滅状態に陥った

「黒子っ

何が起こってんの？」

御坂がタクシーを降り爆発があつた所に走っていき
携帯で白井と連絡をとる

「それが・・・情報が混乱していて」

白井が現場で起きたことを御坂に説明していく

「・・・・・・・・・・・・この推測が正しいなら

今の木山は実現不可能と言われた幻の存在・・・・・・・・

「多重能力者」(デュアルスキル)」

御坂が現場に到着すると警備員がアンチスキル全滅し
所々火の気が上がっていた

キン

サソリが木山の能力を受け御坂の前に吹っ飛ばされるが体制をクルリと変え

ズザアアアア・

着地し運動エネルギーを摩擦で打ち消していく

「さ、サソリ！！（だっけ・・・）」

「あ、お前は……」

「御坂美琴!!」

「ああ

お決まりのパターンである

「君も来たか……御坂美琴……学園都市に七人しかない能力者（レベル5）か」

君に一万の脳を統べる私を止められるかな？」

11、電流と磁力（前書き）

サソリと御坂のチームプレーに注目

11、電流と磁力

ドム!!!

新たな爆発が高速道路で起きる

御坂とサソリが煙の中から抜け出す

「驚いたわ

本当に能力を使えるのね

しかも・・・

「多重能力者」(デュアルスキル)！」

「デュアルスキル・・・！？

おい何だそれ!？」

「え!？まあ・・・簡単に言うとは複数の能力が使えることよ・・・
・・・今まで不可能とされていたけど・・・」

「ふーん・・・そうか

考える限り厄介だな」

サソリの問に御坂が答える

「その呼称は適切ではないな

私の能力は理論上不可能とされるアレとは方式が違う言うなれば「
マルチスキル
多才能力者」だ」

木山が右手に力を入れると火柱が一気にあがる

火柱によって二手に分かれて突き進む

御坂は木山に電流を当てにいき

サソリは砂鉄時雨を

ガッ

ガァン

ヒュン

しかし木山の直前でぶつかりあい電流は消え
砂鉄は砂に戻る

ガキンッ

「!!!!!!?」

「へ!!!?」

火柱が消え二人がお互いを見る

「あんた能力者だったの!!!!!!?ちょっと邪魔しないでよ」

「邪魔してるのでめえだろ」

険悪になる二人

チームプレーが最悪だった

「.....とりあえずチームワークが苦手なこと

だけわかった」

木山がしまりがないなあと思いつつ

「さてと・・・」

木山の足元から円状に何かが広がっていく

ギヤアギヤア文句を言う御坂に耳を塞ぎたいと思ってるサソリ

「！！！？何かくるぞ」

「え！！！？」

足元を包む光

刹那

ズンツと高速道路にヒビが入りだし足場が崩れ始めた
「いつ！？」

何とか御坂は電流を流し
足に磁力を持たせ（ファラデーの電磁誘導の法則より）高速道路の
支え（ほぼ壁）に着地する

（何て奴

自身を巻き込むのもおかまいなしに能力を振るってくる
は！！サソリは）

キヨロキヨロと周りを見ると御坂と同じように壁に着地（チャクラ吸着）していた

再び視線を木山に戻す

崩れた足場から木山は液体のような物体を御坂とサソリに投げつける

御坂とサソリは支えから離れ液体をかわす

御坂は木山の隙について電流を流すがあまり効果がない

（あの娘（まだ覚えず）電流が使えるのか・・・・・・・・・・・・・・・・
・ならあれが使えるな）

「おい！！！！お前

強力な電流を左側に流せ！！！！」

「え！！何言ってるの・・・・・・・・・・・・・・・・左側って何もないわよ」

「いいから

言われた通りにしろ！！」

御坂はコインを弾き木山を向いていた体の左側に電磁砲レールガンを放つ

サソリは風影を御坂の上にあげチャクラを真下に流す

「何をするつもりだ・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！！！？グアアア」

木山は後ろに吹き飛んだ

何かの力が木山に襲いかかったのだ

「な、何したのあんた？」

「ん！！？この傀儡のチャクラは磁力を帯びているんだよお前の電流と垂直に磁力をぶつけるとどうなる！……」

サソリは風影を回収しながら答える

「あ！……！！！！ローレンツ力が発生する」

中学校の時にフレミング左手の法則を思い出した

（コイツさっきの一瞬でこれを思いついたの！！！！）

「ローレンツ力とは考えたものだな」

吹き飛ばされた木山が立ち上がる

服はボロボロであった

（そうか

ローレンツ力と言うのか）

一人用語を知らないサソリが納得する

「だがこれはどうかな・・・」

木山が御坂とサソリ目がけて大量の空き缶をばらまく

「!!!!!!?」サソリは木山の行動がわからなかったが

御坂は爆弾になることが過去の経験から分かり吹き飛ばそうと電流を溜める

そして放出し次々と空き缶を破壊していく

しかし御坂の死角から木山が空き缶を投げ

爆音とともに爆発した

「正面がだめならからめ手に回るまで」

木山が爆発を見ていると

後ろから

「つーかまーえたー」

爆発に巻き込まれたはずの御坂が木山をつかまえた

煙の中から砂鉄にまみれたサソリが出てくる

「ゲホツ・・・今のはやばかったな

空き缶にこんな特性をもたせるとはな・・・」

12、AIMバースト（前書き）

サソリ大活躍!!!

12、AIMバースト

「な、なぜ・・・!？」

御坂の拘束を解こうとする木山だが
がっちりと決まっけていて外れない

「サソリ!!!!いきなり過ぎんのよあんだ!!!!!!
死ぬかと思っただじゃない!!!!!!」

「うるさいな!!!!
少しは感謝しろよ」

「なにが起きた!？」
一人だけ分らない木山

「ギリギリだったぜ・・・・・・爆発する直前に傀儡系を
この女に付けかえあんだの後ろに飛ばし
再びオレの傀儡に付け替え砂鉄の盾でガードする
まあ、こんな感じだ・・・」

専門用語がバンバン出てあまり理解が進まないが
とりあえず動きだけはわかった

「そんな一瞬で・・・」

「これで零距离からの電撃・・・」

「勝負ありだな・・・」

木山に御坂が電流を流す

ズガッシャアアン

「ガッ」

「一応手加減はしといたけど
これでもう戦闘不能なはず」

すると・・・

（せんせー

木山せんせー）

御坂の頭の中に直接何が流れてきた

木山の悲しい過去を・・・
・・・

「今日から君達の担任になった木山春生だ
よろしく」

「「「「「よろしくお願いしまーす」「」「」

（これは・・・木山春生の記憶？

「高レベル能力者に憧れがあるのかな？」

「んーもちろん

それもあるけど

この街の役に立てるようになりたいなーって」

「怖くないか？」

「全滅！だって木山せんせーの実験なんですよ？
せんせーの事信じてるもん怖くないよ」

ビーーーーーッ
ビーーーーーッ

「広範囲熱傷による
低容量性ショックが・・・」

「乳酸リンゲル液
輸液急げー！」

「無理です！
これ以上は・・・」

「~~~~~・・・ッ

がふっ げほっ

げほっ がはっ げうう
「

「い・・・今は・・・」

「フーーーーッ

フーーーーッ

観られたのか・・・!？」

いきなり娘の様子がおかしくなったな・・・

「どうした!？」

何が起きた」

サソリが御坂に近づくが

「だ・・・だったら

辺りに触手のようなものをふりまきながら宙に浮かぶ
AIMバースト発生

初春が木山の車から目をさます（木山と警備員との戦闘によって気絶）

ドアを開け周りをみる

「道がなくなってる・・・」

途切れている道から下を覗きこむ

「何あれ？」

遠くてよく見えないが嫌な感じがした

「おいおい・・・・・・・・・・・・・・・・何だこれ・・・・・・
・・・・・・・・・・持つか」

サソリの体に変化が訪れていた

（体が重い・・・・・・・・・・・・・・・・や
りあの探査か）

チャクラがきれかけていた
そのため傀儡の動きが自然と鈍くなる

「ぎっ？　ぎ？」

「キィヤアアアアア」

ガァン　ドォン

AIMバーストはやたらめったに衝撃波を打ち出していた

「~~~~~ッ何なのよ

アレ

ぬグッ」

御坂が電流を放つ化け物に当てる

しかし受けた所は一時は欠けるがすぐに再生を果たす

「砂鉄時雨！」

サソリが右手を前に出し

左手を下にさげる

すると風影は左肩を露出し何かが体から飛び出す

ギン

キュン

砂鉄の形状が変わりバーストにふりかかる

しかし

すぐに再生をする

「チツ……殺傷能力重視の形状にしてもだめか」

チャクラが足りない

御坂は警備員を助け作戦をたてていた

「なら一旦退いて態勢を……」

「そもいかないのよ

あの建物何か分かる？」

指差した方向を見るとドーム状の建物があった

「原子力実験炉」

「マジ？」

御坂は顔をあげて

「サソリ……あの建物に近づけさせないで
破壊されたら最悪の事態になるわ……！！！！！！」

「何……！！あれか………チャクラがすくね
ーが」

サソリが思いつ切り風影を前に飛ばし右手を引く

すると

風影の左腕がパカッと開き中から不思議な文字が姿を現す

カシュ カシュ

サソリは右手の形を変える

「ソオラア！！」

左腕から飛び出して行く無数の手

ズオオオオオオオオ

中指で操作し狙いを定める

バーストの上に風影の無数の手が覆い被さり

「オラア！！！」

一気に地面に叩きつけ進行を阻害する

「ぎい？ ぎ？」

無数の手の下でもがくバースト

「う………ん」

気絶していた木山が目を覚ます

目の前に飛び込んできたのは暴走するバーストの姿だった

「すごいな

もはやネットワークは私の手を離れ・・・・・・・・おしまいだな」

腰から木山が拳銃を取りだし
引き金を引こうとする

「ダメエーーーーッ」

初春が木山を押し倒し自殺を止める

「・・・・・・・・どうすれば
あれを止める事ができますか？」

「今の私は何を言っても君は信用できない!!!!!!!!!!」

じつと木山を見つめる初春

「いいえ

木山先生は嘘をつきませんから」

木山は少しうつむき話だす

「預けた物は持っているかい？

ネットワークを破壊すれば止められるかもしれない」

初春はそれを聞くとある場所に走りだす

ギィ ギニィィィ

「くっ！……！もうもたねーぞ」
ドォー………ン

バーストはサソリの傀儡の無数の手を破壊し再び空中に姿を移す

キィアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

13、決着（前書き）

ようちくです。

13、決着

初春は木山に破壊された高速道路の上にのぼり

アンチスキル
警備員の車（テレビ局のようなアンテナがついた）に乗りこみ

木山から受け取った

レベルアップバー
「幻想御手」アンインストールするプログラムをセットしていた

「ああ 時間がない私が許可する

今から転送する音声ファイルをあらゆる手を使って学園都市中に放送してくれ」

トランシーバーのような物で警備員が指示を出していた
アンチスキル

「あ……えー

ここで番組の途中ですが臨時ニュース

あ いえ

臨時のリクエストです」

街中のラジオやスピーカーから不思議な音楽が流れ始める

レベルアップバー
（ワクチンソフトを流すことで「幻想御手のネットワークを破壊する
うまくいけばAIMバーストの暴走を抑えることができる）

だがそれでもヤツは万人の力場の塊・・・・・・・・

バーストがサソリ目がけてエネルギー波を放つ

パアアア

「やべ！！クツ・・・・・・・・」

サソリは風影を操作使用よとするが・・・・・・・・

風影は動かず

「な！！！！」

ドオオオオオオオオン

何とかサソリだけは間一髪でかわしたが
風影は巻き込まれた

（いよいよか・・・・・・・・・・・・・傀儡系も維持出来な
くなった・・・・・・・・・・）

本格的なチャクラ切れであった

「はあ・・・はあ・・・」
サソリの息が乱れ始める

（さあ、どうする
どうやってコイツを倒す・・・）

眼前に迫るバースト

バリバチバチバチバチ

「大丈夫！！？サソリ」

御坂がバーストに電流を浴びせる

バーストは黒焦げになりその場に落下する

「再生しない・・・」

「・・・・・・・・・・」

幻想御手のアンインストールが完了した

「気を抜くな！まだ終わってないっ！！」

「!!!!!!?」

「!!!!!!!?!?」

木山が左肩を押さえながら二人に近づく

「どういうことだ……」

「アレは普通の生物の常識は通用しない
体表にいくらダメージを与えても本質には影響しないんだ」

「……………!!!!!!そういうことか……………」

サソリは何かを察したように吹き飛んだ風影の傀儡の所に走って行った

サソリは殆どないチャクラを使いもう一度傀儡を動かす

左側はほぼ吹き飛ばされているが

ギシギシと音をたてて立ち上がる

サソリはとんでもないことをしていた

これ以上チャクラを消費することは……………

死へとつながる

「そんなのどうしろって

言うのよっ!？」

御坂が声を荒げて木山に問いかける

「核があるんだろ・・・!!」

サソリが傀儡を携え御坂の前にやってきた

「その通りだ

あの力場の塊を自立させている核がある」

サソリはそれを聞くとバースト目がけて大きく跳躍していく

(最後の絡繰りだ・・・)

風影は再び

ズズズ・・・

ズズズ

砂鉄を吐き出す

その砂鉄をサソリが右手で操作し

みるみる形づくられていく

「はあ……はあ」

砂鉄でできたと長方形が出現する

やはりチャクラが足りていないのか
所々砂鉄が崩れ始めている

サソリは大きく両腕を振りかぶり
バーストに向け長方形の砂鉄を当てにいく

長方形の砂鉄は形状を変えていき鋭い針となりバース

ドドドドドドドドドドドド
ズブウ

バーストを貫く

サソリはバーストを貫いた砂鉄を指差しながら

「おい……はあ……はあ

御坂！！ここに電流を流せ！！強力なヤツをだ……………」

サソリもはや立っていることができないらしく

地面にうつ伏せで倒れている

「アンタ大丈夫!!!!」

「早くしろ!!!!」

もうチャクラがねー・・・・・・・・・・」

御坂はコインを取出し避雷針となつた砂鉄に向け放つ

レールガン
電磁砲を・・・・・・・・

御坂のレールガンは砂鉄を通り熱を帯び出す

その熱が核を正確に捉え破壊していった

バーストが消滅を開始すると同時に砂鉄も消えていった

キュリー温度のせいか

サソリが意識をなくしたせいか・・・・・・・・・・

辺りに静寂が戻る

14、目覚め（前書き）

次回からほのぼの編になります

14、目覚め

病院の屋上で佐天が自分の両手を眺めて立っていた

「佐天さんっ！！！」

「！」

佐天が声のした方を見ると初春が息を「はあはあ」させながらドアを開けていた

初春は目を覚ました佐天を見るとホッとした

「やあ初春」

「やあじゃないです！」

病室にいないから探したじゃないですか？
起き上がって大丈夫なんですか？

どっか痛かったり吐き気がするとか・・・」

心配する初春をよそに佐天は楽天的に答える

「アハハ

ちよっと眠ってたただけだもん
すっかり元通りよ

能力が使えないとこまでね」

「やっぱり・・・・・・
そうですか」

落ちこむ初春に佐天がぎゅとだきつく

「？

佐天さん？」

「ゴメン

つまらない事にこだわってズルして初春を危険な目にあわせて
バカだよあたし」

目をつむり自分のした過ちを反省していた

「あ！！！！！佐天さん」

ガバツと初春がだきついていた佐天を離し

「・・・・・・・・！！！！？」

目をぱちくりさせながら佐天が驚く

「実はサソリさんが・・・・・・・・」

初春にサソリのことを聞いた佐天は慌て階段を降りていく

「そんなにヤバイの！？

サソリって！！！！」

「今でも意識が戻っていないそうです
あっ！！次の所を左です」

初春の言う通りに左に曲がると御坂と白井が座っていた

佐天達に気付くと立ち上がって手を振りだす

「よかった・・・気が付いたんですね」

「御坂さん・・・・・・・・ごめんなさい！！！！あたしの自分勝手に・・・・・・・・」

「いいんですよ！！」

・これからは落ち込んだりした時は遠慮しないでわたくし達に相談してください！！」

「はい・・・・・・・・」

白井の言葉に涙をにじませる佐天

「それよりも佐天さん！！」

サソリのことなんだけど・・・・・・・・」

「先生！！この子・・・・・・・・」

「なんて・・・・・・・・傷あとなんだ・・・・・・・・随分前につけられた傷だな」

ある病室でサソリが横たわり手当てを受けていた

未だに意識がもどらない

手当てのために上着を外れた時に露になったのが
サソリの痛々しい傷であつた．．．．．

サソリの傷はバーストとの戦いでついたわけではなく

転生前に人傀儡として自分の身体を改造していた所が
転生後に深い傷になり身体に刻みこまれていた

それは無事の所がないほど．．．．．

「正直．．．．．サソリがいなかったら全員危なかったわ．．．
．．．．．」

サソリの機転のおかげで何度も命を救われたの．．．．．」

「そうなんですか．．．．．」

一緒に戦つたサソリを思い出しながら御坂が佐天に報告する

「佐天さん．．．サソリさんはあなたが倒れてから一人で真相に
たどり着いて木山と接触したのですよ．．．．．」

あなたを助けるために・・・」

うつむく佐天

すると・・・・・・・・

ガチャ

病室の扉が開き医者 of 先生が出てきた

「先生！！！！どうですか！！！！サソリは！！！！」

「・・・・・・・・あの少年の身内の方ですか」

「いえ、あたしの家に居候させてますけど・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

佐天が医者に飛び付いてサソリの容態を聞く

「あの少年は依然として意識が戻らないが
命に別状はないよ・・・・・・・・ただ・・・」

命に別状がないという発言に胸を撫で下ろすが医者 of 「・・・・ただ・
・」という言葉聞いて一同は緊張する

「彼の過去を知っている人はいるかな？」

首を横に振る

「・・・・・・・・・・彼は壮絶な人生を送ってきたらしい」

病室に佐天達を入れる医者

そこには傷のない所が見つからないほど痛々しい傷痕を持つ

上半身裸のサソリが横たわっていた

「!!!!!!」

「な!!!!!!」

「ひどい・・・・・・・・」

「あの戦いで!?!」

痛々しいサソリの姿を見た四人は表情を凍らせた

「・・・・・・・・・・この傷痕は随分前につけられたものだよ・・・・・・・・・・
・・・・・・・・五年・十年は経っている」

知らなかったし

そんな素振りも見せなかった

あたし・・・・・・・・気づかなかった・・・・・・・・

佐天がよろよるとサソリに近づき

サソリの手を握る

「サソリ．．．．．早く目を覚まして．．．．．」

ここはどこだ．．．．．

サソリは不気味なほど真つ白な空間にいた

「死んだのか．．．．．」

朧気ながら記憶を呼び起こす

チャクラが無くなり

目の前が真つ暗になっていった．．．．．

アイツ（バースト）にとどめをさせただろうか？

佐天は無事だろうか？．．．

そんな問いが頭の中でグルグルしていた

(サソリ・・・・・・・・)

「!？」

目の前に黒いローブを着た人
おそろしく
が現れる

(お前は昔と変わった・・・・・・・・かつての殺人感情も冷酷さも
・・・・・・・・)

たしかに

この世界に来てなくなっていた

オレの冷たくなった心が・・・・・・・・

(とある事情によつてな・・・・・・・・お前の考え方
殺人感情も全て変えさせてもらった・・・・・・・・)

「な、何!？」

記憶があるが・・・・・・・・

「何のためにだ・・・」

黒いローブを着た人にサソリが睨み付ける

(おそらくあと少しで

お前の行っている世界で大災害が起きる

お前にはそれを止めて欲しい・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・そろそろ時間だ)

「!!!!!!?」

サソリの身体が臍氣に光出す

「おい、まで!!!!!!何が起きるんだ!!!!!!」

(頼んだぞ
サソリ)

おもむろに黒いローブをはぎ取り

姿をサソリに見せる

「!!!!!!・・・・・・・・オレ?」

そこには・・・・・・・・

かつて暁で暴れていた頃の傀儡の身体だったサソリ(自分)がいた

視界が変わる

「!!!!!!?」

サソリが目を覚ますと病室に横になっていた

「ここは……身体がうまく動かん」

何とか首だけを持ち上げ周りを見る

「佐天……」

自分の寝ているベッドの脇で佐天がサソリの手を握りながら寝息をたてている

（よかった……）

サソリがホッとすると

「佐天さーん……何か食べないと身体に毒ですよ……
……サソリさん目を覚ましたのですか!!!!!!」

病室に初春が買い物袋片手（ポカリとおにぎり入り）に入ってきた

「ああ!!!まだ身体が動かねーが……」

「よかったです……佐天さんはサソリさんが目を覚ますまで……ここにいて……」

「ん．．．！！！」

そうこうしている間に佐天が目覚めます

「目が覚めたか．．．」

「あ．．．！！サソリ！！！」

．．．．．ごめんなさい！！！！あたしのせいで．．．

」

佐天がおもいつきり

抱きついてきた

「別に気にしてなんかねーよ．．．．．スマンな心配かけて！

」

佐天は涙をためて大きく泣く

帰ってきたんだ

サソリは視線をかえ空を見る

それにしても

この世界に起きる大災害とは何だ．．．．．

15、プールにて（前書き）

復活ほのぼの編スタート

次回 サソリがツツコミ役になります

原作を大切にする人は読まないほうがいいかも・・・

15、プールにて

レベルアップ
幻想御手事件が無事解決した

しかしサソリが目覚めた時に御坂・白井コンビがいなかったのは・
・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・規則破りには罰が必要だそうは思わんか
？」

「はい・・・（涙）」

門限を見事に破り御坂と白井は自分の寮に侵入しようとするが

寮監に見つかりあえなく失敗した

「で

結局課せられたのが

このクソ広いプールの掃除・・・」

門限を破った罰はプール掃除だったが・・・・・・・・・・

広さが半端なかった（対角線上の梯子が米粒に見えるほど・・・・・・）

耳障りなセミの大合唱と夏の厳しい暑さにより
御坂は「愚痴の一つでるわ……！」と言わんばかりに文句を言っ
ていく

しかしコンビの相方 白井は

（ウうえっへっへっへ

ラッキーですわ

水場で汗だくな濡れ濡れのお姉様………）

声に出したら明らかに

アンチスキルに突き出されそうな妄想を膨らませていた

（距離を縮めるチャンス）

「おねーさま……！」

炎天下の作業には水分補給が必須ですよ
わたくしの特製ドリンクはいかが？」

鞆から水筒を取り出しニコニコしながら白井が渡そうとする

しかし……！

「いらな……い

アンタこないだ伝票の品名が「パソコン部品」になってるあやしい
クスリ取り寄せてなかったっけ」

御坂は床をはくブラシの手を休め白井を見る

「まさか

その中に入れたりしないわよねえ？」

冷たい・・・視覚と聴覚に感じる感覚をまとめると
こんな日本語が弾きだされる

白井の身体中からよくわからない液体がドバツと流れる

「い・・・いやですわね

あ あやしいモノなど入れるはずが・・・」

上の文章の読み方

注）喉の奥に力を入れ、かすれるような声でお読みください

周りに誰もいないことを確認する

例）呪怨の女の人の「あ・・・あ・・・あ」という鳴き声

「やっぱりか」

白井を無視し掃除を再開する御坂

「で でも味には自信が・・・っ」

慌てて弁解するが無駄であった

そんな二人の元に

「あら

どなたかいらっしゃって？・・・・・・・・・・白井さん？」

白井が振り返ると競泳水着に上着を着た姿の女の子
二人組がいた

一人は癖毛があり

もう一人は少しショートカットした女の子だった

白井は自分達の現状を説明する

「門限を破った罰ですのー」

「それはお気の毒ですわね」

苦笑いをしながら答えるショートカットの子

「あら

あの・・・失礼ですが
み 御坂様でして？」

「あ まあ一応」

二人の女の子は顔を見合せ

「あの・・・今・・・人探しをしまして」

「!!!? 誰を・・・」

「いえ・・・名前を名乗らず行ってしまったので・・・
わたくしが・・・」

回想

「いーじゃん

この辺 不慣れなんだろう？」

「オレらが

エスコートしてやるって」

癖毛のある女の子の周りを取り囲む三人組の不良

「あ あの」

(ど・・・どうしましょう

男の人って怖い・・・)

あまりの恐怖に身体中を震わせる

とそこへ・・・

「何やってんだ・・・」

男達が見ると

燃えるような赤い髪を持ち目に隈のある男が立っていた

夏にもかかわらず分厚いコート（そう見えた）を着ていていかにも怪しい人

「なんだてめえ！！！」

「ぶっ殺すぞ！！！」

赤い髪の人を取り囲む

その人はすごいスピードで不良達を蹴り上げ一瞬で片付けた

「群れなきや何もできないヤツめ……………」

「あ　あの」

男の人は気付かずそのままいなくなってしまった

「ということがあったんです……
どうしました？」

口をパクパクさせて驚く御坂・白井

（間違いなく
それサソリじゃない）

（あの殿方・・・・・・・・こんな所にフラグを・・・・）

「いや・・・・・・・・アイツ・・・・」知っていらっしゃるのですか？」

御坂の声がかき消された

「いや知ってるには知ってけど・・・・・・・・」

「ぜひその人のことを教えてください！！！！」

お礼をまだ言っていないので」

顔を赤らめたながら聞いてくる

なぜ・・・・・・・・

「なかなか人の名前を覚えられない人ですわよ・・・・・・・・」
わたくしなんてまだ

まともに呼んでもらっていないですわ・・・・」

腕を組んでプーとふくれる白井

「え！！黒子

まだ名前覚えもらっていないの！？

私はあの騒動の時に呼ばれたけど・・・・」

バースト戦の時に・・・・・・・・

「な！！！！お姉様あのとの・・・・」

「違つわよ黒子・・・」

眼中になしという感じで
ため息を吐きながら否定する御坂

「何なんでしょう?」

首を傾げる癖毛の女の子

16、買い物大作戦その1（前書き）

やっちまっ たぜ

サソリファンの人すいません!!!

16、買い物大作戦その1

「今回皆さんにお集まりになってもらったのは・・・ズバリ サソリさんの服装のことですわ!!!!!!」

夏の炎天下の公園に白井の声が響く

「それなのに・・・（ビシイと佐天を指差す）
なぜ!!その本人のサソリさんがいないのですか!!!？」

ベンチに座る佐天がビクツとする

「いや・・・サソリも来るように言ったんだけど
「傀儡を回収しに行く」

って言うって出掛けて行っちゃった・・・・・・・・くぐつつ
て何ですか？」

左手で頭をかきながら佐天が答え質問を返す

「ん・・・・・・・・何か変な人形を操ってたけど・・・・・・・・アレかしら？
こうやって」

両手を前に出しうねうねと動かす

すいません うなぎにしか見えません・・・

「でも・・・これからどうするんです？」

「フフン！！いい質問ですわ初春・・・・・・・・これからサソリの
普段着を購入しに行くつもりでしたのに・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・ああんも！！！」

頭を押さえ大きく振る

「てかさ・・・・・・・・なんでそんなに黒子躍起になってるの
サソリに対して？」

顔をムクリと上げ

「いいですか！！！！サソ리さんと知りあってから彼はずっとあの暑
苦しい服で過ごしているのですよ！！！！！！
ジャケット
風紀委員がそれを見逃すわけにはいきません！！！！！」

ポカーンとする三人をよそに白井の熱弁が続く

一方そのころサソリは

「見つからん・・・・・・・・」

サソリは相変わらずのムスツとした表情で
AIMバーストが暴れていた高速道路の下に来ていた

しかし目的のモノが見つからずさらに不機嫌になる

「ああ・・・・・・・・まさか現場にいた奴らが持ってたのか！？・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あの騒
がしい女（白井のことです）か御坂（やっと覚えた）が知っている
か・・・・・・・・！！？」

ゆっくりとその場から離れて行く

「はあ・・・・・・・・それにしても暑いわね」

カンカンと自己主張をする太陽を見る御坂（眩しいので間接的に・・
）

「そうですね・・・・・・・・」

四人で公園で売られていたアイスクリームを舐めながらベンチに一
列に並んで座る

ちなみに

御坂・・・・・・・・イチゴ味（つぶつぶ入り）

白井・・・・・・・・チョコチップ（過去の反省より）

佐天・・・・・・・・バニラ味
シンプル

初春・・・・・・・・チョコミント（白井に友食いですわ
と言われた）

「食べ終わったらどこか出掛ける？」

佐天がみんなに提案するが「何処に行く？」という質問にはみんなが黙った

アイスクリームを舐める白井の視界が夏に不向きの黒い服を着た男を捉える

「あ！！！見つけましたわ！！お姉様アイス（チョコチップ）を持っててください・・・わたくしと間接的な接吻^{ベーゼ}が欲しかったらどうぞ！！！」

シュツと白井が空間移動^{テレポート}をしてその場からいなくなる

「いや・・・いらないうて・・・」
両手にアイスクリームを持った御坂が呟く

（さて何処だっけ・・・あの女がいるのは・・・）

サソリのあまりに変わった姿に通行人は誰もが視線を集中させる

本人は気にしていないが・・・

グイイイー

「!!!!？」

誰かに暁の装束の開いた首元を引っ張られた

サソリが後ろの方を見ると白井が笑みを浮かべながら服を握っていた

「見つけましたわ!!」

[illegible]

ちようど「さあ、ついて来てもらいますわよ」

サソリにお構いなく白井がテレポートをし元の場所に戻る

シュツと

元いた公園に白井とサソリが到着する

「さ！サソリ！！！」

アイスクリームを舐めていた手を休め立ち上がる佐天

[illegible]

白井を見て固まるサソリに「いい加減に覚えろ……！」
と言わんばかりに白井が怒鳴る

サソリは佐天の食べているのを見ていた

「佐天・・・何を舐めている・・・？」

「ん！！これ？・・・はい味見する？」

グイッと自分のアイスをサソリの前に差し出した

「ああ・・・」

サソリは差し出された物をおそろおそろ舌で味見する・・・

佐天はサソリが味見したのを確認すると再び

アイスを舐め始める

「じゃあ・・・これ食べたらサソリの普段着買いに行きますか？」

佐天が提案をするが

御坂　白井　初春　は顔を赤らめて口をパクパクさせていた

「どうしたのみんな？」

鳩が豆鉄砲食らったような顔して・・・

「・・・さ、佐天さん！！」

今のつて・・・・・・・・？！！」

「へっ！！？」

「明らかな接吻^{ベーゼ}ですわ・・・・・・・・間接的な・・・」

「佐天さん凄いです・・・・・・・・」

上から御坂・白井・初春が驚きながら佐天に言う

佐天は自分の握っているアイスクリームと先ほどのことを思い出す・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
カァー／／／／／／／／／／／／／／／／
／／

一瞬で顔が沸騰したかのように真っ赤に染まっていく

「い・・・・・・・・いやっ・・・・・・・・これはちちち違うによ
ばらなす・・・・・・・・」

凄まじい勢いで動揺する佐天

後半、何言ってるかわからない（ばらなす？）

ちなみにサソリは

「なかなか旨かったな・・・・・・・・」基本的に甘い物が好きらしい

17、買い物大作戦その2（前書き）

うーんイマイチかな!?

17、買い物大作戦その2

「さ、佐天さん……サソリとそんな関係なの……？」

「ちちち違いますよ……ただサソリっていると／＼／＼／＼／」

顔を赤らめて否定する佐天

「そういえば……佐天さんの部屋にサソリさんが居候してますよね」

初春さんそれは「火に油を注ぐ」行為と言つのですよ

さあ——みなさんも御坂と白井と一緒に

「えええ——」

「……」

「どどどどどいつとですの……」

「うわぁ……（声に出せないタイプ）」

佐天と初春はそういえば

説明してなかった・・・・・・・・・・という感じで顔を見合わせる

そんなこんなで説明!!!!

省略・・・

説明終了

「そういうことでしたの・・・・・・・・」

佐天達の説明で納得する・・・・・・・・
というわけにはいかなかった・・・・・・・・

「ではなんでサソリさんとかかか間接的な接吻^{ペーゼ}を・・・・・・・・」

そうでした――

そっちの問題が終わってなかった――

佐天が両目を塞ぎ天を仰ぐ

「さあ、詳しく聞かせてもらいますわよ!」

ちなみにサソリは・・・・・・・・「オレは何のために連れてこられたんだ・・・・・・・・」

まるつきり蚊帳の外であつた

「えつと・・・・・・・・サソリと暮らしているけど・・・・・・・・なんつうか・・・・・・・・無害そのものでして・・・・・・・・警戒心もなくなるから

いつもあんな感じですよ・・・・・・・・はい」

何故かベンチの上で正座をする佐天

「つまり・・・・・・・・殿方と一緒にの空間にいて・・・・・・・・何もしていない・・・・・・・・どういうおつもりですのサソリさん!!!!!!」

急に矛先が変わった――サソリになつたし!!!!!!
怒る所そこ!?

御坂と初春の無言のツッコミ（意味なし）

ビシィーとサソリを指差す白井

しかし

サソリは・・・・・・・・

「・・・・・・・・別に・・・・・・・・

そついやお前・・・・・・・・黒井・・・・・・・・白井・・・・・・・・?
・・・・・・・・オレの傀儡持ってたのお前か?」

さらに話しが逸れていく

特に話しに進展なし

佐天とサソリの生活

サソリの傀儡について

またの機会で・・・

いつもの四人とサソリでセブンスミストに来ている

「サソリに似合うのねー！？どれが似合うかしら」

「これなんかどうです」

真ん中にひまわりが描かれているＴシャツは？」

「だめよ！！アイツ・・・絶対に花とか踏み潰すタイプだから・・・
やはり黒系かしら？」

佐天と初春がなんとかサソリに似合う服を探していた
「とりあえずこの服とこの服・・・はい」

「オレはもう帰りたいのだが・・・」
試着室に押し込まれたサソリに佐天が服を渡す

佐天と初春が選んだ服は

黒を基調としガラスが割れて飛び散る瞬間をイラストにしたＴシャツ（夏を先取りセール！！にて陳列）

何故・・・・・・・・？

一方そのころ御坂・白井コンビは・・・・・・・・

じーーーーー

「お姉様・・・・・・・・それはさすがに・・・・・・・・」

御坂が見つめているのは

可愛いフリルのついたパジャマと

変身なりきりゲコ太（推奨年齢 5歳）

サソリはそんなの着ません・・・・・・・・

「これでいいのか・・・！？」サソリが試着室から暁の装束から着替えＴシャツを着る

ここで新たな問題に佐天と初春が気付く・・・・・・・・

「あ．．．傷痕．．．」

Tシャツから露出した真つ白の腕から痛々しい傷が顔を覗かせていた

ガラスのイラストとの相乗効果により迫力倍増

「長袖ですね．．．」

コクンコクン

初春の提案に黙って首を縦に振る佐天

（はあ．．．早く帰りてえーな．．．）

サソリがセブンスミストの蛍光灯を眺めながら思う

結果．．．

黒を基調とした長袖と青色のジーンズ
を数点

花柄のシャンプーセット（↑？）

「お姉様．．．」

「いいじゃない．．．私が使ったから．．．あ、サソリも使いたいじゃあ買ってくるわよ」

「・・・・・・・・いらね」

サソリも御坂のセンスについていけなかった

18、水着のモデルその1（前書き）

きりがいいのでー!!

最近は呪怨にはまっています・・・オカルト好きなので

18、水着のモデルその1

どこかの研究所

「すごいわ・・・こんな技術見たことない・・・」

眼鏡をかけ黒いハチマキのような物を頭につけた研究員がしきり何かを分析していた

「たしかこれがあの怪物（AIMバースト）を倒したそうですね」

またしても眼鏡と白衣を身に付けた女の人

ピツとモニターに電源がつく

それを見る研究者は知的好奇心が抑えられないような感じで・・・

「砂鉄をここまで操るデク人形・・・造った人に会いたいわね」

「しかも上の話だとこの技術を大量生産する計画もあるそうですよ」

「そうね

システムズ

「妹達」計画もあるから忙しいわね」

不気味な笑みを浮かべて分析に入る研究員

常盤台中学校

「あつついわね」

そろそろ外で食べるのもつらいか・・・」

「そうですね、日焼け止めのクスリも強い物にしないと・・・」
太陽が激しく赤外線を叩きつけ地表の温度をもれなく上げていく

そんな中に御坂と白井はテーブルにサンドイッチ等を広げランチタイムをしていた

「もちろん塗ってますわよね～!?」

お・ね・え・さ・ま」

「なんでよ?」

ガシャンと白井が円いテーブルを叩く

「なんでじゃありませんの!! 紫外線はお肌の大敵

その美しい肌がシミだらけになったら大変ですよ

さあ・・・わたくしが体の隅々にまで塗って差し上げますわ」

「いいつてば!!!!!!」

白井が右手にクリームを出しながら御坂に塗ろうとする
しかし御坂は迫りくる白井の両手を掴みそれを阻止!!!!!!

そこに近づく二人の影

「白井さん・・・」

「湾内さん・・・」(白井がそのままの体勢で)

「泡浮さんも・・・」(御坂も)

そこにいたのは

水泳部の湾内と泡浮であつた

ちなみに湾内は不良に絡まれていた時に助けてくれた赤い髪の少年
(分かると思いますがサソリです)
を探している

「実はお願いがあるのです」

「水着のモデル??」

「はい、水泳部がお世話になっているメーカーからどうしてもって
頼まれたんです」

「今度のWebカタログに載るらしいですけど」

湾内と泡浮も席につき説明をする

「先輩方は大会で忙しいし参加できる部員は私達しか……」

「フーン」とする御坂に横から……

「お姉様！せびお引き受けしましょう（キラッ）」

うーんと御坂が悩んでいるとさらに……

「あの……もう一つあるんですけど……女性モデルだけじゃなくて……その男性モデルも欲しいそうなんですけど……わたくしの周りには……」

「顔が広い御坂さんならオススメの人を知っていると思いますて」

そう聞いた御坂と白井の頭の中に……

赤い髪

隈がひどく残る目元

夏なのに分厚い服をいつも着ている男……

サソリの姿が浮かぶ

「どうする黒子……アイツは……」

「あまり女性に興味がない人ですから適任と言えば適任ですよ……」

それにおそらく湾内さんを助けたのもあの方ですし．．．いいと思いますわ」

もちろんヒソヒソ話である

「でもアイツ！．．．モデルの事引き受けないでしょ！．．．」

「その点はご心配なさらず．．．くぐつと呼ばれる物を探しているのでそれを餌にすれば楽勝ですわ」

さりげなくひどいな．．．

「．．．．．？」

「．．．．．？」

何を話しあっているかわからない二人は首を傾げる

19、水着のモデルその2（前書き）

ネットが出来る人にオススメの動画を紹介します

YouTubeで「絶叫」恐怖体感呪怨 実況プレイ」と入力してください

凄く面白いです

初めて呪怨で大爆笑しました！！

19、水着のモデルその2

「あ！！！！来た来た！！」

御坂さんこつちですよー」

「佐天さん達！！随分早いねまだ集合時間十分前だけど・・・」

手をブンブン振る佐天に御坂達が合流する

「いや・・・サソリが「オレは人を待つのも待たせるのも嫌いだ」
って言つて早めに連れてこられた・・・」

横目でサソリを見る佐天につられてみんなもサソリを見る

「ごめんね・・・急に水着のモデル頼んじゃつて」

「いいですよそんなの！！」

（ここから小声で）

でもサソリにはモデルのことを伝えてないけど・・・大丈夫
ですか？」

サソリには傀儡が見つかったと嘘をついて連れてきました（本物は
不明・・・）

怒らしたら怖いぞ～～

「おい」

サソリが先日買った黒い長袖の服に青色のジーンズに身を包んだサ

ソリが御坂達に近づいていく

「・・・・・・・・オレの傀儡は何処にある・・・・」

やっぱり聞いてきた

白井がすかさずサソリの前に出る

「まあー、あなたはそれしかないのですか？

人との交流も必要だと思えますわよ

それまでくぐつはお預けですわ！！！！

いいですわね！！！！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

サソリは目を見開いて驚き
他のみんなは別のことに驚く

「え！！サソリを説得する」

「秘策つて・・・・」

「それ・・・・？」

白井さん．．．背中から凄い汗です．．．

「で．．．具体的に何をするんだ．．．．？」

表情を変えずにサソリが問う

「それは着いてからの

お・た・の・し・みです

では行きましょう」

白井が先頭をきつて先に進みその後ろをサソリが着いていく

「サソリ．．．モデルのこと聞いたら何て言うんだろう．．．．」

「心臓バクバクだったわ．．．．．」

「私．．．十年寿命が縮みました．．．．」

上から御坂 佐天 初春

の感想でした

サソリとちよつと離れて移動する三人

さあ．．．どうなるんでしょう！！

「白井さん」

「湾内さん」

友達も連れてきましたけど・・・よろしいですか？」

「全然構いませんよ・・・あれが男性モデルおをぬ・・・んーーーーん」

口を塞がれる湾内

「ん・・・どうした・・・？」

「ホホホホホホホホ・・・
何もありませんわよ」

（良いですか・・・あの方は気難しいのであまり話かけないほうが
よろしくて）

（でもそれではモデルが出来ませんよ・・・白井さん）
サソ리를背にヒソヒソと話をする白井と湾内

「何やってるんですか？」

白井さん・・・」

泡浮も白井に近づく

「な、何でもありませんわよ」

湾内から慌て手を離す白井
その後

御坂達と合流し一向は
モデルをするために撮影会場に向かうのであった……
サソリはまだ知らない

20、水着のモデルその3（前書き）

感想に「擬音が多い」というものを頂きましたが
これは私が尊敬する小説家の先生の影響です
（擬音をたくさん使ってますよ）

ちなみに・・・

物語の段落が変わる時の

「*****」も同じ

20、水着のモデルその3

「「はあ〜!!」」

初春と佐天が撮影会場のビルを見て思わず声が出る

「なんか企業って感じ!!」

「ちょっとドキドキしちゃいますよね!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一人だけ何をするか分からないサソリは偵察するように建物を見回る

(やっぱり・・・・・・・・どこかであった気が・・・・・・・・赤い髪ですし)

湾内がサソリを見ながら思っている

「お待たせしました!!」

奥の方から秘書の仕事をしていそうな女の人が若干の早足でかけてくる

「あの人は？」

「え!!あ・・・メーカーの担当さんですよ」

佐天の質問にサソリの方を見ていた湾内が驚きながら答える

担当は集まった人達に近づき

「今日はよろしく願いしますね．．．．．あれ!？
後の二人は？」

「二人？」

白井が反応する

その時!!!

いかにも高飛車そうな声が彼女の耳に侵入を果たす

「あら白井さん．．．？」

「こ．．．この声は．．．
首をギイイイと向けると

「あらまあ大勢でそろそろと社会化見学か何かかしら!!」

入口の方から着物を着て
いかにもお嬢様みたいな
感じの婚后光子と

ジャージに眼鏡をかけた

白井と初春の風紀委員の先輩 固法先輩が歩いて近づく

「婚后光子．．．あなたこそ何です．．．その格好は？
休みの日も制服で外出するという校則．．．お忘れですの．．．
？」

「今日のわたくしは常盤台の生徒ではないの．．．一人のモデル
(はっ!!!)として参上しましたの!!!」

あ!!!!!!!!!!!!!!

白井を筆頭にみんなが一斉に固まった

「え!!何か・・・?」

「どうしたの?みんな」

何も知らない固法と婚後
をよそにおそるおそる
後ろの方を向く

「・・・・・・・・モデル・・・!?

どういうことだ!!白井・・・・・・・・」

サソリが無表情のままじわじわと白井に近づく

「いや・・・あの・・・そのですわね・・・」

かなり動揺する白井とビビる他の人

しかし・・・

「ん・・・あ!!あなたはこの前の無礼者じゃありませんか」

「あ・・・・・・・・誰だ!?!」

エアープレイカー
空気破壊の婚後が話を強引に進める

まあ簡単に言うと「空気の読めない人」です

ちなみに・・・サソリが幻想御手^{レベルアップ}
の綴りを聞いた通行人が偶然にも

婚後であつた

「・・・・・・・・まあいーや・・・
白井・・・・・・・・」

再び白井達（必然的に）に視線を移す

「ちょっと！！わたくしをむし・・・黙れ！！」・・・う・・・」

サソリのあまりの迫力に一步下がる婚後

「もうだめですよ！！白井さん・・・・・・・・くぐつても知らないって言っ
たほうが・・・」

「ば、バカ！！初春・・・」

佐天が慌て止めるが間に合わず

「・・・・・・・・知らない・・・！？・・・」

ひひひひひひひひ

壁ぎわに追い詰められていく全員

「で……今日は何をするんだ……」

怒られるかと思っていたがサソリは予想外の言葉を発する

「お、怒んないの……?」

御坂が勇気を持って聞く

「……オレは別に怒ってないぞ……確かに傀儡を持つていないことには驚いたがな……??. . .なぜそんなに怖がる」

「いや、サソリを連れてくるために嘘をついたから……ごめんね」

「ごめんなさいですの」

両手の手のひらを合わせるようにして謝罪する

佐天と初春

「……嘘をつくときに重要なのは内容じゃなくて……嘘をつく人の心情を知らなければならない……お前達がそこまでのには何か理由があるんだろ……?..」

さらりと凄いことを言う

サソリ

みんながホッと一息入れるが

「か、かつこいい・・・」

顔を赤らめて見惚れる

佐天と湾内・・・

21、水着のモデルその4（前書き）

ダメだ・・・ここはサソリの絡みが出来ない!!

次回からかな・・・

21、水着のモデルその4

サソリに本日のモデルのことを説明する

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ボサボサとした赤い髪に手をあて

無表情を印象づける隈のある目が一点を見据えたまま黙るサソリ

やがて、自分の考えがまとまったのか頭に置いていた手を離し

「・・・・・・・・・・ここまで来たら仕方ねー・・・・・・・・やってやるよ・・・・・・・・」

第一関門突破の瞬間であつた・・・

今まで肩に力を入れていた白井達はその言葉を聞くと「ふう〜」
という空気の漏れる音と一緒に体が重くなり
その場に崩れ落ちる

すごいキンチョー感が伺える!!!!

サソリは今回の件に関しては「白井の責任」ではなく

白井の言葉を信じてしまった自分の責任だと感じていた・・・・・・・・

サソリが暁に所属していた頃

情報一つで戦局が大きく変わるため

情報を信用するには十分な裏付けがなければならない……

サソリ自身も信用にたる情報かどうかを冷静に分析してきたから

暁の幹部にまで上り

多くの人間を殺し

人傀儡の材料にしたり

悪魔のような実験をすることができた

しかし今回……サソリは疑うこともせず白井の言葉を信じてしまった

これはかなりの心内変化であつた

確実に普通の人間に変わっていくサソリ……

だけど……サソリは

人間には致命的な感情を無くしていた

それにはまだ誰も気づいていない……

（試着室）

もちろんサソリと分かれています……

試着室にはこの夏トレンドの水着が所狭しと並んでいる

赤い生地に白い水玉のついたビキニ

レインボーカラーの水着

等……

流行に敏感な女子高生がこの空間に入れば1日中楽しめそうな感じの雰囲気

「どれでも好きな水着を選んでくださいね」

担当さん（他に呼び方が見つからない……）が手を前で握りながら説明

「……はぁい」「……」

小学生の返事みたいに大きな声で反応し
それぞれが自分に似合う水着を探す

湾内と泡浮は

「これいかがですか？」（友達が似合うのを真面目に探すタイプ）

「ステキですわ！」（真面目に反応タイプ）

佐天と初春

「あー！これかわいい」

「こつちもいいですよ」

（自分の意見と相手の意見を尊重するタイプ）

白井

「ふーん……これもイマイチ……これもイマイチ」

（予想と違いますわ……タイプ）

つと白井がハンガーにかかっている水着をカチカチと手にしたり戻

したりして
ダメ出ししていく

そこへ・・・天敵の婚后が

「まだ選べないんですの!？」自信に満ちた笑みを浮かべたまま白井の横にサツと並ぶ

「仕方ありませんね・・・」

わたくしが選んで差し上げますわ」(押し付けタイプ)

「結構ですの!！」

ブイツと横を向くが婚后は無視して話を進める

「ホルターネックの水着は・・・・・・・・・・・・・・・・」

婚后の水着講義(頼んでませんの!!!)が勝手に開講していく

「あなたの胸だと・・・・・・・・うふ・・・お気の毒!！」

(＆人を引きずり落とそうとするタイプ)

未発達な白井の胸を見下ろしながら

(着物とマッチしています・・・・・・・・)

「あなたとはいっつかきつちりとお話をつけないけませんね・・・」

白井と婚后の間に火花がバチバチと流れる(古いな!!!)

御坂・・・

「はぁーーーーッ」

かわいらしいフリルがつきカラフルな水玉模様の水着に惚れ惚れする御坂

そのような気付いた佐天が初春を呼びおだて作戦を開始

ミッションスタート

始めに佐天が「ああ！！！！それかわいいですね」

「え！？」

すかさず初春が攻める

「ホントだ！！フリフリもいい感じです！！！！！！」

「え・・・やだあ！！違うよ

別にこれを着たいと思ったわけじゃ・・・」

と言っているが内心では

「着ちゃおうかな・・・」と

グラグラと揺れている

「あたし見てみたいなあ

御坂さんのその水着姿！！」

「私も！！ぜひ来てみてください！！！！」

両側からの誘惑・・・

しかしまだ御坂の理性は崩せない

「いやいや・・・さすがに・・・これは・・・」

否定の言葉が少なくなってきた

あと少し・・・あと少しで
いけー！！トドメを！！

「そう言わず・・・試着だけでも」

出たあーーーーー必殺

「試着だけでも」

洋服売り場の常套手段！！

この言葉に数多くの主婦が飲み込まれて行った！！

試着の言葉に反応する御坂

「そ、そう？・・・そこまで言うなら・・・」

ついに理性の砦を破った

しかし！！！！

後ろから思わぬ伏兵・・・・・・固法

「あら・・・御坂さん！！子供っぽいデザインが好きなのね・・・」

「・・・はっ！！！！」

最も言っではいけない一言を・・・

「ううん、私は・・・これ」

と手に取ったのはスクール水着

（もちろんフリフリなし）

逃げるように試着の所に入り

カーテンをシャーツと閉める

「何で・・・素直になれないんだろ・・・」

試着の所の壁に額を押し付け落ち込む御坂

かける言葉が見つかりません・・・

22、水着のモデルその5（前書き）

書いててむず痒くなりました・・・

おいおいどこまで続くんだった！？水着のモデルは

22、水着のモデルその5

結局それぞれ選択したのは……

湾内……黄色と緑の見事なグラデーションのビキニ

佐天……白と水色のビキニ（パレオ付き）

泡浮……黒と藍色の競泳水着
スタンダード

初春……オレンジ色の花（楓？）の柄がちりばめられているワ
ンピース

御坂……無念のスクール水着（素直になれないから……）

「ちょっと恥ずかしいですね……」

もじもじとしながら初春が顔を赤らめて自分の姿を再び見る

「女同士なんだし!!」

照れることないって!!」

佐天が手を前にヒラヒラさせながら言う

「お待たせしました」

後ろの試着室のカーテンが開き中から白井が出現した

「「「えっ!!」（げっ!!）」「「「

白井の水着姿に奇妙な声を出してしまった4人

その姿は……

女性の恥ずかしい部分をギリギリ隠しているだけの水着（これはビ
キ二なのか？……）

しかも紫^{パープル}！！

しかし当の本人は納得していない様子で

「うーん……おとなしめのデザインしかなくて
いま一つですが……まあ規制品の水着でしたら
せいぜいこんなものでしょうか……」

白井……お前が納得する水着はどうなってしまつのですか？……

誰もが考えた疑問である

佐天「なんと言うか……」

初春「流石白井さん……」

湾内「こ、個性は大切ですわね」（動揺……）

泡浮「え、え……」

（言葉が出てこない）

みんな言いたいことがあるなら言わないと（おだてると調子に乗る娘ですよ）

さらに・・・

「お・ね・え・さ・ま〜！！

この程度ではモノたりないでしょうけども・・・我慢してください
！！」

クネクネと体を揺らし御坂に自分の身体のアピール
（未発達の・・・）

サソリ・・・見たらどう思うだろう（作者も不安です）

「あゝら皆さん！！

その程度ですよ！！？」

白井の天敵（同種）

婚后登場！！

Vネックライン（胸元を深くカットしたデザイン）
の赤い水着（装備アナコンダ？・・・）

「これぞ！！オーディエンス聴衆が求める究極の水着モデルですわ！！」

顔の隣で蛇の中で立派な体格の持ち主（アナコンダ？）が頻繁に舌
を出したり
引っ込めたり・・・

「『ひいひい』」
蛇！！！！！！！！」

壁ぎわにいき蛇から距離をとる5人・・・

まあ、日本人の大半がこの反応！！

「怖くないですよ・・・」

意外に初春が平気であつた

しきりに頭を撫でようと左手を持つていく
凄い笑顔です・・・

「早くどこかにやって下さい！！！！！！！！」
佐天が耐えきれず叫ぶ

「うふん、どうですか？
白井さん！！？」

蛇が木から木に飛び移るような体勢になつたためさらに距離を縮める

「センスの悪い小道具ですの・・・」
顔が強ばっていますよ
白井さん

ちなみに蛇は小道具ではありません（一応・・・）

「うん」

不意に隣の試着室から声が聞こえ全員が視線を変える

「ちょっとキツイけど・・・

これ以上サイズないし
しかたないか・・・」

固法先輩の攻撃力抜群の身体に思わず固まる

白いブロックが敷き詰められた部屋に案内された

佐天達

「遅かったな・・・」

既にサソリが来ていた

水着は・・・黒の海水浴用の水着（膝くらいまである）を着ていたが

佐天達は他のことに驚く

「」「真っ白！！！！スッゴい真っ白！！」「」「」

サソリの脱いだ上半身が長い間日光にさらされていないように白かった

おそらく夏の炎天下にこれを見たら眩しくて姿を確認できないほど・
・・

「でも凄い傷痕ですわ・・・・・」

（やっぱり見れば見るほど助けてくれた男の人に似ていますわ・・・
・勇気を出して話かけてみましょう）

痛々しいサソリの傷痕に驚きながらも
心の中で決意をする

23、水着のモデルその6（前書き）

これにてモデル編終了!!

次回いよいよ

あの計画が始動します

23、水着のモデルその6

サソリの驚きの白さにびっくりしながらも撮影スタート

ちなみに自動撮影なので（さすが学園都市）
カメラを意識せず自由にしていいていいそうです

担当さんがリモコンのような物で操作すると白い空間が徐々に変化
しだし

水着撮影の会場が現れる

どこまでも青い海

太陽の光を一心に受けるヤシの木

遠くの積乱雲（入道雲）が背景に広がる
バック

憧れのオーシャンビュー！！

いざモデルを！！

と言われても何をしたらよいかわからない8人は暫くその場に屯する
たむろ

しかしそんな中……

「自称一流モデル」の婚後がビーチベッドに横になりポーズを決め
どこから撮っているかわからないカメラに備えている

流石というか……

「自然体と言ってもあれは違うわよね……」

御坂がそんな婚後を見ながら苦笑している

とそこへ……

「お姉様！！！！わたくし達もやりますわよ」

「やるって……何を？」

「勿論！！自然体でサンオイルの塗り合いっこですわ！！」

ギリギリと獲物に狙いを付けたように白井が御坂に
近づく

「またそれか！！！！」

御坂は即座に踵きびすを変えて白井から逃亡を図る！！

「あゝん待つてください」

どこにいても変わらない二人

「何やってんだ……」

普通の男性なら女性だらけの場にいたらテンションが上がりまくって大変なことになるが

サソリは普段と変わらない表情で日光の光を遮るパラソルの下に座

っていた

又ルッ

「!!!!!!?」

背中に何やら冷たい感触が広がる
慌て首を後ろに向けると

佐天が日焼け止めのクリームをサソリに塗っていた

「何やってんだ……」

「え!!!!いや……白い肌保護団体（意味不明……）の活動で」

人間はあまりに白すぎる肌を見た時に保存しようと務める生き物である

「あ、あの……つかぬことをお聞きしますが……わたくしのことを見たことありますか？」

佐天のクリームから逃れようと一悶着起こしている
サソリに湾内が前屈みになり視界に入るクセ毛をどかしながら質問する

意外にもサソリは人の名前は、なかなか覚ええないが
一度見たものは忘れない
という性質を持っているため容易に思い出す

「あの時・・・絡まれていた女か・・・」

「やっぱりそうですか!!」

あの時は助けて頂きありがとうございます!!」

深々と笑顔でお辞儀をする湾内

「大丈夫か?・・・あれから・・・」

「はい!!お蔭さまで・・・」

楽しそうに会話をする二人

イラッ

佐天は自分でもわからない気持ちが先行してくる

(なんだろ・・・凄いやだ・・・) 佐天はいてもたってもいられず

「サソリ!!あっちの方行こう」

「あ!!どうし・・・おい」

サソリの左手に自分の手を絡ませ無理矢理引き離す

グイグイとサソリの手を引っ張りながら佐天は考えていた

よくわからないイライラ感について・・・

佐天のよくわからない行動に首を傾げるサソリと湾内

その後水着のモデルの撮影は快調に進み（そうらしい）
夏休みの思い出が増えていき

佐天の不思議な行動の正体とは？

物語は中盤へとさしかかる

24、不穩の影（前書き）

第二章スタート!!!

24、不穩の影

学園都市内

某研究所

人型の物体にカプセルのような物が覆い被さり
赤色の光が物体を通過していく

ピッピッ

通過された部分がすべてモニターに転送されるようで内部構造が映しだされている

「これは驚いたわ・・・」

眼鏡をかけ頭の所に黒いバンダナをつけた女性がモニターにつながっているパソコンのキーボードを操作し

所々拡大したり

モニターの右側にはおそらく成分が表示されているであろう項目が次々と現れている

「これ・・・本物の人間を材料に使っているわ

どうりで・・・」

フフフッ

誰かしらねえ・・・こんな怖い兵器作ったのかしら？」

別のモニターに監視カメラの映像が映る

電撃を出す女の子と一緒に戦う赤い髪の少年

ピツと一時停止をしモニターに近寄る
白衣の女性

「知りたいわね・・・
こんなデク人形の造り主のこ・と
おつとそろそろ・・・
あれが出来上がるわね・・・」

白衣の女性はそのままモニターの電源を切らず
部屋から出ていく

「さっそりー！！」

昼間はオムライスでいいかしら？」

佐天が台所のフライパンにバターを少量溶かし
首だけをリビングの方にむけ質問をする

「オレは別に・・・かまわんが・・・」

隣の部屋の佐天がいつも横になっているベッドに方膝をたてて座る
サソリが返事する

首が引つ込み台所から

ジュージューという音が聞こえ始める

「・・・・・・・・」

サソリは顔を下の方に向け思考に入る

（白井もオレの傀儡の．．．ことを知らない
一体何処に行つたんだ．．．．．
動く．．．．．か．．．）

「サソリ、どうした？
出来たよ」

テーブルに料理が並ぶ

オムライス

「そついえばサソリ！！
くぐつて何なの？」

佐天がテーブルごしにいるサソリに今まで疑問に思っていることを
聞く

「ん．．．話してなかったか．．．傀儡は簡単に言つと
操り人形のことだ
その人形に数々の武器を仕込んだのがオレの武器だ
別名 かいらい」

「へえ」（わかつたような分らないような．．．）「

国語辞典に出てきそうなほどの説明に思わず頷く

（だが．．．一度敵の手に落ちたら
オレの仕込みのクセがばれてしまう．．．．．
それだけは避けなければ．．．．．）

傀儡師にとって自分の傀儡の仕込みのクセが知られるのは死活問題であつた

どこかの路地裏

「も才壊れちまつたかア」

血だらけでドサツとつつ伏せに倒れるゴーグルをかけた女に白い髪
の男が言う

右肩を裂傷した女に男がさらに頭を踏み潰すかの如く足を思い切り
振り上げ降ろす

しかし寸前でかわし
手に持っていた大きな銃口を男に向け発射！！

チイイ

奇妙な機械音があたりに響く

「さアて問題」

確かに当たつたはず弾がコンクリートにめり込んでいた

アクセラレータ

「一方通行は果たして

ナニをやつてるでしょオカア！？」

アクセラレータ

一方通行・・・学園都市No.1のレベル5あらゆるモノの「向き」

（ベクトル）を変える能力を持ち
たとえ核ミサイルの直撃を受けても傷一つつかない

現在・・・前人未到のレベル6に進化^{シフト}するためにシスターズ計画に
よって生み出された人間を殺し続けている

その殺され続ける人間が・・・

御坂のクローンであつた・・・・・・・・

「俺は今 血に触れている」裂傷した御坂のクローンに人差し指を
つけ悪魔の質問を開始する

「この血の「向き」（ベクトル）を逆流させると
人間の体はどうなっちゃうでしょうかア？
・・・・・・・・

正解者には安らかな眠りを♪」

辺りに血を大量に流し

絶命してしまった

御坂の善意で渡したDNAマップが全ての始まりであつた

量産異能者^{レディオノイズ}「妹達」^{シスターズ}の運用における超能力（レベル5）「一方通行」^{アクセラレータ}

の絶対能力者（レベル6）への進^{シフト}化

実験スタート・・・

25、風影（マシン）（前書き）

第二章では一人だけ「オリジナルキャラ」を入れたと思います

悩んだ末の決定です

25、風影（マシン）

アクセラレータ

一方通行が御坂のクローンを殺害してから数分後の路地裏

「ど．．．どうなっている!？」

傀儡についての情報が全く入らず不機嫌になっているサソリが何気なく入った路地裏であの御坂が死んでいるのを発見した

「．．．．．」

（アイツほどの能力を持っているやつが簡単に負けるはずがないが．．．．．）

「おい　そこにいるのかー？」

「!?!?!？」

後ろから若い男の声が近づく

サソリは一瞬で壁にチャクラ吸着で張りつき動向を見る
壁に垂直に座るようにし手を下にダラリとさせる

すぐに男がサソリの視界に入ってきた

「ミサ．．．」

血だらけの凄惨な光景に固まるツンツン頭の少年

サソリもこれほど相手を出血させる能力（忍術）は見たことがなかった……

（どうやらあの……男は御坂の知り合いらしいな
しかしなぜ……？）

読者の方はお分かりだろうが

サソリの目の前にいるのは「上條当麻」である

右手に幻想殺し（イマジンプレイカー）という謎の力が宿っている
高校生

サソリは奇妙な感覚を覚え壁に張りついたまま路地の奥を見やる

目の前にある死体（御坂）と全く同じ気配がしているからだ

一人、二人の規模ではない……大量の人間が蠢く（うごめく）感覚
だった

上條はサソリの存在に気付かず携帯電話を慌て出しながら路地裏の
入口へと走っていった

サソリはその隙に

壁に対して垂直に立ち何かが蠢く路地裏の奥に慎重に向かう

奥にいたモノはサソリの想像を遥かに超えていた

大量の御坂が一同に集まっていたのだ

数は20人程だろうか！？

とりあえず自然現象ではあり得ない光景に

思わずダラリと下げた両手に力が入る（硬直）

「なんだ．．．．．アイツは造られたのか．．．．．」

無数の人体実験をしてきたサソリにとってその考えに至る時間はそんなにからなかった．．．

（しかしあの御坂はゴーグルを付けていない．．．）

そう．．．決定的にサソリの知ってる御坂とは違う点が目元や額につけたゴーグルである

上から見ているためゴーグルと御坂の顔はよく見えていない

ガシンッ ガシンッ

明らかな機械の足音が

サソリのすぐ後ろから聞こえる

「！！！！？」

サソリが振り返ると（壁に張りついているので実質

空を見る体勢になる)

「ば・・・バ力な・・・」

サソリの後ろにいたのは・・・

サソリの傀儡

三代目 風影であつた

しかし装甲は、もはや傀儡ではなく
機械に体を侵食されていた・・・

変わっていないのは顔の部分でサソリはそこで判断する事ができた

夜になり月光の淡い光に写しだされ不気味にサソリを見下ろしていた

「モクヒョウブツハツケンホカクスタート・・・」

目から緑色の光を出しながら・・・

「マズいな・・・」

サソリは足に集中していたチャクラを弱め壁から切り離す
当然 サソリの身体は重力により地面へと落下していく

ザッ

サソリは着地後すぐに上を見上げ
風影の変わり果てた姿を見る

緑色の目がサソリを捉えるだけでその動きに変化はなく壁に垂直に立ち（重力の影響により前屈みの体勢）続けているだけであつた

周りにいる御坂達がいなくなつていた

「一体……何が起きている………ドウッ
！！！！？」

左側の腰の部分に鈍痛が広がり全身が痺れ始める

顔を苦痛に歪ませながら肩ごしに自分の背中を見下ろす
かなり大きめの毒針が皮膚を突き破っている

意識が朦朧とする

（急速な意識障害……
身体の痺れ……間違いない……「バトラコトキシン」だ……
）

バトラコトキシン

心毒性、神経毒性を持つ

毒物

フグ毒の中で最強の毒

「パリトキシン」に次ぐ猛毒である

サソリの身体から急速に自由を奪っていく

（くっ……）

立っていらなくなりその場に崩れ落ちる

薄れゆく意識の中……発射したであろう物体がサソリの前に鎮座していた

腹這いの姿勢に四肢を獣のように立っており

背中の中から大きな手のような物が一つ飛びだしている

そして顔は風影の傀儡と瓜二つ

口を大きく開き細長い銃口が見えている

サソリの意識が身体から離れていった

「モクヒヨウブツホカクカンリヨウ……「サソリ」……」

26、実験中止（前書き）

サソリがピンチです

26、実験中止

サソリが風影^{マシ}に捕まった2日後

一方通行^{アクセラレータ}レベル6への進化^{シフト}実験は今夜も静かに行われていた

誰もいない貨物置き場

「おら 死ぬ気で避けねエと
ホントに死んじまうぞ？」

一方通行が御坂のクローンに一氣に間合いをつめ
御坂のクローンの首元に
「トン」と左手を撫でるように当てる

強制的に力の向き（ベクトル）を変えられ信じられない衝撃が御坂
のクローンに襲いかかる

あまりの衝撃に身体が空中で半回転し頭から地面へと叩きつけられ
てしまった

「ハアッ ツハ」

なんとか身体を半分だけ起こしているが
傷だらけの身体で対処できる相手ではない

「さあて 質問だ

オマエは何回殺されてエンだっつのっ！！！」

一方通行が間髪入れずに御坂に次々と蹴りを決めていく

左肩 腰 両足・・・
ありとあらゆる所に蹴りが入り再びベクトル変換され大きく吹き飛ばされる

そこに二人の間に割り込むツンツン頭の男
上条当麻であつた

「御坂妹から離れろつつつてんだよ」

「わりと簡単に捕まえられたわね」

「そうですね」

医療用のベッドに横になつてゐる赤い髪の少年を見下ろしている二人の眼鏡をかけた白衣の女性

「で・・・どうするんですか
彼の頭脳で完成させるって聞いていますけど・・・」

「心配しないで大丈夫・・・この子の脳内のデータを一気に集める機械（試作品）があるから
まあ、実験もかねてやるから命の保障はないけどね」
コーヒーを口にしつつ今回の実験の説明をするバンダナの女

「あー！そうだ・・・あと妹達シスターズを使つた
レベル6への進化実験シフトは中止になるって」

「え！！本当ですか！？」

あまりの驚きに手に持っていたコーヒー入りのカップから数滴こぼれた

「上から・・・確実にレベル6にする実験があるってね・・・この少年を使って・・・」

笑みを浮かべて横たわるサソリの頭を撫で上げる

「ま！！中止の連絡は彼に伝わるようにしておくってよ
アクセラレータ
・・・えっと今夜は

貨物置き場」

貨物置き場では上条と一方通行の激しい（一方的な）な戦いが繰り広げられていた

一方通行がベクトル変換によって蹴り上げた鉄骨が正確に上条の顎を捉え

大きく体勢を崩し倒れこむ

咄嗟に受け身をとるが

「全然遅セエ！！」

一方通行が上条に向かっていき両手をまるで何かを包みこむような構えをしている

上条も負けじと右手の拳を握りしめ一気に突き出す

ドッ

意外にもダメージを受けぶっ飛んだのは一方通行であつた

上条の右手に宿る幻想殺し（イマジンプレイカー）が効力を発揮し一方通行の能力を打ちやぶつたのだ

その後も上条は一方通行の攻撃を掻い潜り（かいくぐり）ながら確実に右手で殴り続ける

しかし

学園都市最強の能力者である一方通行は大気の空気の向き（ベクトル）を変え上条を風力により遠くのコンテナに叩きつけた

衝撃により上条の頭からおびただしい量の出血が流れている

「アクセラレータ一方通行！

動かないで」

右手にコインを持ちいつでも超電磁砲レールガンを撃てる臨戦体勢をしていた御坂は自分の身を犠牲にして実験を終わらせようとしていた

学園都市所有のスーパーコンピュータ「樹形図ツリーダイアグラムの設計者」の導き出した計算を翻せば実験が終わると確信していたからだ

自分のクローンを守るため
何より上条当麻を守るため

直後空に青色の発光体が駆け巡る
「プラズマ光電離体」の発生であつた

一方通行の凄まじい演算により発生した物体
このままで大きくなれば

この辺一帯が吹き飛ぶほどの破壊力を持つ

しかしその直後

奇妙な人型の物体が空から飛来し地面に着地した

不思議なことにプラズマだらけの空にいたにも関わらず
全くの無傷の機械が御坂達の前に現れたのだ

「実験は中止！！！」

実験は中止！！

目的の物手に入れた」

御坂にとって目にかかるのが二度目になる

サソリの使っていた人形にそっくりであった

あれほどメカニックだっけ……？

27、読み取る者（前書き）

暗いよゝ．．．

後少して半分オリジナルキャラがでます

たぶん．．．皆さんに喜んでもらえると思います（ファンの人には特に）

27、読み取る者

学園都市内

某研究所

意識不明のサソリをとある部屋に運び入れる途中

まるで手術室に向かわされる患者のように・・・

「でも・・・この少年の頭脳をコピーするって言うてますけど・・・
・・・どうしてですか？」

カルテのような（厚い下地に紙がとめられている）物を脇に抱えて
いる女の研究員が質問する

「あら？知らなかった

この子は凄まじい天才だからよ・・・彼が使っている

「カラクリ（傀儡）」が私達

（学園都市）にはない技術が使われているのよ」

サソリの造り上げた

人傀儡は材料にした人間が生前に扱っていた術を使うことができる
（生前のチャクラを宿したまま造られる）

それが人傀儡の最大の利点であり

数多くいる傀儡師の中でもこれを造り出せるのは

サソリだけであつた

レヘルアップ
幻想御手事件が解決した時に秘密裏に回収された傀儡が
この三代目 風影であつた

しかしいくら研究や実験を重ねてもオリジナルの砂鉄を操る能力は
大量生産することが出来なかつた

似たような形は学園都市の技術で大量に造れてもである

そのため「失敗作」^{デキそこない}が増え
仕方なく数々の武器を所持するに留まつた

そこで考えついた（最終手段）のが今回の「サソリ」の捕獲である・
・・・

そこでサソリの脳内を全てコピーし技術の完成を目指す・・・・
しかしそれが本当の目的だろうか？

ウィーン

サソリの身体が自動ドアの間を通過し
ものものしい機械が所狭しと並んでいる部屋だつた

女の研究員はサソリの身体を抱き上げカプセルに入れていく
無事に入れると頭の部分に機械を取り付ける

「これが試作品の「読み取る者よ」
パラケルスス
テストメント
学習装置の逆バージョンみたいなモノよ」

読み取る者人間の脳内回路を解析しコンピュータに写しとることを
パラケルスス ブレインコード
可能とした装置

なお試作品につき

・ 予期せぬ事態が想定される使用者は自己責任で実験を行うように・

ポチッ

パラケルススの電源が入り機械音が部屋に響きわたる
ギョル ギョル
ギューイイイン……

解析開始

貨物置き場で機械の身体を持つ物体が
アクセラレータ
一方通行の実験の中止を発表した

「はあア!! どういうことだ実験中止だア!!」

ギシギシと顔が一方通行の方を向き

「実験中止!!」

実験中止！！

目的のモノが手に入った」

聞いていて不快感を覚えるような声で再び同じこと言っている

「ちっ！！話にならねエなぶっ壊すかア！！」

一方通行が不気味に蠢く物体に先ほど発生させた
高光電離体を落とそうとしたが

キイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイ

大きく口を広げこの世の者とは思えない声を上げる
風影

「こ、これって・・・

「キャパシティーダウン」！！！」

頭に両手を当て苦しがる

御坂と一方通行と御坂クローン

御坂クローンはレベルが低いため御坂達と比べて若干軽度

「な、何が起こってるんだおい！！御坂！！」

一人だけ無能力者の上条には耳鳴り程度にしか聞こえない

しばらくすると不気味な声が収まり風影の背中からプロペラが2基
出現し

バラバラッと空に飛び上がり目的があるように飛び去って行った

いつの間にか一方通行の発生させた高光電離体プラスマが消えている

しばらくその場に沈黙が流れた………

突如として御坂の右ポケットに入っている携帯電話が音を鳴らす着信のようだ

ピツと携帯電話の通話ボタン押すと
ひどく慌てた様子で

「お姉様！！！！大変ですわ
サソリさんが2日前から戻っていないそうですー！！！！」

28、最強のチーム（前書き）

アクセラレータ
一方通行が仲間に入りました。

次回サソリの中に眠るモノが目覚めます

28、最強のチーム

サソリが行方不明となり

アクセラレータ

御坂、御坂クローン、上条一方通行白井、佐天、初春が貨物置き場に集合していた

「クソッ！！俺の実験が中止だとオ！！」

「落ち着け！！！！と御坂は声を大きくして言ってみる」

オマエ・・・さっきまで殺されかけていただろ・・・

「でも佐天さん・・・サソリがいなくなって凄く落ち込んでいますよ」

「しかしですわ・・・手掛かりが少な過ぎますし・・・

アンチスキル

警備員に頼んでも難しいですわね・・・」

見事に意見がバラバラであつた（仕方ないが・・・）

「でもさ黒子・・・サソリはぐつを探していたのよねもしかしたらそれが関係しているかもしれないわ」

頭をグシグシとかきながら今回の件ついて話だす

「くぐつ・・・！？」

御坂クローンが何かを思い出すように顎の部分に手を当てる

一番サソリがいなくなって落ち込んでいるのは佐天であつた

「・・・・・・・・グズッ

あたしがじつかりしなかったから・・・・・・・・サソリ・・」
涙を隠すように体育座りの体勢で頭を埋めている

サソリがこれほど自分にとって大切になってしまっていた・・・・

レベルアップ

一度幻想御手事件が終わった後にサソリが

「・・・・・・・・能力なんて関係ないぜ・・人間がこれから生きる
ことに比べれば・・・・・・・・随分小さいことだ・・」

相変わらずの無表情であつたがその言葉に幾度も救われてきた

佐天は水着のモデルの撮影の時にサソリが他の女性と話をしている
のが我慢出来なかった

佐天は今までにない感情が心から押し寄せていた

夜・・隣の布団に寝ているサソリを何度も眺めるのに夢中になっている

「あ・・・・・・・・あたし・・」

サソリに会いたい

瞳を閉じれば不器用に笑うサソリの姿

やっぱり・・・・・・・・あたしって

サソリの事が好きなんだ
いや・・・・・・・・それだけでない

大好きになっていた

それだからサソリがいなくなるだけでかなり動揺している

怖い・・・サソリを失うのが怖い

小刻みに震えている佐天の姿に黙る一同だが
この人だけが申し訳なさそうに聞く

「あの・・・質問いいですか?!

その「サソリさん」って誰何でしょうか?」と上条が

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

別の空気殺し（エアブレイカー）がここにもいた

御坂と白井と初春がやつつけ仕事のように説明した

説明終了

「そういうことでしたか

じゃあそのサソリさんについての特徴は何だ?」

「え!!!!一緒に探してくれるのですか?」

「勿論だろ!!御坂達の知り合いなんだから
助けるのは当たり前だろ

それで特徴は・・・?」

上条が胸元に拳を握りしめ「俺にまかせろ!!」と言いたげな顔で御坂達を見る

（あ!! かつこいい・・・

ハッ!!! 何考えてるの私!!）顔を赤く上条を見つめていた御坂だが

ハッとしたように首をブンブンと横に振る

何も知らない人が見ればおかしい女の子として処理されるであろう

「そうですわね・・・特徴は

髪が赤く短髪でいつも黒系統の服を身に付けていますの!!」

ピクツとするの御坂クローン

「ちよつといいですか・・・

とミサカは思い出したことを話します」

御坂クローンが手を若干低めに上げる

全員の視線がミサカ（クローンの代わりに・・・）に集中する

「ミサカはそのサソリと呼ばれる人間を目撃しました」

「えッ!!」

ようやく佐天が顔を上げミサカを顔を見る

涙でグシャグシャになっている顔である

「ミサカネットワークにより赤い髪の少年が研究所に運びこまれる

のを見ました……ミサカが聞いた話ではレベル6への進化
の最後の要になるようです……」

サソリと同じような無表情で地面の方を見ながら
持っている情報を話す

「えー！じゃあさっきの

「目的のモノ」って……

サソリのこと……？」

「その可能性は高いです

どうします？

研究所に行くならミサカが案内します」

思いがけない情報にお互い顔を見合わせる

佐天は流していた涙を袖でふきながら

「行く！！サソリを助けに行きたい！！！！」

「じゃあ、その研究所に侵入ということでもいいな……おい
クセラレータ
方通行はどうするんだ……？」

座っている状態から立ち上がり両手で腰元の土を払う

「けエ……このまま帰んのも割にあわねエ……」

てめえらの作戦に乗ってやるウ」

一方通行も立ちこれで全員が地面に立っている

月光の夜

7人の影が路地裏を通りすぎて行った

そして研究所に侵入を始める

29、目覚め（前書き）

一気に情報出し過ぎたかな？

最後の方に・・・（詳細）は次回

29、目覚め

読み取る者によるサソリの脳内解析が完了した

バラケルスス

「これでいいわね・・・」

バンダナを付けた女性が機械からサソリを取り外す

サソリは未だに意識が戻らず力なく
ぐったりしている

「この子どうするんですか？」

「さあね・・・一応息はしているから・・・・・・テキトーに牢
にいれておくわ」

この時・・・

サソリの脳内ではとんでもないことが起きていることに気づいてい
なかった

誰一人として・・・・・・

真っ白な空間

傀儡の身体を持つサソリにも異変が起きていた

ググツと腰の部分（傀儡なので部品というべきか・・・）が大きく歪

み始める

「あの人間め……余計なことを……このままではマズいな・
」

傀儡の身体とあっちの世界のサソリが共鳴している

それはつまり

殺人者として戦闘センス

相手を確実に殺す過程^{プロセス}を分析する思考能力などが
サソリの元に戻ることを意味していた

「まだ……だ……サソリ

オマエはまだ……変わってはいけない……」

傀儡の身体のサソリがゆっくりと真つ白の空間の中で印を結びだす

その眼に「輪廻眼^{りんねがん}」を宿しながら……

「無事^{じゆ}研究所に侵入できたけど……不気味な程静かね……」

ミサカ（クローン）の案内により無事侵入に成功したが施設には誰
一人としていない（まだ入口付近のため断定不可）

「まあ、やりやすいなら問題なくねーか!」

「とにかく！！サソリさんが何処にいるのか突き止めないと！！」

「サソリ待ってて助けに行くから・・・」

再び周りを伺いながら歩みを進める

「こちらです。モニターがあるのは・・・」

ミサカが前方を指さしながら全員を誘導していく

そこへ上条が

「おい、お前は大丈夫なのか裏切ったりして・・・」

研究所内を案内してくれんのはありがたいが
それによつて彼女の身に何か起こるのを心配しての言葉であつた

「大丈夫です。元々ミサカは失敗作ですから
実験も中止になりミサカの存在意義がなくなりました」

ミサカは上条の方を見つめて

「ミサカはあなたの言う生き方をしたいと思います

ミサカにしかできない

生き方を・・・」

「はあ・・・」

俺そんなかつこいい事言つたっけ？

バケルスス

読み取る者から解放されて十分後

サソリの驚異的な回復力により牢の中で目を覚ました
「ここは・・・？」

キョロキョロと周りの様子を見ると

どうやら牢屋に入れられているようだを理解する

頭が酷く痛い

ズキンズキンと心臓の拍動に合わせてリズムカルに痛点を刺激する

確かオレは

風影そっくりの奴らに襲われたな
今でも不気味な緑色の閃光が脳内に焼き付いている

とにかくここから脱出しなければ・・・

サソリは頭の右側をさすりながら立ち上がり
黒い服の中から巻物を一つ取り出す

「風影のじゃないが
この傀儡で行くか」

巻物を広げ

ドロンツと辺りに煙が立ち込める

現れたのは

背中に大きな刀を背負い黒い厚手のコートみたいな服を着ている人傀儡であつた

ザシュ ザシュ

いとも簡単に牢屋の鉄格子を切り崩しサソリは外に飛び出す

とりあえずいける所から行くか……

サソリは人傀儡を携えてゆつくりと歩き出す
(音をたてない暗殺術の歩き方で……)

サソリがいるのは研究所の一番奥に位置しており
佐天達が助けに来ていることは知りえない

「じゃあ・・・後よろしくね
「絶対能力者（レベル6）
フウエイ」

モニター越しにバンダナの女が黒いコートを身に付けた物体に指示
を与えていた

研究員達は全員
ここから姿を消してるようだ
既に別の研究所に移り指示を与える

「はい……」

抑揚のない声で反応する

モニターの電源がきれ
辺りが暗闇に落ちる

ウィーン

後ろの自動ドアが開き
7人の男女が入ってきた

30、フウエイ（風影）（前書き）

更新にさしつかえがあったので正直に報告します。

実は作者は心臓に障害を持っているため

発作が出ると動けなくなります。

昨日まさに発作が出てしまい更新が止まってしまい

申し訳ありませんでした

これから作家活動が続けていくのでよろしくお願いします。

30、フウェイ（風影）

モニター室に7人が入ると前方に奇妙な人影が姿をみせた

「貴方達が侵入者ですか・・・」

機械の電子音みたいな声をし

こちらを振り向く

「「あ！！」」

御坂と佐天だけはその姿に見覚えがあった

妙に長い黒髪

耳まで裂けた口（遠くから見ると笑っているように見える）
黒いコートみたいな服

サソリが使っていた人傀儡

三代目 風影が猫背のような体勢で鎮座している

「なんだア！！！てめえがサソリってヤツかア」

違います・・・

一方通行がポケットに手をつ込みながら前に出る
アクセラレータ

「侵入者は排除します・・・」

口を大きく開き中から砲弾がセットされ

そのまま砲弾が右回りに回転しながら一方通行の方へブレながら向かっていく

しかし一方通行はベクトル変換をし砲弾を反射し
風影に返される

ドオンッ！！

風影は大きく仰け反り
爆発によって顔の部分に煤^{すす}がつき
黒焦げであった

「まだまだア！！」

一方通行は大きく前に出て右手でチョンと触れる

ベクトル変換により

風影は左から崩れるようにバラバラになった

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あつという間の出来事に

みんなが口を開けて驚く中

ミサカ（クローン）が手をパチパチとさせている

「さすが、ミサカを殺して来ただけあります・・・・・・・・とミサカは皮肉の意味を込めて言います」

「けエ！！くだらねーな！！」

一方通行がモニター室から出て行くとする

御坂達は一方通行の方を見て

「このマシンも出オチですか・・・」

佐天があわれな破片となった風影を見て思う

「では早速始めましょう

初春よろしくですわ」

「はい!!」

カチャカチャとモニターの電源をつけ地図を表示しようとするが
すぐにシャットダウンしてしまう

「白井さん・・・電気が足りないみたいです・・・」

「え!!!嘘

どうすんのよ!!!・・・あ!!!」

佐天が何かに気付き御坂の方を見る

「え・・・!何なに??

私?」

暫し(しばし)の間

「どうしてこんなことに何んのよ!!!」

両手にコードを持ち回路の一部になる御坂

「ではお姉様どうぞ!!」

ため息をつきながらも
放電を開始する

「頑張ってください
御坂さん」

「ああもうちよつと
弱くして・・・それじゃあ
壊れちゃいます」

「難しいわね・・・
・・・ってアンタも手伝いなさいよ!!」

マイナスを握ったまま御坂が黙って立っている
ミサカ（クローン）を指さす
「あ・・・一方通行からの傷が（棒読み）とミサカはリタイヤを
宣言します」

右肩を今さすりながらミサカが返す

おのれ・・・

「これで救出にいけるのか？」
少し不安になる上条

研究所内へ

「フウェイサマー！」

モニターシツノマシンガヤラレマシタ」

四足歩行の風影^{マシン}

が目の前にいる黒いコートをばった人間に報告している

「そうですか・・・まあ残りの兵も出しておくのが望ましいでしょう

わたしはこれからある男の元に向かいます

7人の侵入者については

貴方に任せますよ」

「フウェイサマー！」

ダレノモトニイクノデスカ？」

移動する歩みを止め一言

「サソリ（マスター）」

と口元だけは笑っているが眼は無表情のまま言った

その容姿に知っているものは誰もが驚くであろう

御坂のクローンにそっくりな顔を持ち

長い黒いを有する女

御坂のクローンと三代目

風影の身体を掛け合わされて造られた
新しい風影の姿であった

（わたしはマスター（サソリ）のことが知りたい）

御坂にそっくりな身体で扉から出ていく

フウエイ（風影）

31、解放（前書き）

前回から出ている

半分オリジナルキャラ

「フウエイ」

風影を御坂にそっくりにした方がいいのだろうか？

3 1、解放

何処から敵が来るか分からない時は

すぐに攻撃に移れるように指を開き胸の前に置く

脇をしめ両手の間隔に余裕を持たせる

さしずめ水晶の前にいる占い師がとる構えのような体勢になる

こうすることに最大限傀儡を操ることができる

そんな構えをしながら建物の中を進んでいくサソリ

やはり・・・妙だった

不気味なくらい人がいない時折聞こえるのは傀儡特有の ギ

シツ ギシツ

という音だけであつた・・・・・・・・

「・・・・・・・・!!?」

急に開けた空間がサソリの目に入る（と同時にサソリもその空間に入る）

かなり広い空間だ・・・

大方研究の裏付けのために行われる実験場みたいな所であろう

上の方にはガラスの窓がある

自由に中の様子が見えるようになっている

サソリは目の前に注意を向ける

「誰だ・・・!？」

カツンッ カツンッ

とわざと大きな音を立ててサソリの前に姿を現す

御坂にそっくりな顔を持ち肩まで伸ばした漆黒の髪

三代目 風影の人傀儡が身に付けていた黒いコート
年若い女であつた

「久しぶりです・・・マスター（サソリ）」

頭の痛みが更に酷くなるのを感じた

御坂の頑張りによりモニターに電力が戻り動き始めていた

「うりゃー!!」

バチッと放電をしている御坂（止めるとすぐにシャットダウンして
しまったため）

「んっ・・・ここかな!？」

あ!!ありました施設内の地図が出ましたよ」

初春がモニターの前に立ち操作をしている

最新の科学技術が使われているため施設内にいる人などが表示されている

「よくやりました・・・
という事は・・・ここにいるのが6人で廊下に1人います（一方通行さんです）」

「じゃあ・・・この二人は
どちらかがサソリなのかしら・・・!!」

佐天が点滅を繰り返している所を指さして確認する

「じゃあよ・・・この部屋に向かって来ている人影はだれだ」

おびただしい数の点滅の光がモニター室に一直線に近づいている（
あまりに多く道が電灯みたいになっている）

「それは・・・
私達を排除しようとするロボット達です・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・えっ!!!!!!?」

その場にいた全員固まる
御坂電池の放電も止まり
モニターの電源がきれる

「おい!! すごい数機の機械が向かって来てるぞオ」

一方通行がドアから顔を出す
「ピンチですね・・・とミサカは誰も言わないような一言を言いました」

ズキンッ ズキン

ズキズキズキズキズキズキズキズキズキズキズキズキズキズキズキ
ズキズキズキ

「がつ……」

痛みが激しさを増し普通に立っていらなくなっている

サソリが再び殺人鬼になるとそれを拒む力が戦^{チャクラ}いをしていた

読み取る者^{バラケルスス}によって呼び起こされた

サソリの感情が飲み込もうとしていた

フウエイは無表情のまま施設の天井を見上げ

「もういいですよ……術を解いても……

私は本来のマスターと話しがしたいです……」

真っ白な空間にいる

輪廻眼を持ち人傀儡の身体のサソリが目を見開いて驚く

「……俺の存在に気付いていたのかサソリの傀儡よ……
だが術を解いたら……本来のサソリに……」

「わかっています……しかし……私は確かめたいことがあります……
す……」

輪廻眼のサソリはゆっくり印を結んでいた両手を離し術を解いた

その瞬間

サソリ（本来）の身体が大きく仰け反り
ガクガクと震え始める

しばらくすると震えが止まり
サソリの両目が開く

身体を元の姿勢に戻すと
目の前のフウエイを睨み付ける

殺人集団「暁」に所属していた頃の残虐なる傀儡師
「赤砂のサソリ」が目を覚ました。

32、選択した道（前書き）

今回で第二章終了!!

次回からほのぼの編

新キャラ フウエイとミサカが加わります
佐天の気持ちにも変化が・・・

32、選択した道

「さて……私も本気をださないと危ないですね……」

フウエイは印を結び服の袖口から黒い霧が漏れだす

砂隠れ最強の武器「砂鉄」である

徐々に形状を変え槍へと姿を変える砂鉄

「いきますよ……砂鉄時雨……」

フウエイの抑揚のない声と共に両手を前に突き出す

すると砂鉄が狙いをサソリに定め一気に向かっていく

さらにフウエイは口を開きチャクラを吐き出していき砂鉄時雨の槍を包みこんでいく

砂鉄の槍は細く鋭利なものとなり加速を開始

しかしそんな状況を見てもサソリは大きくは動かず

ダラリと両手を垂らしている（必然的に太刀の傀儡も膝を崩し固まっている

鋭い砂鉄の槍がサソリに

派手に研究所の床を破壊し土煙……もとい金属性の床であるから金属煙が立ち込める

バラツ バラ

徐々に立ち込めていた煙が晴れていきサソリだけが
無傷で立っていた

「さすがですね．．．私の攻撃を見切り紙一重でかわす．．．
！！（傀儡が．．．ない．．．）」

フウエイはすぐに自分の後ろを向くと大きく振りかぶり
自分めがけて太刀を振り下ろす

ブンツ　太刀が空気を切る音が耳に響く

フウエイは間一髪でかわす

「．．．．．避けたか．．．．．」

ようやく口を開いたサソリの声は冷たい感じだった

（だが．．．．私の方が勝機がある．．．．傀儡の関節部分に
砂鉄を詰めれば勝ち．．．．．）

フウエイは気付いていなかった．．．．

既にサソリの最強の傀儡の構えにはまっていることを．．．

「傀儡を封じます．．．砂鉄烈風掌．．．．．」

太刀を持つ傀儡に真正面から砂鉄の嵐が巻き込もうとする

「．．．オレを無視するとは
なかなか余裕だな．．．」

フウエイのすぐ横にサソリが一瞬で移動し
蹴りを繰り出す

ドッ

「があ!!」

フウエイは大きく吹き飛び壁際に叩きつけられる

砂鉄はフウエイの集中が途切れ

ザアアアアア

と太刀傀儡に当たる寸前に形が崩れ黒い砂に変わる

しまった……

マスターの最強の構えに入ってしまったている

フウエイはサソリと傀儡に挟まっている状況にいた

これでは傀儡とサソリの攻撃を一身に受けてしまい
傀儡に集中すればサソリが……

サソリに集中すれば傀儡が攻撃をする
まさに攻めに特化した構え

と言っても普通の傀儡師には接近戦に弱く

人形を操る時に隙が生じやすいため

本当なら避けなければならぬ状況であるが

体術と天才的な傀儡さばきそして冷静に相手を分析する思考能力を
有するサソリだけが使うことができるのである

「諦めるんだな……この構えは対三代目 風影ように考案した
からな……」

砂鉄を傀儡の中に入れられると厄介だからだ」

妙だった……

本来のサソリなら容赦なく私の命を奪うはずなのに

「それに……オレの知っている顔だしな……
・人殺しはもうしないって決めたから……」

御坂にそっくりな顔でサソリを見つめるフウエイ

サソリはそう言っただけを傀儡を引き戻し
巻物の中にしまった

フウエイは暫しそんなサソリを見ている

「やはりマスター（サソリ）はそちらを選択しましたか……」

「（マスターをここまで変えるなんて……あの子達は素晴らしいですね）」

サソリの殺人感情が戻っても

サソリは平穩の世界を望んでいる

もう術をかけて抑える必要がなくなりましたね……

「ペイン……」

「さすが私のマスターです私が仕えるに値する人物
サソリ様

私は貴方の傀儡

「三代目 風影を改め絶対能力者 フウエイ」未来永劫
貴方のために使ってください」

フウエイは肩膝を立て頭を下げる

いわゆる服従の姿勢をとる

「いいよ・・・面倒くせえし・・・だが自分の作品は大切に
つもりだしな・・・」

頭が痛いのも治ったし・・・」

サソリはまさか三代目 風影が人間になるとは思っていなかった

三代目 風影を暗殺するときもそんなことを考えたこともなかった

「あ・・・マスター・・・大変な事を思い出しまし
たマスターの仲間が助けに来てますよ・・・私の部下が襲つて
ますけど（めっちゃ小声）」

最後の方が聞き取れなかったが佐天達がいるのなら帰るまでだ

「クソ！！こりゃきりがねーぞ」

御坂達に依然として風影と戦闘マシを繰り広げていた

いくら一方通行と御坂（オマケに白井）が力を合わせても数が減ら
ず・・・むしろ数が増えているような

「こんな所でまごついていたらサソリが・・・サソリ・・・！？」

佐天達の前にサソリとフウエイが姿を現す

「皆・・・引いて下さい・・・・・・・・私の負けですから・・・・・・・・」

「フ、フウェイサマ・・・リョウカイ」

凄い勢いで御坂達から離れていくマシン達

「なんかスマンな・・・・・・・・・・・・・・・・!!!!」

佐天が思いきり抱きしめてきた

正直痛い・・・

「サソリ・・・ゴメンあたしがすっかりしていれば・・・・・・・・・・」

「

「別にオレが勝手に引き起こしたからな・・・・・・・・お前がきにする
ことはねえよ・・・・・・・・」

フウェイが手をパチパチさせながら

「マスターとの感動的な場面ですね・・・・・・・・」

御坂達はひとまずの問題の処理に入る

「アンタだれ!!?」

「お姉様が黒髪に!!でもお似合いですわ」

物語の展開についていけない者多数

「説明が面倒くさいですね・・・・・・・・」

こうしてサソリ達によってシスターズ事件とカラクリ事件は幕を閉じた

ちなみにフウエイは部下^{マシン}達の片付けがあるので研究所に少しの間残るそうだ。

33、フウエイ来襲（前書き）

今回から後書きでオマケの連載を始めます

詳細は後書きで・・・

33、フウエイ来襲

研究所の出入口付近

「ホントウニイッテシマウノデスカ・・フウエイサマ・・」

電子音のような声で悲しそうに話す（電子音のため音程に変化なし）
四足歩行の風影^{マシン}

「はい、そのつもりです・・すみませんね・・私はマスターの元に行かなければなりませんから・・」

「ワカリマシタ・・・ココハワレワレにマカセテクダサイ・・」

シユンとうなだれたようにフウエイを見送るマシン達

人間と言う者は不思議なもので意識し出すと

今まで普通にしていた事が出来なくなってしまう

「・・・てん・・さてん・・・・・佐天!!」

「はひ!!?」

サソリの大きい声（彼にしてみれば・・・）に椅子に座り雑誌を読んでいた佐天が驚く

「どどどどうしたの!!?サソリ?」 明らかな動揺

「いや・・昼間だから電気消したらどうだと思ってな・・」

「う、うん消していよいよ・・・」

サソリはリビングの電気を消して傀儡のメンテナンスを始める

佐天は読んでいた雑誌で口元を隠しサソリの後ろ姿を見ている（ほのかに顔が紅潮している）

サソリが佐天の部屋に居候し始めて1ヶ月が経ち

その間いろいろな事があった・・・

佐天は未だに身元を話そうとしないサソリに対する想いが募っていくことを感じていた

（そろそろ自分のこと話してくれてもいいのになあ・・・それに・・・これって・・・結婚したみたい・・・）
／／／／／／／／／／／／／／／／

カアーーーーーッと真つ赤になる佐天

思えばここ最近

サソリを妙に意識してしまい家事に支障が出てしまっている（サソリがびっくりしていたが・・・）

とそこへ・・・

ぴんぽん

玄関の呼び鈴が鳴りだした

「は、はい／／」 まだ顔が紅い佐天

なんとかサソリに顔を見せないように急いで玄関へ

ガチャッ

ドアノブを回し開ける

（セールスマンだと面倒だから少しだけ開ける）

隙間から覗くと髪が黒く長い御坂さん……

ではなく先日お世話（？）になったフウエイが手を振る

絶対能力者 フウエイ

御坂のDNAと風影の人傀儡そしてサソリの頭脳を用いて造られた人間

砂鉄を操るがまだ他に能力を持っている

そんなこんなで……

佐天のリビングに上がったフウエイが出された麦茶をすすりながら正座している

「なかなかおいしいですね……麦茶……」

「ありがとうございます……」なぜか敬語になる佐天

「何故……ここがわかった……？」

もつともな疑問である

するとおもむろに黒いコートのポケットから小型の機械を取り出す

フウエイ

その機械は真ん中に液晶画面があり

ステルス戦闘機が敵機を打ち落とすためのロックオン画面のような物が表示されしきりに中心の部分が点滅を繰り返していた

発信機……？

「お前……いつ付けた……」

「一緒に歩いているときにマスターに付けました……」

それは犯罪行為ですよ

フウエイさん……

「それでは……」

発信機をしまい（付けた場所は言わないらしい）テーブルから少し離れ

「本日からお世話になります……」

正座の体勢から深々と礼をするフウエイ

「……………」

「……………へえ！！？」

どうやら佐天の家に居候するらしい

「えエー……………」

れは……

布団がもうないですし……他に……」

「大丈夫です……マスター（サソリ）の布団で一緒に寝ますから……」

「……………！！何故」

かなり驚くサソリ（彼にしてみれば）

さらりと凄いことを言ったフウエイに対して佐天

「それは！！！なおさらダメです！！！！！！

（あたしもまだなのに・・・）」

小声で何かを呟く

佐天は気付いていないが顔がマグマのように真っ赤である

しかし

フウエイは気にする様子はなく

「ではマスター・・・よろしく願いします」

だめだ一度言い出したら変えないタイプだ・・・

さあ！！佐天の恋の行方は・・・

波乱のほのぼの編スタート！！

33、フウエイ来襲（後書き）

オマケページ

御坂「なんか急に始まったわね」

白井「そうですね・・・記念でもありませんのに」

佐天「何かよくないことがあったのかしら？」

サソリ「良くないこと・・・連載打ち切りとかか？」

御坂・白井・佐天「ええーーーーー！！（ありません）」

初春「違いますよ・・・なんか作者の平井先生が原作の

「レールガン」の背表紙の裏にオマケの漫画を最近見つけて「じゃあ、こつちもやんべえ！！」と言って始めたそうです」

全員「遅！！！！」

すいません ガチです

御坂「じゃあ次回から

私らがここで何かするのね？」

次回もよろしく

34、新学期（前書き）

実家近くのスーパーに車が突っ込みました。

死亡者が出なかったことが幸いです。

34、新学期

夏休みも終わりを告げ

今日から新学期が始まるうとしている。

佐天や初春の通う柵川中学も例外ではない

佐天は朝からドタバタと制服に着替えたりとせわしく動き回っている。

「佐天は何をしているのですか？ マスター・・・」

サソリの隣を陣取っているフウエイが行ったり来たりしている佐天を眺めつつ

サソりに質問をする

「学校と言う所に行くらしい・・・今日から始まるって・・・」

「そうですね・・・最初からこんな調子では心配ですね・・・」

「

既にこの部屋の住民と化している居候の能力者 フウエイ

ちなみに夜寝る所は佐天のベッドに一緒になって寝ている

本人は「サソリ（マスター）と一緒に寝ます・・・」の一点張り
佐天の阻止とサソリの説得により何とかこのイベントを回避

佐天は鞆の中を確認しながら

（あたしが心配なのはサソリ達よ・・・）
と言いたいのをグツと我慢し時計を見やる

もう行く時間だ

「いってきますー!!」

昼頃には帰って来るから」

と言に残し玄関から出ていく

「気を付けていけよ・・・」

いつもの調子で言っただけ佐天の耳には届かなかった。

初春との待ち合わせの所まで歩いて行く佐天

考えるのはサソリ達のこと（大丈夫・・・サソリは結構物事をわかつているし

今日は昼頃には帰れるし！！）

本日は給食が休みである

しかし佐天の心配は募り

（いや、もしかしたら・・・）

以下佐天の想像

「ようやく2人つきりになれましたねマスター・・・」

「ああ、これでオレ達の愛を止める奴がいらない・・・さあこい・・・
マイハニー・（誰？）」

そして触れ合うくちび・・・

想像終了

（心配だーーーー！！！！）

あの2人をそのままにして置くのは！！！！！！！！！！

佐天は頭を抱え大きく天を見上げる

周りの人はさぞ驚いたろうに……

注）サソリはハニーとは言いません（信じてます!!）

「何やってるんですか？

佐天さん？」

頭を抱えウガァー状態の佐天に初春が声をかける

「ああ、初春か・・・おはよう何でもないよ!!」

髪がメシヤメシヤになっていきます

「佐天さんおはようございます。何かあったのですか？心配事なら
私に相談してください
レベルアップ
幻想御手事件のこともあるんですから!!」

初春さん目が怖いです

凄く敏感になっていきますね

隠す必要もないため説明する（佐天の想像は抜いて）

「実はあたしの部屋に居候が出来ました!!」

キョトンとする初春

「知ってますよ・・・

サソリさんでしょ!!」

「ああ、違う違う!!」

サソリの他にもう一人増えたの・・・フウエイが」

「え!!絶対能力者（レベル6）のですか？
た、大変ですね・・・」

柵川中学まであと少しである

一方その頃サソリ達は

「よし．．．じゃあオレがこの社会について説明をするぞ．．．
これはテレビと言う物だ．．」

佐天のテレビをポンポン叩きながらサソリがレクチャーを始める

「知っていますよマスターテレビ．．．テレビジョンの略
スコットランドの物理学者ジェームズ・クラーク・マクスウェルが
存在を予言し

その後ブラウン管が開発され実用化され
動画・音声データを不特定多数のために放送する仕組みである
ちなみに「テレビジョン」のテレ（tele）はギリシャ語の「遠
く離れた」の意味を持つ「τῆλε」が
ビジョン（vision）はラテン語の「視界」が元になりました．
．．．

他に説明して欲しい物がありますかマスター？」

「いや．．．何でもない．．」
ちよっぴり悔しいサソリであった

まあ、テストメント学習装置の力ですね

34、新学期（後書き）

オマケページ！！

題、かつこいいタイトル

「とある魔術の禁書目録」
インデックス

「とある科学の超電磁砲」
レールガン

「とある暁の傀儡師」
なし

サソリ「つけるよ！！いい感じのタイトルを・・・」

見つかりませんでした

いろいろ考えたんですけど「傀儡師」
バベットマスターとか

でもイメージが違うんだよなんか大道芸人みたいじゃん！！！！

サソリには悪いですがこのまま行きます

35、学校（前書き）

街を歩いていたらスゲー屈強そうな人（昔レスリングやってそうな人です）が

娘二人にピチューと犬のぬいぐるみを押し付けられていました。

何処に行っても自分の娘はかわいいんですね

35、学校

夏休みって何のためにあるんだろう？

大抵の学生は深く考えず

「わぁーやすみだー♪」

と言って満喫する。

夏が暑いが休むのか？

先生達の残業始末？

前者が成り立つなら力強く物申す！！

「2学期が始まるのが所が一番暑い！！！！！！」

と佐天のクラスの人達（主に男子・・・）が少数の団体の中で討論会を開始し

それに呼応するかのように「そうだ！！そうだ！！」と反応

宿題終わってないんだ・・・

ちなみに佐天はサソリに手伝ってもらい余裕でクリア（サソリ学習能力高すぎ！！）

だって一回参考書読んだだけで

ほぼ理解しちゃうんだよ

アイツ・・・

宿題終わったの嬉しいけどあたしのしてきた勉強は何だったのだろう・・・

（サソリは十分で終了）

「ルイコー……！！！」

カザリ（呼び掛け方分からないのでこれで）「……！！おひさし！」

「久しぶり！！アケミ！」

マコちゃん、むーちゃん」

「お久しぶりです！！」

佐天と初春が振り返り
挨拶を返す

いつもの三人組がそこにいた

「いやぁー！！^{レベルアップ}！幻想御手事件大変だったねー」

注）公式にはこの三人組の本名はおろか

誰がアケミかわかりませんのでまあ雰囲気察して下さい

「そうだね……」

と佐天が返すが

「いいですか！！！！何か悩み事があったら私に相談してくださいよ
！！！！！」

初春の心配モードに入ってしまった

あまりの迫力に佐天と三人組が固まる

なんかすいません……

「ま、まあ……どうだった夏休み！！何かあった？

私ら補習ばつかで大変だったしねー」

空気を読んで話しを変えるあれ（レベルアップ）には触れてはいけないと学習

「う、うんいろいろあったよ・・・」

まさか「夏休みに男の人を拾って保護しました！」
と言えるはずもなく

とりあえずお茶を濁す佐天

三人組も深くは詮索してこなくて助かりました

その後

担任の先生が教室にやってきて始業式やら校長の話しやらが始まった。

時刻昼過ぎ（いつもより若干早い）

アケミ、マコちゃん、むーちゃんの三人組と学校で分かれ
初春と家路に向かう

「もうサソリさんと出会って1ヶ月になるんですね」
学生鞆を前の部分で両手で掴みながら天を仰ぐ

「そうだね・・・もう慣れ始めたけど・・・」

「結局夏休みは何処にも旅行に行けませんでしたね・・・」

「はは、それどころじゃなかったけどね・・・」

苦笑いである

旅行か・・・サソリと一緒に・・・いいな・・・
なんか新婚の夫婦みたいだけど・・・カァーーーーー／／
／／／／

佐天の顔表面温度が上昇傾向を見せ始めた

絶対フウエイがついてくると思います

初春と分かれ

サソリ達の待つ自分の部屋に戻る

「ただいま!!」

「お、帰ってきたな・・・」

「お帰りなさい・・・」

サソリとフウエイがリビングから顔を出す

佐天が靴を脱ぎ二人が顔を出したりリビングへと向かい中に入る

「何これ・・・?」

凄まじい位本（教科書）が散乱していた

サソリは無表情のままうつむき

「一回も勝てなかった・・・」

どうやら佐天が学校に行っている間にサソリとフウエイが知識合戦
をしていたらしい

サソリの負けで幕を閉じた

へにゃへにゃと体の力が抜ける佐天
平和だな・・・

もうすぐ夏から秋に移り変わる

紅葉の季節はすぐそこだ・・

35、学校（後書き）

オマケページ

題、天才サソリ

オレの名前は「サソリ」

砂隠れの天才造形師と言われた
まさにエリートである

しかし実年齢は35歳

三十路の壁を越えています

ちなみに作者の曾祖父が亡くなった年齢と変わりません（樺太で亡くなりました）

36、くじ引き（前書き）

昔、何気に恐かったもの

「サンダーバード」

だって人形が動くんだぜ！！

36、くじ引き

居候が二人にランクアップし日用品の消耗が一段と顕著になる。

本日の買い物

洗剤　ハンガー（フウエイの分）

白菜などの野菜類

お菓子を少々などを買い揃えた

そんな帰り道に佐天は買い物した時にもらった二枚の紙切れを眺める

「学園都市でくじ引きかぁ珍しいわね・・・」

「くじ引き？」

佐天の右側にいたサソリが覗きこむ

サソリの顔が急に近くなり思わず顔を赤らめる佐天

「くじ引き・・・恣意的な要素を加えずに勝敗・当落・順番を決める方法

ちなみに、くじ引きの確率はくじを引く順番にかかわらず平等である
これを確率保存と言います」

「いや・・・そんなのは聞いてねえが・・・」

無表情同士のコントであった。

学園都市の内部では珍しくくじ引きのイベントが九月の第二週から
始まっていた

夏休みを過ぎたばかりの時期に何故始めたのか？

学園都市の考えていることは分からない・・・

通りの端の駐車場で臨時に作られたくじ引き会場（運動会などでよく見かけるテント一棟分）にはくじ引き券を手にした学生がちらほら見えている。

残念賞（白）にはポケットティッシュから始まり今話題の電化製品などが並んでいる

それが佐天の知っている

くじ引きだったか・・・

学園都市はスケールが違っていた

五等まで電化製品などの物であったが
一番上である特賞はなんと「宇宙旅行！！」であった

注）訓練期間に5～7年間を要します

とスゲーちっちゃい文字で書いてある

これは・・・ハード過ぎる

「でも・・・せつかくだし、引いてみますか
ちょうど二回分あるからサソリとフウエイやってみる？」

まあ、電化製品が当たれば儲けもんかな？
と考えておく

「わかった・・・」

「了解です・・・」

「いい！！二人とも

くれぐれも特賞は当てないようにね!!（これからの青春を宇宙旅行の訓練に捧げるのはちよっと・・・）

今の所まだ特賞は出ていないらしい
犠牲にならないことを祈る
ちなみに特賞は金色です

くじ引き会場であるテントの下に入り、青色の法被はっぴを来た関係者に券を渡す。

「それでは二回分どうぞ!」

学園都市には珍しい何の技術テクノロジーも使われていない八角形の抽選器ガラボン

まずフウエイがハンドル部分を握り、静かに回す
コロン、と飛び出して来たのは「白」

「残念!!! ポケットティッシュ」

くじ引き関係者の人がフウエイに真っ白なポケットティッシュを手渡す

「残念無念です・・・」

「はは、大丈夫だいじょうぶ!! くじ引きなんて
そうそう当たるもんじゃないし」

佐天はフウエイを慰めるように言っていると・・・

カランカランッ!!

「大当たり!!! 大当たり」

けたたましいベルの音と関係者の大きな声に佐天は一瞬ビクツとなる

どうやらサソリが当たりを引いたらしい……

「ちょっと!! 待って!!」

まさか……」

佐天はサソリのすぐ隣に移動し玉を確認する（フウエイも）

佐天の青春か否か!!？

確認した玉のカラーリングは……

「へえ？」

パンフレット」

忘れかけた日本の姿をもう一度
くつろぎの温泉宿・旅館あすか

各個室は、和の風情漂うくつろぎの空間

窓から見える景色は紅葉の始まりかけた雄大な自然科学の世界に
生きるための英知を養っていたきたい

学園都市在住の学生には特別サービスがございます……

「まさか……本当に当たるとは……」

佐天が目丸くしながら旅館のパンフレットを見入っていた（くじ
引き会場で貰った）

同封されていた旅館の写真を見ると古来からありそうなほどの古い
なんか不思議な魅力がある旅館であった

実はこれで四等でした

学園都市は凄いと再確認

しかしその日までの間がないー

今度の週末の三連休に一泊二日のプログラムであり

その後6人までOKだったので

御坂達を誘うことにした

御坂「あ、その日なら私空いてるよ」

初春「行きたいですけど……風紀委員ジャッジメントの仕事があつて行けません」

白井「行きたいですわ!!!!お姉様と温泉旅行!!!!
考えただけでハアハア……」(初春に強引に却下された)
佐天は首を傾げ悩む

4人か……あと一人は欲しいわね

するとそこへフウエイが

「ではミサカ(クローン)を入れますか?」

この一言で決まり

旅行に行くのは……

サソリ、佐天、フウエイ

御坂、ミサカ

の5人で行くことになった

絶対何か起こりそう……

36、くじ引き（後書き）

おまけページ

題 もしもサソリを拾ったのが佐天じゃなかったら
初春編

初「きゃああああ

誰か倒れています!!!」

と、とりあえず警備員アンチスキルに連絡を」

警備員到着

「少年を保護!!! 未だに意識不明!!!

事件性を考慮に入れ付近を通行止めにし少年を病院へ搬送!!!」

病院内!!!

「何だこの傷だらけの体は!!!

激しい暴行の跡が見られる!!!

虐待の可能性を考え身元確認は慎重に!!!」

なんか凄いことになった!!!

37、旅行初日（前書き）

D Sソフトの「トモダチコレクション」ってタイトル怖くない！？

猟奇的殺人の匂いがします
想像はおまかせ！！

37、旅行初日

で、当日。

常磐台中学の前で御坂とミサカ（どうやって連絡を取ったんだ？）と待ち合わせをする

「あ！佐天さん！！
ごめん遅くなつて」

「大丈夫ですよ！
私達も今来た所ですから」
息を荒げて御坂達が走ってきた

「ギリギリだったな・・・後少し遅かったら・・・」

あ、そういえばサソリは
「人を待つのも待たせるのも嫌い」だったわね

「お姉様！！！！！！」
黒子も行きたいですわ
お姉様とお風呂場であんな事やこんなことを！！！！
ぎゃんっ！！」

「早く風紀委員の仕事に行きなさいよ！！！！アンタは！！」
見送り（？）に来た白井に華麗な肘で黙らせる御坂^{エルボ}

「騒がしいですね・・・マスター・・・」

「まあ、毎度のことたる・・・（慣れたらしい）」

とそこへ・・・

「お久しぶりです

今回はミサカを誘っていただきありがとうございますとございますとミサカは丁寧にお辞儀をします」

似た顔が三人も・・・三つ子で通るかな？

どうでもいい事に気付く佐天

そんなこんなでバスへ

「全く！！黒子やつ

凄い力で制服を掴んで・・・シワになったらどうするのよ！！！！」

白井の最後の抵抗であった（初春に強制的に連れて行かれました）

（でも風紀委員も大変ね・・・ジャッジメント・帰りにお土産買ってきてあげるか）

旅行の初日がスタートした

が・・・

バスを乗り継いでどんどん山奥に入っていく目的地の旅館がある所まで行く

バス停 斑地区

佐天は前日に電話で連絡しておいたので、このバスが来る時間には旅館関係者の送迎車が行るはずだが……

「あれ??まだきてないのかしら?」

バス停の前に迎えの車はおるか往来する一般車両もなくガランとしている

どんだけ田舎にきたんだ

「本当にここであつてるのよね?」

佐天と御坂でパンフレットの交通アクセス案内に目を通す

うん!!間違つてはいない

「遅れているのかしら?」

「いや……こんな状況で遅れるのが難しいが……」

サソリが閑散とした風景を見渡しながら言う

「少し待つてみますか……」

特に案も無いのでフウェイの考えに乗る

バスから降りて5分後

10分後……

サソリのおかしくなる

イライライライライライライライライライ

早いはい！！サソリ早いよイラつくの！！！！

身体を上下に揺らしながら怒りを抑えている

「遅い・・・！！！！」

低い重低音の声が事態の深刻さを告げる

「フウエイ！！！！なんとかしてサソリを・・・」

イライライライライライライライライラ

お前もかぁーーーー！！！！

突っ込むと何が起るか分かりませんので心の中で

佐天が隣にいるフウエイを見るとサソリと同じように怒りを抑えている

「早く来て頂かないとまずいですね

とミサカはこの二人は怒らすとヤバイのでは？と思いつつ警告をだします」

などと言っていたら、ドアの部分に「旅館あすか」とペイントされた車がバス停のすぐ脇に入ってきた。

キキーーーーッ！！！！との急ブレーキでサソリ達の所に止まる

「すみません！！遅れてしまい！！！！」

綺麗に前髪が七三分けの中年男がドアから飛び出してくる

もはや土下座の体勢で謝り続けられ中年男の後頭部に薄ら十円ハゲを見つけてしまいサソリとフウエイの怒りが萎える

「まあ・・・いいや・・・」

サソリの一言にスクツと顔を上げ

「本当にすいませんでした！！言い訳ではないですが途中でタイヤがパンクしてしまい・・・すいません」

確かに車の方を見ると左側の前輪がボロい車体と対比するかのよう
に綺麗であつた

他のタイヤも寿命が尽きかけているが目を瞑ろう

すぐさま七人乗りの車の後部座席に乗り込む

ドアが閉まるのを確認してから車が発進した

元々山奥の所だったが

車は更に山奥に入り込りに紅葉が始まっている落葉樹林が鬱蒼と茂る

ロクに整備されていない道のため車が上下左右に揺れる（そのため
紅葉はよく見えない）

「そつだ初春に何がお土産でいいか聞かないと・・・」
ポケットから携帯を出す佐天だが

「あれ？圏外だ！！」

当然である

「いいか・・テキトーに買っておこ
饅頭でいいかな？」

携帯電話を閉じ持ってきた鞆にしまう（役にたたないし）

「あ、着いたみたいですよとミサカは旅館を指差しながら合図しま
す」

サソリ達は旅館あすかを見て思わず黙る

確かに純和風であるが

窓ガラスは所々割れ

屋根の瓦が欠け落ちている

何処をどうすればここまでボロボロになるのか分からないほど凄ま
じい旅館であった

簡単に言うとは極限值↓廃屋

もしくは心霊スポットに取り上げられそうな旅館

思わず顔が引きつる佐天と御坂

あれ？何か私達来る所間違えた・・・

サソリ・フウエイ・ミサカ
無表情組は「・・・・・」

と旅館の外見を見渡す

意を決して旅館の中に入るサソリ達

37、旅行初日（後書き）

オマケページ

題　フウエイとマシン

マシン「フウエイサマ・・・ワタシ
ヘンケイデキルヨウニナリマシタ・・・」

フウ「そうですか・・・では私に見せてくれますか・・・」

マシン「リョウカイ・・・!!」

ウィーン　ガシャッ

ガガガガガ
ガシャガシャ

（BGM ♪ オール・アイ・キャン・ドウ
アンド・オール・ユー・キャン・ドウ
羽ばたけ　トランスフォーム♪）

変形終了

マシン「イカガデスカ？」

フウ「却下です・・・」

BGMのチョイスに問題あり

38、旅館の部屋（前書き）

昔めっちゃハマったゲーム「ロックマンX」

あのクモは反則です（シグマステージ ボスパイダーより）

38、旅館の部屋

旅館のロビーは純和風かと思いきや赤い絨毯にソファなどが置いてあり半分洋風・・・

なのに奥の置かれているのはおかつば頭の日本人形

さらに不気味さを醸し出す

半ばびびりながらもチェックインを済ませる

何で照明がこんなに暗いんだ！！！！

ムード上げか？節電か？

聞きたい事が山積みである

チェックインを済ませた後カウンターの奥から着物を着た女性が出てくる

「こんにちは！！予約の佐天様（まあ代表者の名前）ですね
よろしければ学生証を見せていただければ

夕食時にサービスしますよあ！！申し遅れました私はこの旅館の若女将です」

微妙にテンションの低い声なのに元気そうに言う
（俗に言う空元気だ）

どこか悪いのか顔色がよろしくない

佐天と御坂はそれぞれ学生証を見せる

他の三人は持っていないのでなし

「はい確かに・・・三つ子さんですか？」
御坂とミサカ・フウエイを順番に見ている

「あ・・・はい似たようなモノです」

御坂の目が泳いでいるが
若女将も深くは聞かず

「では、お部屋の方にご案内致します。
男性の方がいらっしゃいますけどもう一つの部屋を取りますか？」

「あ、大丈夫です！！
同じ部屋で（いつもそうだし）」

佐天はすぐに否定しサソリを同じ部屋になった

それを聞くと

若女将は顔を赤らめながらサソリの体を「この色男！！」と言いた
げに肘でツンツンする

「・・・・・・・・？・・・・」

サソリはそんな若女将を訝しげに見ている

しばらく階段を上がったり廊下を通過して行くと

「こちらがお部屋の「やまゆり」でございます。
熱い夜をどうぞ」

「ち、違いますよ！！！」

そんなこと！！！！／／／／／

佐天が顔を真っ赤にして否定した

「お姉様！！熱い夜とは何ですか？

とミサカは疑問解決に乗り出します」

とミサカが御坂に聞く

「熱い夜……主に新婚の夫婦が使った言葉で一種のせいしょ
ストップ、ストップ！！！！それ以上言っちゃだめ」

慌てフウエイの口を塞ぐ佐天
危ない所でした

注）ミサカは実験に必要な知識だけを学習装置で入力しただけであり
フウエイはこの世のわかっている事を入力されたため知識の量は半
端ない

とりあえず部屋の中へ

黒いシミが点々とあり天井には人の顔に見えなくもない大きなシミ
が……

見ない！！！！ 考えない！！

「何か……ここまできると凄いわね……」

「夜とか絶対何か起こりそう」

「マスター……窓を開けます……」

フウエイが窓を隠している障子に手をあてガラツと開ける

紅葉が見えるはずの大自然が……

「確かに紅葉は見えますね……八割がた墓ですけど……」

ガラ　ピシャツ

佐天と御坂がすぐさま障子を閉める

見事封印!!

「すみません……御坂さんこんな所に連れて来てしまいまして……」

「ううん……私は大丈夫……」
明らかに元気がない

天井のシミが気になってしまう

でも見ない……
怖いから

「……何故お前ら……部屋の隅をじっと見ているんだ……」
「……?」

窓の方と天井を見ないようにするやり方は部屋の隅を見続けることであつた

「よし!!お風呂に入りに行こう!!!」
部屋とかはイマイチかもしれないけど温泉はいいかもしれないし」

御坂の提案に佐天が顔を上げて

「行きましょうー!!」

「感情の浮き沈みが激しいな・・・」

サソリが呟く

全員(?) 意気揚々と温泉に向かうため佐天がふすまに手をかける
と・・・

「失礼します」

思わず手を引つ込める佐天

ふすまがサツと開き先ほどの若女将が丁寧にお辞儀をしている

「晩ご飯の用意ができましたんで、出させていただきます」

佐天と御坂は部屋の時計に目を見やる

あっちを出てきたのは昼過ぎであり

現在は午後五時・・・さすがに早い

「あの・・・あたし達・・・まだ頼んでいませんが・・・」

「でも・・・出来ましたのでどうぞ召し上がってください学生の方
にはアイスクリームのサービスです」

聞く耳なし・・・

「まあ、いいわ食べましょう・・・」

次々と部屋のテーブルに旅館の食事が5人分並べられている最中に階段を上がったいく複数の足音と話し声が響いてきた
大人数というわけではないがミシミシという音が反響してサソリ達の所に届く

二階に上がってきたのは4人の男性で大学生くらいの人達であった

彼らは廊下のお膳を部屋に運んでいた若女将と鉢合っ

「あ、お帰りなさいませ」

「どうも!!今帰りました」

眼鏡をかけた男性が答える

「今から晩ご飯を運びますね」(もう作ってた!!)

「え!!!はやつ………お願いします」

やはりそんな事になっちゃいます!!

そうやり取りをすると彼ははサソリ達の隣の部屋である「しゃくなげ」に入っていた

38、旅館の部屋（後書き）

オマケページ

題　もしもサソリを保護したのが佐天じゃなかったら

御坂編

御坂「きゃああああ

誰か倒れているわ！！ほっとく訳にもいかないし」

御坂はサソリを背負い寮へ

寮監「寮に男を連れ込みとは良い度胸だ　御坂」

御坂「あ！！いえこれは・・・」

白井「お姉様」おかえりなさ・・・・・・・・何ですのその男！！！

！黒子がいますのに！！」

御坂「いやだからね・・・」

「御坂さんが男の人を連れてくるわ」

「恋人かしら？」

「でも気絶しているみたいですよ・・・・・・・・まさか強引に！！！！！！」

騒ぎ始める女子生徒

サソリ（・・・・・・・・うるさい・・・）

39、怪談（前書き）

小説のタイトルを少し変えました（加えました）

「エクスマキナ」はラテン語で「機械仕掛け」という意味です

気に入らなかつたら言って下さい
すぐに消去します

39、怪談

彼らが部屋に入るのを確認すると若女将は作業再開

御坂はふと訊いてみる

「今の人達は？」

「確か学園都市の大学生で超常現象研究会とか言うサークルだそうです」

え！！？科学の時代に？・・

御坂と佐天は顔を見合わせる

さらに話しを続ける

「なんかこのあたりに古くから伝わる怪談話を研究しに来ているらしいですよ」

テーブルに並べられていく食事を見ていたミサカが反応する

「それは・・どんな話ですかとミサカは興味がありますという感じで訊きます」

その言葉を待っていましたとばかりに

「聞きたいですか？」

けっこーキツイですよ」

「「えっ・・・」」

「聞きます・・・」

「分かりました」と咳払い姿勢を正す。

「窓の外に墓地がありますよね・・・・あの墓地から山道に入っ

ていくと道の外れにポツンと小さい墓があります。

不思議なことに墓地から入らないと出てこないんですよ。

地元の人はそこを「夜泣き塚」と呼んで滅多に足を踏み入れません

真夜中に墓地から山道に入ると何処からともなく女の子の泣き声が聞こえてくるんです……でも決して外れにある墓を見てはいけません

その訳は……――

ここは昔、大きな刑場がありましてね
毎日多くの罪人が処刑されていきました
処刑方法は「斬首刑」

ようは首を切って殺します

そこにある日、若い母親が連れて来られました。
罪状は「役人の所有していた金の小箱を盗んだ」ことだったのです。
……

かかあ かかあ……

その若い母親の子供が刑場の所まで一人で来て泣き叫び始めました。

6歳くらいのおかっぱの女の子が刑場の入口にしがみつき

かかあ かかあ……

母親を返して貰おうとしていたのです

その後……母親の罪は晴れず斬首刑となり処刑されてしまったのです……

母親が処刑された事に気付かない女の子は

毎日 毎日……

かかあ かかあと泣き叫びました

お前の母親は死んだんだよ

入口の憲兵が女の子を殴り帰らせようとしたが

かかあ かかあ・・・

それでも女の子は刑場に近づいて来るのです

憲兵はあまりに毎日泣き叫ぶのでイライラがたまっていたのでしょう

持っていた刀で女の子を切り付けて殺してしまいました・・・

近くに住んでいた村人が不敏に思い

その子のために小さな墓を作りました

それが「夜泣き塚」なのです

更に恐ろしいことに

死んでから自分の母親が首を切られて殺されたとわかったのでしょうか・・・

夜な夜な墓を見た者は

女の子に首を刳られてしまい

翌朝変わり果てた姿で見つかるようになりました

かかあを返せ・・・

「それから、夜泣き塚の泣き声を聞いて墓を見た者

は女の子に首を刳られるようになった・・・と言われていきます」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

顔を真つ青になる佐天と御坂
料理を並び終わると若女将は下がっていった

「なんつつ話しを食事の前に聞かせるのよ・・・・・・・・」

「凄い話でしたけど・・・」

何かかわいそうでしたよね御坂さん」

と佐天が言い

箸を取っていざ食事！！

という時に

「・・・・・・・・別に珍しい事じゃねーな・・・・・・・・」

「えー！！」

「まだ良いほうだ・・・・・・・・すんなり処刑はな・・・・・・・・
もつとヤバい事が裏ではやられていたからな・・・・・・・・

例えば「人体実験」・・・・・・・・何故！？オレの服を掴む
？」

ミサカがサソリの後ろの服を掴みだす

「怖いことに耐えるためです

とミサカはシャレにならねーよと思いながら震えます」

お前が始めたんだろ・・・

若女将の怪談話にびびり出す

ミサカと佐天・御坂

それほど怖くない
サソリとフウエイ
(忍の世界はもっと怖い)

とりあえず食事に手をつけることにする

怪談のせいか分からないが終始無言・

すると前触れもなく訪れる暗闇
「ーえっ？」

突然、部屋の電気が消えたのだ。
室内は真っ暗闇に・・・

「ん・・・停電か・・・」

「え・・・え！？
停電！！！！私何かやった？」
注）やってません

サソリとフウエイは夜目が利くので落ち着いたもの。

しかし夜目が利かない佐天と御坂は大パニックであるちなみにここ
は山奥

電気がつかなければ目の前に誰がいるか分からないほど暗い

しかも怖い怪談話を聞いた後だから
考えたくないことが鮮明に思い出される

おかつば頭の女の子とか
首を切られるとか・・・

夜泣き塚とか・・・

わー。きゃー。

誰か背後に立っているような気がー
自分一人だけになってしまった気がー

きゃー。きゃー。

その時、パツと電気が付いた

白いようなオレンジのような灯りとみんながいることに、佐天と御坂はホツとした

「何でいきなり消えんのよ？」

「さあ!？」

再び席に座る二人

(三人は落ち着いて座っていた)

夜はこれからである・・・

39、怪談（後書き）

オマケページ

題　タイトル決定

サソリ「ようやく決まったな……」

御坂「エクスマキナか……。なんか傀儡師から離れてない？」

初春「確か傀儡は「マリオネット」だった気がしますけど……」

確かにそうですけど

それだと傀儡師は「マリオネットマスター」になってしまい長くなるので止めました。

エクスマキナは今後の展開にも影響しているので決定

佐天「でも……反対意見が多くなれば消去するって言ってますよね？」

はい……

読者の皆さんよろしくお願いします。

40、温泉と気になる事(前書き)

昔やったゲームシリーズ

「牧場物語」 これは今でもはまっています。

ほのぼのいいですね!!

40、温泉と気になる事

早い夕食を食べ終えサソリ達はメインの温泉に入ることにした。

女風呂

旅館あすかは広い露天風呂が一つと室内風呂一つ
どちらも源泉かけ流しの温泉であった

御坂達が入ると誰もおらず貸し切りだー！！と佐天がバシャッバシ
ヤツと泳ぎだす

注）温泉で泳がないでください

怖い怪談話も忘れる一時・・・ごくらく！！

「良い温泉ですね！！
御坂さん！！」

「ようやく・・・落ち着いた！！」
と御坂は顔半分を温泉に浸しブクブクと泡だてる

「ん！！」

佐天が隣を見るとミサカとフウエイが温泉の中に沈んでいる

沈んでいる二人の上に木の板がプカプカと浮かんでいる
そこには・・・

「ただいま

人間の限界に挑戦中
邪魔するな！！！！」

「・・・・・・・・・・」

ここまで来て何をしているか・・・

男風呂

男風呂も女風呂とまったく同じ造りで、室内風呂と露天風呂に分かれています

こっちは先客でさっきの眼鏡をかけた大学生が一人だけで入っていた
サソリはその大学生から少し離れた所に温泉に入り座り大学生に視線を向ける

眼鏡をかけた大学生はしきりに写真のようなモノを持ってきて見ていた（温泉に持ってこないでください）

「君たちもこの地域の怪談話を調べに来たのかい？」

視線を写真から外さずにサソリに質問してきた

「いや・・・・・・・・怪談話を聞いたのはさっき始めてだ・・・」

「そうか・・・・・・・・ちよつと見るかい？」

夜泣き塚（昼間）を撮った写真なのだが・・・」

サソリは前に出された写真を見てみると
確かに話で聞いた通り墓にしては小さく、祠のようなモノが映っている

周りは木しかなく昼間でも薄暗い所だということがわかった

「これから．．．夜の夜泣き塚に行こうと思っただが．．．君たちも来るかい？」

「．．．．．（佐天達のあの様子じゃあ無理だな）
いや．．．．．止めておく」

「そうか．．．じゃあ僕は先に上がるよ
いろいろ準備しなきゃいけないから．．．」

ザバアーと露天風呂から上がり、そそくさと脱衣場に向かっていった

夜泣き塚か．．．何かひっかかるな．．．．

実はサソリはさつき見せられた写真に違和感を覚えていた

心靈写真のようにはつきりしたモノは映ってはいなかったが．．．

墓から傀儡を操るチャクラ系のような物が写真の右斜め上に伸びていたのだ

（傀儡使いである．．．オレから見てもギリギリ見えるか見えないか．．．まさか．．．）

やはり、後で調べに行ったほうがいいな．．．

サソリそう決めた時

「マスター．．．どうですか？湯加減．．．」

「!!!？」

声のした方を見ると

男風呂と女風呂を分ける仕切り（木製）で胸を隠すように身を乗り出している

女風呂のから

「何やってんの！！！フウエイ！！降りて来なさいよ！！！」

フウエイは首だけを女風呂の方に向け

「いいじゃないですか……佐天も来たらどうですか……」
今ならマスターの裸……見えますよ……」

「ななななな、何言ってる……」

「そんなの出来る訳ないでしょ！！！！！！／／／／／／／／／／」

顔は見えないがおそらく
真っ赤だろうな・・・

「ミサカも覗いてみたいです
とミサカは女の悲しい性さがを言ってみます」

「ダメよ！……何言ってるの！……っ……って登り始めるな！……」

「手を放してください．．．
とミサ力は（自主規制）」

「何やってんだ……お前ら……」

これ以上は踏み込めません

40、温泉と気になる事（後書き）

オマケページ

題 甘党！！サソリ

佐天「それにしてもサソリ・・・凄い砂糖使うわね・・・」

サソリ「だって苦いからな逆に何でこんなの飲めるんだ？」

佐天「いや逆に何でこんな甘い物が飲めるの？」

サソリ「そのまた逆に・・・」

決着つかず・・・

ちなみにコーヒーの話です

4 1、輪廻眼を持つ者（前書き）

あと少しで最終決戦になります。

最後までよろしくお願いします

41、輪廻眼を持つ者

その夜

全員が寝静まるのを確認するとサソリは起き上がり

もう一度みんなを見渡す

（よし……いくか……）

時刻は丑三つ時（午前二時～午前二時半）

頃合いだな

サソリは得意の暗殺歩行で音をたてないように移動し出入口の扉から出ていく

調べるのは「夜泣き塚」の写真に写っていたチャクラ系……

サソリは静かに赴いた

「ん……あれサソリ……!？」

佐天が扉の閉まるかすかな音とともに起きる

「こんな夜中に何処に行くのかしら？」

佐天は布団から、のそのそと起き上がり御坂の所に膝と両手で四つん這いの格好で近づき

「御坂さん!! 御坂さん

起きてください!!」

（若干音量は控えめ）

「ん．．．どうしたの？佐天さん．．．」

「サソリが何処かに行っちゃったのよ！！！！
一体どこに行っただろう？」

夜の墓地

夜泣き塚へと入口へ

サソリは漆黒の闇に包まれた墓場を淡々と通りすぎて行く

丑三つ時の墓は何とも言えない不気味さを醸し出しており
肝試しするにもこんな時刻に来てはいけない

注）実際に心霊スポットにはあまり行かないように
してください。

正直かなり危険です

サソリは墓地から山道の外れにある「夜泣き塚」の前にやって来た

（やはりチャクラの糸が伸びているな．．．）

塚の後方からうつすら青い糸状のチャクラが夜の闇に溶けこんでいる。

サソリはチャクラ糸が伸びている塚の後方に回りこむ

「これは．．．．．口寄せの術式．．．しかも傀儡を呼び出す用の．．．」

塚の後ろに文字が円形状に書かれており

真ん中に大きく「傀」とある

それも一般人が気付かないほどに隠されている

ましてや夜である

いくら夜目の利くサソリでもチャクラ糸を発見しなければ気付くことはなかった

サソリはおもむろに「傀」の字の所に手を重ねる

そしてチャクラを流す……

ボンッ

煙と共に塚の後ろに傀儡人形が出現する

「これは……オレ!？」

現れたのは赤い髪を持ち

腹部に刃物の付いた綱（ワイヤー?）

背中に翼のような大きなカッター

そして胸部には「蠍」の一字がある

紛れもなく人傀儡のサソリがまぶた瞼を閉じ力なく倒れている

塚に寄りかかるように……

「な……?なぜ……」

「久しぶりだな!!サソリ」

人傀儡のサソリは身体を大きく揺らしながら立ち上がり始めた

「!!!!!!!!!!」

人傀儡の閉じていた両目がゆっくり開きだす

「その眼は・・・」

独特の波紋模様であり

三大瞳術の中でも

最も崇高とされる眼

「輪廻眼」

忍の始祖とされる

六道仙人

サソリのいた忍界全ての忍術は輪廻眼を持つ

仙人に生み出された

とされている程強力な眼である

そしてサソリの知ってる中でその眼を持つ者は・・・

「お前・・・ペインか？」

「当たり前・・・」

人傀儡のサソリを影で操っていたのは

暁のリーダーである「ペイン」であった

サソリとペインは近くの木の本元に腰を下ろし
話を始める

「まさか・・・アンタとここで会うとはな・・・」

「まあな！！サソリ・・・お前に報告とこれからについてを伝えに来た！！」

サソリと変わらない外見に輪廻眼を持つペインが言う

「まず・・・サソリが死んでからの話だ・・・」

暁は九体の人柱力を手に入れるために多大な犠牲を払ってしまった・・・

まずはサソリ（お前）・・・
後は死んだ順番（戦闘不能）から言えば・・・
飛段と角都」

「！！！！あの不死コンビがか・・・」

「後はデイダラ
イタチ　そして俺だ」

想像以上だった・・・

「輪廻眼を持つアンタもか・・・誰に殺された！！！！」

「うずまき　ナルトだ・・・」

九尾の人柱力の・・・

ただ最後は自決したかな・・・」

「ということは・・・暁にいるのは・・・小南・干柿鬼鮫
ゼツか・・・ほぼ壊滅だな・・・」

「いや・・・小南は俺の死と共に組織を抜け
鬼鮫は八尾と雷影に殺された・・・」

言い忘れていたが

お前が死んだ後に「トビ」という奴が入ったが
そいつが暁の真のリーダー「うちはマダラ」だ」

サソリは大きく目を見開き

「おい！！待て

いつの話しをしている・・・マダラだと・・・」

「あまり詳しくは話せんがな・・・」

後は・・・脱退した大蛇丸がうちはサスケにやられた」

「はは・・・だいぶ世界が動いているようだな・・・」

ひとしきり話し終わるとペインはサソリの方を見て

「お前は変わったな・・・まさか人との繋がりを持つようにな
るとは・・・」

「佐天達が・・・アイツらのお陰で昔の自分から変わることがで
きた

ずっとこのままでいたい・・・」

サソリは空を見上げる

夜中のため満天の星空がサソリ達を照らしている

「だったらなおさらだな！

サソリ・・・よく聞け！！！！

もうすぐ、この世界に大災害が訪れる・・・」

サソリは視線をペインに変え

「大災害！！？」

41、輪廻眼を持つ者（後書き）

オマケページ

題、最終回

サソリ「今回でオマケページが終わるらしいぞ・・・」

佐天「え！！始まったばかりなのに！！！！？？？」

本編の最終回の執筆に集中したいからです。

御坂「噂・・・なんだけど・・・最後の戦いはかなりキツいらしいよ」

残酷描写を入れるかもしれません

ほのぼの編がいいんだ

という方は読まないほうがいいのかも？

42、真相（前書き）

次回から最終決戦に入ります。

今回でラスボスの名前を出しました（原作すみません）
前半と後半に分かれさせ一気に書きたいと思うので
更新が非常に遅くなります
前半を書き終えるまで待つてください
よろしく願います

42、真相

「誰と話しているのでしょうか？ 御坂さん」

「ここからじゃあ・・・わからないわね・・・
それに・・・」

「夜泣き塚で何しているんですか？
とミサカは内心びくびくしながら聞きます」

佐天と御坂は後ろからミサカに話しかけられ
危うくサソリに見つかからないように隠れていた木の側から飛び出し
そうになる

「きゃ！！！！！！！！！！」

「ば、バカ・・・アンタ・・・」

（声になっていません）

しょうがなくミサカに事情を説明し
盗み聞きスタート

「では・・・暁という組織にサソリさんは所属していたということ
ですか」

「そうらしいのよ・・・話しだけは・・・なんとか」

御坂とミサカが暁についての話し合いをしている時に佐天は真剣に

（サソリの過去・・・何？

暁って……」

思考を巡らしていた

サソリの横に誰かがいることがわかるが
このアングルではサソリしか分からない……

不意に一つの単語が三人に届く

「大災害!？」

三人は一斉に黙りサソリ達の話しに耳を傾ける

「何?……大災害って?……」

「分かりません……」

「………サソリ……」

と三人が言った途端に睡魔が御坂達に襲いかかってきた……

「そこまでです……ここから先は聞いてはいけません……」

黒装束のフウエイが右手にスプレーのような物をかけていた

内容物は眠り薬

毒物に造詣が深いサソリの頭脳をコピーして造られたフウエイには
簡単に作れる代物であった

力なくその場に倒れる三人を軽々と持ち上げ

旅館の方へと向かっていく

(マスター………信じています………)

場面はペインとサソリに変わる

「大災害………」

「それをお前に止めて欲しい………じゃないと全員死ぬぞ………」

「………!!」

ペインの衝撃の言葉に驚くサソリ

「待て………その大災害は何だ………?」

サソリの問いにペインは

一回瞼を閉じ、そして開く

「………尾獣だ………尾獣がこの世界に入っている

六道仙人が十尾を封じ込める際に

十尾の邪悪なるチャクラを九つに分散させ

チャクラを抜かれた本体は月となった………

だが………六道仙人はある物を取りにがした」

ここでペインは一呼吸おいて話す

「よく聞けサソリ………」

取りにがしたのは「十尾の影」だ………

時空忍術で空間を飛んで行き

この世界に落ちた………」

十尾！！！！そんなモノが存在するのか……

一尾でさえあれほどのチャクラを持つ化け物なのに
……

サソリは言葉を詰まらせる

オレにこの世界を救えだと……無茶を言っな……

勝てるわけが……

佐天（じゃあ！！！！これからよろしく サソリ）

初春（サソリさんはもう私達と友達ですよ）

白井（あら！！！！素直じゃないですか！！！！）

御坂（サソリも使いたいじゃあ買ってくるわよ）

湾内（助けて頂きありがとうございます）

サソリの脳裏に十尾によって破壊される佐天達が浮かぶ……

オレが止めないと……

サソリは考えを整理するように頭に手をやる

「何故アンタは

オレをこの世界に連れてきた？

輪廻眼を持つ者なら……」

「それは出来んだ……」

俺は生と死の存在する世界の外にいる

これは輪廻眼を持つ者の宿命だ……」

この世界に干渉出来るのもお前と通じていなければならない……

それにお前は、暁の中で最も純粹だからだ……」

ペインは間髪入れずにサソリの問いに答える

「!!!!……時間がないな……」

サソリ……お前にこの身体（人傀儡のサソリ）を返す

だか……これを返却したら俺はこの世界に干渉出来ない……」

つまり一度、傀儡の身体になれば戻れないということだ……」

もう一度……人傀儡に!!

人間を止めるのか？

だが……人間の身体で勝てる相手でもない

傀儡の身体でも同じだろう……

迷いの一途を辿るサソリにペインは……

「サソリ……お前に話しておくべきことが一つあった……お前の祖母のことだ……」

「!!!!」

サソリは大きく目を見開きペインを見る

「お前が死んで程なくしてお前の祖母は死んだ・・・
一尾の人柱力を生き返らせるために「転生忍術」を使ってな・・・
元々はお前のために開発した術だ・・・
お前の父と母、どちらかの人傀儡に生命を与えるために・・・」

サソリはそれを聞いて愕然とした

「・・・ババア・・・今頃になって・・・そんな事を・・・
オレは・・・何をしていた？」
分かったようで何もわかっていなかった・・・

犯罪に身を落とすだけでなく・・・
残ったたった一人の肉親でさえ刃を向けた

「は・・・ん・・・そ・・・くたぜ・・・
ババア・・・」

最低の孫だ・・・何も知らないクセに・・・

「それほどお前が大事だったんだな・・・
さて・・・身体を返すぞ・・・」

人傀儡のサソリの身体が光出しサソリの元に帰っていく
細かい光の粒子が蛍のように淡い緑色を出しながら
身体に溶けこんで行った

（サソリ・・・人傀儡の身体にある細工をしておいた
本当に守りたい者のために使え
この世界を頼んだぞ）

気が付くと夜泣き塚の所で一人となったサソリ

サソリの眼から雫が流れていた

43、十尾復活（前書き）

- なんか前半と後半に分かれても長くなるのでここで更新します・・・

43、十尾復活

学園都市統括理事会

理事長 アレイスター・クロウリー

元・世界最高最強の魔術師現・世界最高の科学者

窓もドアもないビルの中

緑色の手術衣を着て、赤い液体に満たされた巨大な円筒器に逆さまで浸かっている人間。

基本的に生命維持装置から出ることではなく、外から情報を得て指令を出すだけである

アレイスターが活動した70年ほどで数千年を超える魔術師の歴史が塗り替えられたと言われる人物

風貌は、銀色の長い髪を持ち、男にも女にも、大人にも子供にも見える

その人物の目的は

「エイワス」「虚数学区・五行機関」の制御や利用であった

しかしあるモノの発見により事態が大きく変わった

「あの少年から出ていたエネルギー（チャクラ）と一致し彼の頭脳から解析すると

とんでもない量のエネルギーをこれは持っていることになる」

大きく半球状の強化ガラスの中にそれはあった

直径1m程の大きさの深遠なる黒い球体

発見された当初

誰にも正体が分からず

しまいには「役に立たない物」
トラッシュ
とされていたが

天才傀儡師 サソリの脳内を読み取る者によりコピーをし
バラケルスス
解析すると驚くべきことがわかった……

莫大なエネルギーを持つ
生命体である……と

彼ら研究者達は、この生命体の目覚めと制御を急いだ
これが制御出来れば
ツリーダイアグラム
「樹形図の設計者」
アブソリュートシミュレーター
を遥かに超える超高度並列演算器が造りだせる

この生命体の名前は
少年の頭脳にあった呼び名で……

テイルピースト
「尾獣」

アレイスターの目的を一気に進める生命体

計画は最終段階に入る

「初春、久しぶり!!」

ガバツと初春の制服のスカートをめくる佐天

「?!・・・／／／きゃああ!!!!佐天さん!!めくらないで
くださいっ!!」

顔を真っ赤にし初春はスカートを抑える

男子が往来する中での暴挙であつた

「アハハハ!!!!堅いこと言わないの・・・それより（鞆から箱のよ
うな物を取り出し）

はいっ!!旅行のお土産」

佐天が手渡したのは

旅館あすかのお土産コーナーから買ってきた

「若松人形焼き」であつた

饅頭の面に大きくおかつぱ頭の女の子が焼き付けられているのだ。

ちなみに味はカスタード

「あ、ありがとうございます・・・どうでした？」

サソリさん達との旅行・・・」

初春が興味ありげに箱を見ながら質問する

「うん、まあ・・・（夜泣き塚の話を思い出す）・・・
よかつ・・・たわよ?」

何故疑問形・・・

「よかったですね!!」

私も行きたかったです・・」

「まあ、今度空いている時に・・」

暫く談笑しながら学校に赴くが

佐天の頭には旅館の夜中のことを思い出す

翌朝、何事もなかった事のように布団で目を覚ました

夜泣き塚でのサソリの不審な行動

最初は夢かと思ったが

一つの単語が頭の中を駆け巡る

「暁・・・・」

何だか胸騒ぎがしている

サソリが遠くへ行ってしまうような気がしてならないのだ・・・・

「おねええさまああ!!!」

黒子は・・・黒子は寂しかったのです!!!!!!」

「く、くつつくなあああ!!!!放しなさい!!!!」

御坂の腰元に抱きついていている白井の頭にグリグリと肘を当て引き剥

がそうとしている

変わりませんね……

フウエイは学園都市の歩道を歩きながら一枚の写真を眺め（相変わらぬ無表情で）
少し微笑む

「……………友達……………」

そこに写っているのは

旅館の前で記念撮影をした佐天、サソリ、御坂、ミサカ
そして、フウエイの五人であった。

フウエイの中で感情が増え始めてる

フウエイは元々、サソリの世界で「三代目 風影」として砂隠れの里を引っ張ってきたのだが……

犯罪組織 暁のメンバーで同じ砂隠れの里出身の

天才傀儡師のサソリに暗殺され

彼の人傀儡となってしまうた……

しかしこの世界に来て

サソリの頭脳と風影の人傀儡・御坂美琴のクローンを使って「絶対能力者（レベル6） フウエイ」として造られたのだ

「……………！？……………マスター？……………」

学園都市の家から家へと飛び移っているサソリが視界に入る

暁の装束を着たサソリが・

サソリは暁の装束を来て移動を続けていた

「・・・十尾・・・」

まさか九体いる尾獣が元々は、一体であり
輪廻眼を持っている者でも封印するのが精一杯・・・

それほどの化け物とオレは戦うのか？

いや、その化け物を倒さないと佐天達が・・・

しかし、サソリの思考はある所にたどり着いていた

「未だ・・・十尾が暴れていないところを見ると・・・
封印されているか動けない状況にあるか
どちらにしろ・・・早く見つけないと」

サソリの推測は正しかった

現在、十尾の影は巨大なるチャクラを封印されている状態「零尾」
であつた

零尾・・・尾が一本もない状態。直径1m程の黒い球体となつて
いる

外からの刺激により「一尾」に姿を変える可能性あり

封印から解かれたら
時間の経過と共に尾が一本ずつ増えていく

尾が十本になった時

世界は一瞬で滅びる程のチャクラを持つてしまう

倒すためには九尾までで決着をつけなければならない

何故サソリがこれほど十尾の知識を持っているかというところ
ペインが対十尾戦のためにサソリに渡したからだ・

「・・・零尾形態を探さなければ・・・」

「マスター・・・」

「!!!!!!」

後ろからサソリと同じように高速移動してきているフウエイが声を
かけてきた。

「お前・・・」

「何処に行くのですか?・・・マスター・・・」

高速移動していた足をサソリは止める
それに伴いフウエイも止まる

サソリは、なるべく自分一人で十尾のことを解決しようとしていた
ため
フウエイ達には知られないように行動していたのだが・

「別に関係ない……」

ポーカーフェイスが得意サソリはいつもと同じ返事を返す

「尾獣のことですか……？」

「……！」

「私が造られた時に、研究者は奇妙なことを言いました。

「この少年の特殊なエネルギー波長は、あれと同じ……！すぐに本部に戻らないと」と……私の予想が正しければ……そこそが「尾獣」」

どうりで研究所にフウエイとマシンしかいなかったわけだ……

「……！！本部は何処にある……？」

「分かりません……」

フウエイは首を横に振り目を瞑る

まずいな……既に十尾は研究者の手にあるのか……

「それでは……いよいよ尾獣を起こすぞ……！！」
テイルヒースト

髭を生やした男性が右手を上げ合図を出すと

男性の後ろにいる研究員が目の前の装置にスイッチを押した。

すると黒い球体に赤いレーザーが照射され始め

黒い球体はレーザーを受けている所から不気味に波打っている

研究員はゆっくりとレーザーの光を調節つまみを時計回りに回していく

「計算上では上手くいくはず……」

レーザーを照射してから

数分後

黒い球体の波打ちが激しくなり一本の尾が出現した

零尾から一尾に姿を変えたのだ

「今だ!! 圧縮!!」

別の研究員が赤いボタンを押すと

半球状の強化ガラスケースの中にいた一尾がその場に小刻みに震えていた手足と顔らしきものが身体を中心に戻されそうになるのを堪えている

「よし!! このままいけば……」

だが一尾のチャクラの量は研究者の計算を遥かに超えていた

ビッーーーーー!!

ビッーーーーー!!

突如として赤いランプが点灯し
けたたましいサイレンの音が響く

「どうした！！何が起きた」

「だめです！！！！これ以上は制御できません！！」

一尾の計算外のエネルギーに動きを止めるのが精一杯という感じで
あった

さらに状況は悪化する

「尾がもう一本生えてきました・・・」

一尾から二尾へのスピード進化

一気に莫大な量のチャクラが研究所に溢れ始める

もはやコンピュータでは動きを止めることが出来なくなり

半球状の強化ガラスが粉々に弾けとんだ

「グアアアアーーーー！！！！！！！！」

漆黒の獣が大きく口を開き咆哮していた

「！！！！！！」

「!!!!!!」

サソリとフウエイは巨大なチャクラの量を感じとり
一斉に同じ方向に顔を向ける

「・・・・・・・・見つけた・・・・・・・・」

やはり封印が解かれたか

「マスター・・・・・・・・この先3km先です」

再び体勢を変え高速移動を開始し研究所本部へとひた走る

ハザード（災害）発生の研究所本部

「あ・・・・・・・・まさか・・・・・・・・これほどは・・・・・・・・」

頭にバンダナを巻き眼鏡をかけた女性が実験場から出て来た二尾に
驚き呟く

注）ちなみに今作の設定

一尾・・・・・・・・零尾から尾が一本生えた状態。

形は人型に近く、大きな口を持っている

原作では「守鶴」と呼ばれ

人柱力は「我愛羅」である

二尾・・・・・・・・一尾とそれほど姿は変わらないがチャクラの量が増大
している

原作では「猫又」と呼ばれ
人柱力は「二位ユギト」である

「グオオオオオー！！！！」

ひとしきり咆哮をした後に二尾は首（全身が影のようになっている
ため確証はない）を回し
眼鏡をかけた研究員に顔を向ける・・・

十尾の影であるこの生き物は思考能力がなく
ただ破壊するだけの存在であつた。

二尾はその体勢のまま鋭く尖つた前脚を伸ばし研究員に襲い掛かつた
研究員には二尾の動き（モーション）を捉えることができず・・・

ドオオオオオン

凄まじい金属が破壊される音が響き辺りに噴煙が巻き起こる

しかし振り下ろされた爪は獲物を捕らえず無惨にへし曲がつた機材
がバチバチと音をたてているだけであつた。

44、最終決戦（前）（前書き）

ようやく書き終わりました
ではサソリの最後の戦いをどうぞ

44、最終決戦（前）

「……………危ない所だったな……………」

バンダナを頭に巻き眼鏡をかけた研究員は自分の置かれている状況が分からなかった……………」

次第に視界が拓けてくる

自分を抱えている赤い髪の少年と黒いコートを着ている若い女

二尾の鋭い爪の攻撃を間一髪でかわし
研究員を救ったのはサソリであった

「……………き、君は……………」

サソリは視線を二尾から離さないようにしながら

「尾獣がお前らごときに制御出来ると思ったか……………
これはオレの世界で戦争の道具だ……………十尾を抑えられるのは輪
廻眼を持つ者だけだ……………」

サソリは二尾から視線を外し眼鏡の女性を見据える

「研究者なら人の役に立つことに使え……………お前達が暴走すれば
世界は負の方向に動いてしまう……………
よく考える……………」

サソリはかつての自分を戒めるように言い

女性を諭す。

「マスター……いよいよですね……」

「なんとしても十尾の前で倒すぞ」

佐天達に気付かれないように……ひっそりと……

佐天達にはかけがえない繋がりを貰った

かつてのサソリは戦争で両親を失い

精神的に追い詰められ

たった一人になった肉親

を裏切り抜け忍となった

その後の末路もう知ってるだろう

そしてこの世界に来てかけがえのない者が増えた

自分の祖母の思いに気付かされた……

おそらく……この戦いが終わったら

オレは……

考えるのはやめだ……

オレのような犠牲者、人間をも増やしてはいけない

とある暁の傀儡師

エクスマキナ

最終決戦 十尾襲来

サソリは眼鏡をかけた研究員を少し離れた所に下ろし
二尾の前に立つ

「オレは・・・暁のメンバー・赤砂のサソリ・キサマを狩る者
だ・・・」

サソリは暁の装束を脱ぎ始めた

「最初から本気でかかるぞ・・・久しぶりだ・自分を使うのは・
」

サソリの上半身には以前のような傷痕がなくなり
プロペラのようなカッターが背中につき

鋭い刀がついた腹部のワイヤーが姿を現す

人傀儡 サソリ

人間は、とうの昔に辞めた
佐天達をこの世界を

守りたい・・・

「フウエイ……お前はオレの思考が分かるな……？」

「はい……私はマスターの頭脳によって生まれました」

「……だったら……オレの動きに合わせてもらうぞ……」

サソリがフウエイに指示を出す

フウエイはサソリの前に出ていく

それはかつて木の葉の忍と自分の祖母との

生死をかけた壮絶な戦いと酷似していた

「グオオオオー！！！！」

辛うじて見える二尾の眼が二人を睨み付ける

「いくぞ……」

サソリとフウエイはその場から姿を消し

二尾にかかる

二尾の背後から現れたのは人傀儡サソリ

プロペラのようなカッターを身体の横に回し切りつける

しかし

「マスター！！三尾になります……」

サソリが二尾を切り付ける刹那

二尾の尾が一本増え
三尾へと姿を変えた

先ほどとは比べものにならない程のチャクラが流れでる

「ヤバイ・・・」

サソリは瞬時にワイヤーを自分の後方に飛ばし
離れようとするが

三尾となった十尾の背中からもう一体の三尾が出現しサソリに向か
って鋭い爪を振り下ろす

「間に合わないな・・・」

サソリは振り下ろされる三尾の爪を見ながら後方に飛ばしたワイヤ
ーを手繰りよせる

ワイヤーの先の刀は地面に深く刺さっており
自然とサソリの身体はワイヤーの先端へと向かっていくが

それよりも速いスピードで三尾が襲い掛かった

爪が真っ直ぐサソリを上部から切り付ける

サソリの身体はバラバラとなりその場に崩れ落ちる

爪を振り下ろした衝撃で辺りにクレーターのような窪みが出来上がる

「マスター!!」

三尾はフウエイを睨み付け獲物を変える

「この程度でオレが倒せると思ったか……」

三尾の後ろでバラバラになったサソリが組み上がっていく

カチャ　カチチ・・

最後に首を180度半回転させ

三尾を再び人形のような眼で睨み付ける

爪が振り下ろされる瞬間に自分で自分をバラバラにし衝撃を受け流したのだ

十尾の影であるこの生物には思考能力はないが

凄まじいまでの破壊本能があり

同じ試みには二度と応じないだろう

これではサソリを倒せないと分かれば
周囲の警戒を強める

これは学習ではなく十尾に刻みこまれた本能である

「四尾以上になるとあれが出てくるな……」

サソリの両手から筒のようなものが伸びてきて

真っ直ぐ三尾の方に向け
火炎を吹き付ける

当然の如く三尾はかわし
サソリの真上へと移動し押し潰そうとする

「かかったな……」

「砂鉄界法……」

フウエイの砂鉄が毛細血管のようになり
三尾を貫いていく

絶妙にサソリの足場に危害を加えないようにコントロールをし……

「私がいることを忘れないでください……絶対能力者（レベル
6）の力を見せてあげます……」

三尾におびたらしい数の砂鉄が突き刺さり
三尾はそこで藻掻いている

するとフウエイは黒いコートのポケットからメダルゲームのコイン
を取出し

「レールガン超電磁砲……」

青い電流が毛細血管のように張り巡らした砂鉄に流れこむ

その温度は急上昇し赤みを帯びていく

「グアアアア……！！！！」

砂鉄がキュリー温度（磁力がなくなる温度）の影響により
形を崩していくのと同時に三尾も様々な大きさの球体となり
弾けていく

「終わったか・・・よかった・・・四尾になる前に止められて・・・」

「マスター・・・どうするのですか？」

もう・・・その身体では・・・」

サソリの仕込みだらけの身体を見てフウエイが心配そうに呟く

「オレは佐天達の前から姿を消すつもりだ・・・
これで・・・いい・・・」

サソリは目を瞑り

開けると佐天達がいると思われる方向に視線を合わせる

まるで何事もないように感じさせる学園都市が遠くに見えていた

ギョオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

「!!!!!!!!!!?」

「!!!!!!!!!!?」

終わって等いなかった・・・

サソリとフウエイの直ぐ後ろに十尾の影の邪悪なるチャクラの球体
が集まっているのだ

次第にチャクラは形造られ

サソリ達を見下ろす巨大な化け物へと変容したのだ

その尾の数は四本

四尾の出現であつた

「な．．．何．．」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ー！ー！ー！ー！」

四尾は巨大な四本の尾を思いっきりサソリ達の所に叩きつける

「マスター！！危ない．．．」

「お、おい．．．」

フウエイはサソリに覆い被さるようにし四尾の攻撃をかわそうとする

ドオオオオオオオオオン

凄まじい爆音と共に四本の尾が地面に突き刺さる

「大丈夫か．．．フウエー！！！」

サソリを庇ったフウエイの背中には鋭い傷と鮮血が黒いコートを染

めていた

サソリは再び四尾に目をやる

「この・・・化け物め・・・」

学園都市

急に避難命令が出されたため

御坂と白井は風紀委員ジャッジメントの所に行き原因を究明しようとしていた

「何が起きたのですか？」

「学園都市外れにある大型の研究所でハザードが発生したのよ」

「ハザード・・・？」

すると白井の風紀委員の先輩がパソコンの画面を二人に向け

「数分前の監視カメラの映像なんだけど・・・」

画像には研究所から外に飛び出す漆黒の生物が写っている

尾の数は二本・・・この時点で知ってる生物ではない

しかし御坂はあるモノを発見する

「これって・・・」

御坂が指さしたのは

漆黒の生物を追いかける二人の人間

どちらも黒い服を身に付けていた

「佐天！！何してるんですか！！？」

「いいじゃん初春！！」

だって急に巨大な動物が現れたんだよ！！」

「早く避難しないと大変なことに・・・」

p m m m m m ♪

初春の携帯電話がメロディを奏でる

初春がパカッと携帯を広げると

液晶の画面に白井黒子と表示されていた

初春が電話に出ると

「初春！！！！何処にいるのです？」

「あ、白井さん！！！！」

今他の人に避難を呼び掛けている所です」

「そうです・・・そこから何か見えますの？」

例えば黒い生物・・・」

「いますいます・・・凄く遠くで暴れていますよ」

「直ぐに佐天さんと一緒に来なさい・・・重大なお知らせがあります」

白井の電話が一方的に切られる

初春と佐天は白井に言われた通りに風紀委員の本部にやって来た

「あの・・・来ましたけど・・・」

初春がパソコンと向かいあっている白井に声をかける
何か画像を見て仕切りに解析にかけていて初春に気づかない

「あ、初春さん達来たね・・・どう黒子」

御坂が強めに肩を叩くと

白井が目を擦りながら

「間違いないですわ・・・
なにゆえ何故にこんな無茶なことを・・・？」

「やっぱり・・・サソリとフウエイか・・・」

その言葉に佐天が反応する

「ど、どういことですか？サソリが・・・」

佐天に白井と御坂が画像を織り交ぜながら説明をしている

サソリの戦っているのは常識的に考えてあり得ない量のエネルギー
を持っていることを・・・

「今すぐ私達はサソリを助けに行こうと思ってるの
佐天さん達はここで待ってて」

佐天は知らなかった

サソリがそんな所にいるなんて・・・

朝だつて普通にあたしが学校に行くのを見送ってくれたじゃん

不意に頭に「暁」の単語が浮かぶ

やっぱり・・・それが関係しているの？

サソリ・・・

「あたしも行きます！！！」

ここで逃げたらサソリが遠くに行ってしまう

そんなの嫌・・・

サソリと四尾が激しい攻防を繰り広げていたが
サソリの相手はチャクラの化け物と称される程

チャクラの量は莫大に持っている

さらに時間が経過すれば

尾の数はどんどん増えていき

戦局は悪化するばかりである

それに引き換えサソリのチャクラは確実に減っていた
四尾の攻撃をかわすため
砂分身などを使っていたからだ

先程から防戦一本

攻撃は四本の尾に弾かれ
たまに当たったもダメージを与えるには至らない

「まだ・・・四尾でこれか・・・」

サソリの傀儡の身体には無数の傷があったが

この身体は痛さを感じない

それが救いなのかどうかも分からない

サソリはチラッとフウエイの方を見る

攻撃が当たらないように避難させたが

背中からの出血は止まらず未だに意識が戻らない

「グオオオオーーーー！！！！」

四尾は四本の尾と大きな口を上に向け
チャクラの球体が次々と一つになっていく

「まずい！！・・・」

サソリはその場から移動しようとした

その時！！

青色の閃光が一直線にサソリの後方から飛んできて

ドゴンツ！！！！バチバチ

四尾の口に命中し溜めていたチャクラの球が一気に消滅していった

サソリが後ろを向くと

佐天と御坂・白井が慌てて向かってきていた

「お前ら・・・」

「大丈夫！！？サソリ・・・その身体は？」

佐天達に気付かれた・・・

サソリの隈のある目が一層大きくなる

「お姉様！！！！わたくしは傷だらけフウエィを病院に届けて来ます」

「お願い・・・」

御坂はバチバチと頭に電流を発生させながら四尾を見据える

サソリは傀儡の身体で二人を見て

「何で来た・・・？」

「え・・・！」

御坂と佐天は驚いてサソリを見る

「ここはオレ一人でもいい・・・お前達はさっさと逃げろ・・・
見ての通りオレは人形だ
そんなことされても恩は感じないぞ・・・」

サソリは自嘲的に言葉を並べていく

「人間は人間らしく・・・自分より強いモノに喧嘩を挑む・・・
・こういうことは人形に任せればいい・・・」

サソリがそう言い放った時

佐天は大きくサソリの前に出て

パシィィィィンッ

サソリの傀儡の頬に衝撃が走る
痛みはないが・・・

サソリが目を丸くして佐天を見る

「そうやって何でも一人で背負いこまないでよ
あたしにも話してよ
背負わせてよ!!!!

そんなの自分勝手すぎるよアンタは人形じゃない!!
あたしがよく知ってる!!
だから・・・」

佐天の目から涙がこぼれていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

痛くない頬を擦りながらサソリは未だに佐天の方を見ている

少ばかり時間^{とき}が止まったような感じだった

「!!!!!!」

サソリは何かを感じとり御坂の後ろにいる四尾に視線を合わせる

御坂もそれに合わせて振り返ると

四尾の尾がスウィーと一本増えたのだ

五尾へと姿を変えたのだ

ここまでくると

チャクラの量が火山の噴火のように溢れだす

ドオオオン

「アアアグオオオー」

五尾は佐天達めがけて鋭く巨大な爪を振り下ろす

サソリは腹部についたワイヤーを伸ばしていく
ザシュ

とこの位置から離れた所にワイヤーの先端が刺さる

サソリは急いで佐天と御坂を右側の手で掴み上げ
ワイヤーを巻き取り移動しようとするが

眼前に迫る巨大な爪

「間に合わない・・・クツ!!」

サソリは左手を五尾の前に出し
チャクラの盾を発動した

これで幾分か衝撃が和らぐ
だが圧倒的なチャクラを有する五尾には問題なくサソリを弾け飛ばす

ドオオオオオオオン

再びクレーターが大きくなった

しかしこれ程の衝撃があつたのに
佐天と御坂にはダメージは全くなかった

「・・・・・・・・・・？無事？」

キョロキョロと周りを見回す佐天と御坂

横には自分を抱え上げているサソリの姿が・・・

「さ、サソリ！！！！左腕が！！！」

御坂も佐天の声に反応してサソリの左方向を見ると

サソリの身体が左肩から腰元まで無くなっていたのだ
五尾の攻撃により左の大部分が吹き飛ばされたのだ

「大丈夫か・・・・・・・・？」

青ざめている二人を無表情の顔で覗きこみ確認する

確認するとサソリは二人を地面へと下ろし対策を練る

（左手を失ってしまった・・・・・・・・これでは印が結べない・・・・・・・・）

忍術の基本は両手で印を結び発動している

片腕を失ってしまえば忍者もただの人間だ・・・

極たまに片手でも出来る奴はいるが

サソリは傀儡に力を投じたため

そんなことは出来ない

グラリッ

サソリの視界が歪み始めていた

「グッ……何故……？」

立っていらなくなりその場に崩れ落ちる

サソリが吹き飛ばされた左半身に目を向けると

自分の弱点である「蠍」と書かれた所が五尾の攻撃により欠けていたのだ

それほど大きく欠けた訳ではないが

全身のチャクラを操る所のため
ダメージを受けたら致命的な部分だ

サソリはこの部分に攻撃を食らったため
チャクラの流れが乱れ
立っていられなくなった

「身体がうごかん……」

心配そうにサソリに駆け寄る御坂と佐天だが
当然治すことも出来ないでいる

「……！！！！！！」

サソリの視線が恐ろしいモノを捉える

五尾が五本の尾を口元に集め再び大きな口に邪悪なチャクラを溜め始めていたのだ

「お前ら・・・逃げろ・・・」

もはや話すことも辛くなる

「佐天さん！！あなたはサソリを連れて早く避難して・・・私はここで食い止める」

そう言うのと御坂はチャクラを溜めている所に向かって超電磁砲レールガンを放つ

佐天は急いで倒れているサソリの右肩を首にかけ移動を始める

「サソリ・・・凄く軽い・・・」

傀儡の身体であるサソリは思っていたよりも軽かった
急いでサソリを運ばないと・・・

五尾にはレールガンを打つても怯むことはなく
チャクラの球はみるみる増大していく

「ダメ・・・止められない・・・」

五尾はチャクラの塊を圧縮し

パクンと口に放り込む

その瞬間、五尾の身体は一段と大きくなる

照準をサソリに定める

おもむろに口を大きく開き漆黒の破壊チャクラ球が地面を削りながら
も真っ直ぐ

サソリと佐天の方へと信じられないスピードで向かっていく

「!!!!!!」

サソリは迫りくるチャクラ球を見ながら

（また……失うのか……それは嫌だ……
守りたい……守りたい……）

サソリは身体の重心を佐天に預けるように残った右腕をチャクラ球
に向ける

「オレが……守る……」

「神羅天征」

サソリの右腕から凄まじい斥力が発生しチャクラ球と相殺し

大爆発が起きる

サソリの両目に輪廻眼が宿っていた

45、最終決戦（後）（前書き）

すいません・・・決着は次回です
キリがよかつたんで・・・

今回は特別ゲストが登場します。

せっかくNARUTOのアニメで「ペイン襲来」をやってるんで・・・
・・・ペインも好きです

45、最終決戦（後）

「これは……」

チャクラが湧き出てくる

これなら……十尾を……

サソリの輪廻眼が五尾を捉える

「口寄せの術……」

ドロンッ

煙と共に現れたのはかつて木の葉を襲った

ペイン六道の一人

畜生道（女）

サソリの意志とは無関係に身体が動き

口寄せの術を発動したのだ

頭の上で結ばれた橙色の髪の毛でサソリと同じ暁の装束を着た女性が
ゆっくりと目を開きサソリの方を見る

その目には輪廻眼が宿っている

「ペインからの最後の言葉がある

「サソリ……最後の暁の命令だ……十尾を狩れ
失敗は許さん……」

これで・・・オレはあなたに意識を移します」

畜生道は輪廻眼の目を閉じて
そして開く

サソリの視界が一人分増えた
畜生道の操り方が頭に流れこんでくる

ペインが最後にサソリに託した術

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

五尾が遥か上空を仰ぎ咆哮を続けている

御坂がレールガンを打っているがあまり効果はない

「何なのよ！？この生物は」

全て五尾のチャクラに弾かれるのだ

「グオオオオオー！！！！」

ギロリと御坂に標的を変え巨大な爪を振り下ろそうと振りかぶる

「・・・あ」

「口寄せの術・・・」

女性特有の高い声が響くとサイのような動物が現れ五尾に突進して
いく

モーションの途中でガラ空きだった脇腹に強固な角が突き刺さる

「ガアアアアアア！！！」

ドオン！！

「大丈夫か御坂？・・・」

御坂が横に振り向くと片腕のサソリが飛んできた

「サソリ・・・大丈夫なの？」

「心配ない・・・十分戦える・・・今の隙に・・・」

サソリは畜生道を輪廻眼で操り始め

「ちょっと・・・サソリ！！大丈夫なの？」

急に現れた女の子も気になるけど・・・

「佐天・・・ここから避難するぞ・・・お前では危険すぎる」

橙色の髪をした女の子が佐天に有無言わず

佐天を抱え上げ（いわゆるお姫様抱っこ）高速移動を開始する

「・・・えっ！！！！ちょっといきなり／／／／／」

何故か恥ずかしがる佐天

「さ、サソリ・・・？」

見た目女性ですよ

「どうした・・・何処かケガしたか？」

反応した・・・やっぱりサソリだ

「どうするのこれから？」

「輪廻眼を手に入れたから形勢は逆転するかな・・・！！！！ど
うやら上手くいきそうにないな・・・六尾になった」

りんねがん・・・何ソレ？

六尾ってことはあの化け物はパワーアップしたってこと・・・？

「じゃあ・・・」

サソリの畜生道は佐天の目を見て

「初春の所に行く・・・何か対策があるはずだ・・・」

ジャケット

風紀委員本部

畜生道は佐天を下ろし部屋に入る

ガチャ

「あ．．．．佐天さん無事だったんですね！．．．．誰で
すか？横の人」

「えつと．．サソリです」

「ええ〜〜〜〜！！凄いかわいい方じゃないですか」

めっさ驚く初春

あたしも最初はそうしたい所だよ

「説明が面倒だ．．オレの本体と御坂が化け物を足止めをしている
ここで作戦をたてるぞ」

「お姫様が．．．」

白井がテレポートで本部にやってきた

本当は御坂の所に行こうとしたのだが
最前線でのテレポートを危険と判断してのことだった

「すぐに助けにいか．．．誰ですのこの女性は！！？」

先に進みたいのだが．．

ん．．待てよ

「白井さん．．この人は「サソリだ」．．．．」

佐天の発言に割り込んできた女サソリ

「白井・・・フウエイは無事か？」

「サソリさん？・・・！！！！ええ、背中に深い傷痕が残りますけど・・・命に別状はありませんわ」

「そうか・・・」

もしかしたら・・・上手くいくかもしれん

畜生道は両目を瞑り
通信を始める

（フウエイ・・・聞こえるか・・・）

病院内

出血多量で意識不明のフウエイの脳内にサソリの声が響く

（フウエイ・・・聞こえるか・・・）

ま、マスター・・・！？

私は・・・

「う・・・はあはあ」

意識不明に陥っていたフウエイが目を覚ます

出血が次第に治まり身体が回復していく

（上手くいった・・・お前にも十尾を倒すのに協力して欲しいかな・・・すまない・・・）

遠隔の回復忍術によりフウエイの体力を回復させたサソリ

「らしくありませんね・・・マスター・・・私は貴方に作られたモノ・・・命令を下されば・・・いつでも・・・」

素直なサソリに半ば驚きながらもフウエイは答える

「わかりました・・・行きます」

フウエイは近くに掛けてあつた黒いコートを羽織り窓の縁^{へり}に足をかける

看護師がそれに気が付いて

「ちよつと！！！！あなたは重傷なんですよ
バカなことは止めて下さい！！！！」

フウエイは制止を気にすることなく窓から身を投げる
刹那

フウエイの身体の周りに砂鉄が集まり
空中の足場が出現する

「まずは・・・マシン達を呼び寄せますか・・・」

フウエイは向いている方向を修正し

研究所に砂鉄の乗り物で向かう

「よし……………」

サソリの畜生道が輪廻眼の目を開き呟く

「初春は何してるのよ？」

「一応出勤していると思いますが
アンチスキル
ジャッジメント
警備員と他の風紀委員に連絡をしています」

佐天と初春がパソコンとにらめっこしている時

「では…………サソ리さん……この生物いきものの正体はなんですか？」

白井が畜生道のサソリにモニターに写る六尾を指さしながら問う

「この化け物は…………尾獣と呼ばれるモノだ
尾が一本増えることにより力が強くなる
最高で十本まで増える」

「ということは…………時間との勝負というわけですね」
「そうだ…………!!!!」

畜生道は窓を慌て開け六尾の方を見る

「おい…………七尾になりやがった……………」

七尾に姿を変えた十尾が学園都市の中心に向かって体当たりを仕掛けていた

「ちよつと！！！下ろしなさいよ！！！！自分で走れるわよ」

「黙れ．．．お前のスピードでは追い付けない．．．．．」

髪を引っ張るな．．．．．」

人傀儡のサソリの背中に御坂が乗っている

落ちないようにチャクラ糸で縛りつけ

高速移動をし七尾を追走している

「どうすんの！！！！あんなモノ学園都市の中心にやってきたら．．．

」

「心配ない．．．オレの分身が止める．．．」

窓の外を見ている畜生道が

「お前達はここにいろ．．．．．」

「え．．．！！ちよつ！！！！ここ三階」

畜生道のサソリは窓から身を投げ

綺麗に半回転をして地面に着地した

畜生道のサソリは高速移動を開始し

七尾の向かってくる所まで行く

「ここか……口寄せの術……」

畜生道は今度は両手を地面につけ口寄せをする

現れたのは三枚の扉

「三重羅生門」

問答無用にこの門に体当たりする七尾

しかし畜生道の羅生門は簡単には破れない

最後の三枚目の門まで大きくへこんだが

七尾はここで止まる

「止まった……」

「えっ!!ちよっ!!!!」

きゃああああああ

人傀儡のサソりは素早く飛び上がり

七尾と一直線に並ぶ

「雷遁・四柱しばり……」

七尾を取り囲むように出現したのは4つの巨大な石

その石からバチチチと雷が流れ

七尾の動きを止める

サソりは斥力の力で宙に浮きながら

背中に背負っていた御坂のチャクラ系を緩め

自由落下させる

「ちよっ！！！！きゃあああああ！！！！」

すぐ下に構えていたのは畜生道のサソリ

御坂を畜生道が受け止めるとその場から急いで離れる

七尾の圧倒的なチャクラにより雷遁・四柱しばりが解けかかる

「一瞬・・・動きが封じ込めればいい・・・」「地爆天星」

サソリの右手から黒いモヤモヤした球体が出現し

それを宙に浮いているサソリが真下の七尾

目がけ投げ下ろす

御坂を安全な所に避難させた畜生道が七尾に近づき

「・・・・・・口寄せの術・・・」

ドロンツと現れたのは

先程空中にいた人傀儡のサソリ

「仕上げだ・・・」

強力な重力で動けない七尾にサソリが近づき影分身で二人増やす

輪廻眼を持った4人のサソリ（畜生道も含む）が地爆天星が完全に発生していない隙に七尾の四方向にちらばり

「・・・・・・四紫炎陣・・・・」

七尾の周りに紫色の結界が現れ
取り囲む

結界内で地爆天星が最大級になり七尾を押し潰す

「グアアアアアアアアア・・・・・・」

咆哮も次第に止みサソリの分身が二人とも消えた

「え・・・・・サソリって・・・・ここまで強い・・・・」

佐天達と合流した御坂が人傀儡のサソリの後ろ姿を見て呟く

「たった一人で・・・・」

佐天達は自分の目を疑った

あのサソリが・・・・

「あ！！！！アンチスキル警備員が来ましたよ」

七尾を地爆天星で封じ込めたサソリの後ろに警備員がやってきた

「君！！！！大丈夫か・・・・？
一人でやったのか・・・・？」

アンチスキルも信じられない感じであった

サソリと畜生道はアンチスキルが来ても視線を変えず七尾の方を見続けている

「今のところ・・・学園都市にはあまり被害がありません・・・」

あぶなかった・・・

後少し七尾の進行を許していたら・・・

「!!!!!!!!!!!!まさか・・・」

地爆天星が破れ始めている

サソリはチャクラを放出し動きを止めようとするが

結界にヒビが入り

「グア・・・グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!!!!」

「まずい・・・」

ドオオオオオオオオオオ

地爆天星と結界が破れ

再び漆黒の尾獣が姿を現す

その尾の数・・・八本

八尾は既にチャクラの球体を口に用意した状態であった

圧縮しチャクラ球を口に入れる

身体が瞬時に膨張をする

「・・・・・・口寄せの・・・・・・」

だめだ・・・・三重羅生門じゃあ・・・・間に合わない・・

このままでは学園都市に・・・・

サソリの脳裏に破壊される学園都市が浮かぶ

問答無用にチャクラ球の凄まじい光と爆音が発生し

サソリの思考の時間を与えない位のスピードでチャクラ球を解き放つ

「く・・・・万象天引・・・・」

だめだ・・・・地爆天星をした直後は使えない

一直線に地面を削りながらチャクラ球が学園都市の主要機関に迫る

「学園都市を破壊する・・・・そんな幻想・・俺がブチ壊す」

チャクラ球の先にいたのはツンツン頭の上条当麻

右手を前に突き出しチャクラ球を消滅させる

上条の幻想殺し（イマジンブレイカー）が邪悪なる八尾のチャクラを消したのだ

「ありがとうございます……上条当麻様……貴方達を呼んで正解でした」

「別に構わないぜ……面倒事には慣れているからなえっと……フウェイだっけ？」

「はい……マスター……無事ですか？」

学園都市の中心に砂鉄に乗ったフウェイと上条が立っている

それだけではない……

御坂のクローンの妹達シスターズが重厚な武器を持ち

フウェイの部下であるマシン達マシンガン等を装備

そこにアンチスキルとジャッシュメントが上空や地上に銃を構えている

「お前ら……」

いつの間にかサソリの周りには仲間が増えていた

「……口寄せの術……」

ドロンツと煙と共に現れたのは

巨大なサイ、犬、むかて蚣鳥、蟹

「ここで決着をつける……」

「行くわよ!!!!黒子

私達も戦いに」

「ええ！！！！この都市を守るのが我々、風紀委員の務めですの！！」

御坂と白井が戦線に赴いていく

残るのは自然と無能力の佐天・レベル1の初春

「また・・・蚊帳の外か・・・」

（佐天さん・・・そうだあの人に協力を依頼を・・・）

初春がパソコンを通じコンタクトを取るのは
レベルアップ
幻想御手事件で逮捕された

木山春生

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

八尾となり十尾までのカウントダウンが近づいていく
それに対抗するのは・・・

輪廻眼 サソリ

畜生道

御坂

白井

上条

フウエイ

ミサカ達

畜生道の口寄せ動物

アンチスキル
警備員

ジャッジメント
風紀委員

マシン達

今までに類を見ない

壮絶な戦いが始まろうとしていた

46、悲しい決着（前書き）

次回で最終回となります

46、悲しい決着

十尾へのカウントダウンが迫るなか……

学園都市の精鋭達が結集し十尾の影との最後の戦いが始まる

片腕を吹き飛ばされたサソリに警備員アンチスキルの一人が走り寄る

「君！！あの巨大な生物の倒し方は知っているか？」

「……オレに聞くのか……？」

「あの生物を一回あそこまで追い詰めたじゃないか……教えてくれ」

「……言っておくが……もうあそこ迄はもうできない……地爆天星を使って……オレのチャクラはほとんど残っていない……それに……相手のチャクラが増え過ぎている……封印は不可能だ……」

うちはマダラなら別かもしれないが……

「そうか……総員！！あの生物の駆逐を遂行する！！指示は赤い髪の人間（少年）だ」

彼はあの生物と一人で渡り合った能力者だ！！！！

異義のある者はいるか！！？」

警備員アンチスキルの一人が部隊全員に呼び掛ける

八尾を倒すために集まった人達は誰一人

否定をしない

警備員の代表がクルツとサソリの方を向き

「では・・・隊長！！指示を
あの化け物を倒す指示を！！」

オレが隊長・・・？
久々だな・・・

「・・・・・・・・まずは化け物の重心をずらし転倒させる
・・・・・・・・後は奴が動くには「核」のようなモノが存在しているはず
だ・・・・・・・・そこを破壊すれば消滅する」

的確な指示だった・・・

「オレとフウエイが前脚を破壊する
お前達は後ろ脚を頼んだ・・・」

「わかった・・・全力を尽くす！！！！」

サソリは指示を出すと上条と御坂・白井を呼び寄せる
「お前（上条）は・・・・・・・・あのチャクラをどうした？
消滅したように見えたが・・・」

「・・・・・・・・ちやくら・・・・・・・・？あの黒い光線か？
いや、俺の右手には幻想殺し（イマジンブレイカー）という能力が
あって

異能の力を消滅させるんだ」

「つまり・・・奴の攻撃を防げるんだな・・・
お前達がこの戦いに勝利する鍵となっている・・・」

「ど、どういこと・・・？」

「御坂・・・電流はあれ以上強くなるか？」

「うん、黒子の助けがあれば・・・なんで？」

「お前が核を破壊するんだ・・・」

「「「!!!!!!」」」

「あの化け物の厄介な所は俊敏な脚力

膨大なチャクラ

そして・・・全身を守るチャクラの鎧

しかしチャクラの鎧は強力なチャクラ球を放出した時だけ

一瞬だけ消える・・・そこを御坂が狙う・・・

失敗すれば後はない

わかったか・・・」

「でも・・・私は・・・」

「そうだ・・・いくら何でも無茶過ぎる

俺は構わないが・・・他の安全策を」

「そうですね・・・お姉様が危険過ぎます!!!!」

サソリの作戦に初めて異義を唱える三人

「黙れ」

サソリの一喝で沈黙が支配する

「時間がない．．．尾の数が十本になった時、この世界は破壊される

これは命令だ．．．お前達の安全を最大限考えてな．．．」

「何これ．．．目を見てわかる圧倒的な実戦経験の差が．．．」

木山のいる留置所

「ここまで来て私に何の用かな？」

佐天と初春がかつての幻想御手事件で逮捕された

木山春生の元を訪れていた

「木山博士（先生）」

今学園都市で暴れている生物についての助言が欲しいです．．．
科学者の立場から．．．」

初春が話を進め

生物の特徴などを述べていく

しかし佐天は何も出来ない自分に苛立ちを覚えていた
無能力．．．特に役に立つスキルもない

サソリがこのままじゃ

遠くに行ってしまう．．．

嫌．．．そんなの嫌

「すいません！！！！もう一度．．．もう一度だけ

レベルアップバー
幻想御手を使わせてください」

予想だにしない佐天の発言に初春と木山の会話が途切れる

口火を切ったのは初春

「だ、ダメですよ！！！！」

夏休みに事件に巻き込まれて大変だったじゃないですか！！！！」

「で、でも！！！！もう待っているのは嫌！！！！」

リスクがあってもいいですお願いです

使わせて下さい」

慌てて佐天を止めようとするが

意志が固かった・・・

「・・・・・・・・・・実は・・・留置所にいる時に能力者と無能力者の違いについて研究が続いている・・・・・・・・特別な許可が下りてな・・・・・・・・」

私のパソコンにそのデータが入っている
レベルアップバー
幻想御手とは違い単体でも使えるようにした・・・」

しかしその装置はまだ試作品のため

一回しか使えないし

その能力が定着するわけでもない

要は、自分がどの能力に属するか位しか解らない

効力はレベル1程度・・・役に立つかどうかとも怪しい

そんな説明をガラス越しにポツリポツリと木山が話す

「もし使いたいのなら・・・メモリーを渡す

音楽になっているから・・・ダウンロードするといい」

「あ、ありがとうございます!!!」

そのことを聞いて佐天は深々と礼をする

「また・・・騙してる訳ではないですよね・・・!？」

初春が訝しげに木山を見つめる

「まだ・・・人体で試したことがない・・・いいサンプルになる
かもしれないな

おっと・・・そんな怖い顔をするな・・・
何も出来ないよりは少しでも力になりたい
どんなに小さな力でも・・・私にもわかる」

木山は部屋の上の方を見て教師時代に触れ合った教え子を思い出す

（せんせー 木山せんせー）

まだ・・・諦めてない

八尾 戦場

八尾の前後に分かれ攻撃を仕掛ける

八尾の前方

輪廻眼サソリ

畜生道

口寄せ動物 犬 サイ

フウエイ

マシン（二部に分かれ）

八尾の後方

ジャツジメント アンチスキル
風紀委員警備員

シスターズ

口寄せ動物 鳥 蛇 蟹
むかで

マシン

全部の脚を破壊し動きを止める

チャクラ球の防御

上条当麻

トドメ（核破壊）

御坂美琴

御坂、補助

白井黒子

「よし・・・いくか・・・」

サソリは背中に装備されている巻物をチャクラ糸で引き上げ

バサッと広げる

それと同時にサソリの右胸にあるフタを外す

中から膨大なチャクラ系が巻物から飛び出してくる傀儡に装着され

サソリの真上に黒い戦士が八尾を見据える

「最後のカラクリを見せてやる．．．．赤秘技・百機の操演．．．
」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
」

「さて．．．ノルマを達成するか．．．」

「この場所で化け物を倒すぞ！！！！チャンスは一度つきり！！
！！！！総員心してかれ！！！！」

警備員の号令と共に八尾の脚部に攻撃が開始される

サソリの傀儡群が向かって右前脚を切りつけ

フウエイがそこに砂鉄を流しこみ
切断をする

サソリの畜生道は全体を見ながら

八尾の攻撃の動きが始まったら
口寄せ動物で体当たりなどをし動きを抑える

マシン達はマシンガンや切断カッターで八尾の脚に攻撃する

シスターズはミサカネットワークにより常に最新情報をサソリ達に

伝える伝令役と銃で攻撃

風紀委員は能力を駆使し
警備員は銃器で対応

八尾は最後の抵抗を始め
腕を振り下ろそうとするが

サソリの畜生道は口寄せ動物に指示を与え
犬とサイが八尾の脇腹に体当たりをする
八尾は大きく身体がよろけ真横に倒れた

[illegible]

完全に八尾の動きを封じ込めることに成功し
順調に四本の脚の内
三本切り崩すことに成功

「いよいよ最後だ・・・」

サソリは片腕を前に出し

残っている右後ろ脚に狙いを定めた

「風遁・風切りの術」

サソリの右手から巨大なカマイタチが発生し

ズバツと残った脚を切断

立つことが出来なくなった八尾はその場に沈みこむように落ちる

ド
オ
オ
オ
ン

地響きが伝わり出す

そしてサソリの目論見通りに八尾は口を大きく開け
邪悪なチャクラを溜めだす
ズキュウウウウ

一つの小さなブラックホールのようなチャクラ球が圧縮され
八尾の口に消えていく

「今だな……」

サソリは一体の傀儡を八尾の前に出し
もう一体を八尾の上に送りこむ

「だああああ!!!!
間近で見ると迫力あるな!!!!」

八尾の前に出された傀儡が右手を前にだす

実はこの傀儡の中身は
上条当麻が入っているのだ
入れた理由は

まず防御をするためと
サソリがチャクラ糸を付けやすくするため

こうすることにより
すんなりと作戦が実行出来る

ちなみに八尾の真上に飛ばした傀儡の中身は
御坂美琴

チャクラ球を口に含み
身体が膨張する八尾

「そろそろ来るぞ・・・成功しろ・・・」

しかし

膨張したまま八尾の動きが止まる

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

辺りが静けさがよぎる

サソリだけが八尾の異変の意味がわかった

「!!!!!!・・・こんな状況で・・・九尾になるのか!!!!!!」

八尾の尾が一本出現し

九尾に姿を変える

手足のない九尾の周りに巨大なチャクラの波動が発生し

サソリと傀儡に化けた二人フウエイ以外
吹っ飛ばされた

さらに目の前のゴミを払うように
九尾の巨大な尾が上条
目掛けて振り下ろされる

「マジか！……物理攻撃は打ち消さないぞ！……！」

サソリは右手で上条と繋がっているチャクラ糸を思いっきり引っ張る

九尾の尾は上条の脇をすり抜けるように地面に叩きつけられた

後少し遅かったら……

上条は振り下ろされた尾を見下ろし顔が青ざめる

「はあはあ……！！……！！……なんて奴だ！！」

サソリは上条を救出しながら恐るべきモノを見る

まだ……チャクラ球が生きている

「フウエイ！！……アイツを後ろに投げる
受け止めてやってくれ……」

サソリにはある考えが頭にあつた……

後方に上条を投げ上げ
チャクラ糸を切断

九尾のチャクラ球は今にも発射されようとしている

「とうま……！！……！！」

御坂が飛んでいく上条を心配そうに見つめながら
叫ぶ

（もしかして・・・作戦失敗！？）

（もう・・・打つ手がありません）

御坂と白井に絶望感がやってくる

もう・・・ダメ・・・あの化け物は止まらない

そんな言葉が頭によぎる

そこに

脳内に直接、サソリの声が響いてきた

（ブレるな！！！！まだ・・・失敗していない・・・）

え・・・サソリ・・・！？

（予定通りにあの化け物にチャクラ球を放出させる・・・大丈夫だ・・・学園都市には傷をつけない・・・オレが盾になる・・・）

「え！！！！ダメよ・・・そんなの」

（御坂・・・白井

世話になったな・・・）

オレは、こことは別の世界から来た

そこでオレは犯罪者だった・・・お前達が考えられないようなこ

とも沢山やってきた

人殺しとかな・・・

今までありがとう・・・）

「・・・・・・・・・・！！？」

衝撃の言葉に何も口から出ていかない

九尾の前にサソリが移動する

どんなに考えても・・・・・・・・これしか方法はないか・・・

いろいろあつたな・・・

初めて仲間ができた・・・

友人と呼ぶのか・・・？

これでいい・・・・・・・・

元々はオレ・・・死んでる存在

これでいい・・・

九尾の口にセットされていた邪悪なチャクラ球がサソリ目がけて迫る

「マスター！！！！私が代わりに・・・・・・・・」

フウエイが上条を救出しに行って戻ってきた

砂鉄に乗りサソリの元へ

サソリはゆっくり右手をフウエイに向け

「来るな・・・神羅天征」

斥力でフウエイの砂鉄を破壊

サソリは持っている傀儡を前に突き出し

九尾の衝撃に備える

御坂の狙いを変えないように・・・

漆黒のチャクラ球がサソリの傀儡を破壊していき

サソリの元へ

バキバキなど嫌な音が響き無惨に散らばっていく傀儡の残骸

フワッ

サソリの身体が何故か数センチ浮いていく

サソリの身体にチャクラ球が激突し凄まじい爆音と衝撃波が起きる

サソリの身体はバラバラになり首だけになったサソリが九尾を見つめる

黒子の助けにより強力になった超電磁砲がチャクラの鎧が外れた九尾を射ぬく

それはまるで闇を切り裂く聖なる青き閃光

レールガンの威力は凄まじく

九尾の核ごと身体を貫き

大きな穴が空いている

サソリは薄れゆく意識の中空洞化の先を見る

「おい・・・なんで泣いてんだ・・・」

次の瞬間

九尾はバラバラの球体になるようにして消滅していった・・・

最終回、永遠に・・・（前書き）

皆さん

今までありがとうございました。

既に次回作の構想がまとまっているので近い内にお会いしましょう

感想待ってます。

最終回、永遠に・

拘置所へ

木山がいる所

アンチスキル
警備員の一人が木山の元を訪れる

「木山！！！！良いニュースと悪いニュースがある」

「良いニュース・・・？」

訝しげに隈のある目で警備員を見る木山

「お前の教え子の置き去り（チャイルドエラー）が次々と目を覚ましている」

「な、何・・・！！」

十尾の膨大なチャクラが周辺機器に特殊な事例を生み出したのだ

木山は思わず立ち上がり

涙をポロポロと流し始めた

「よかった・・・これで・・・」

待て・・・悪いニュースとは・・・？」

木山の顔色が変わり警備員を見やる

「今回の事件で一人・・・亡くなるかもしれない・・・この世界には赤い髪の少年 サソリがまだ生きているが・・・この世界にはない技術が使われていて・・・治療出来ないのだ」

「な・・・・・・・・」

「サソリ！！！！しっかりして
目を覚まして！！！！」

佐天がもはや木屑となり始めているサソリの手を握り呼び掛けるが
意識は戻らない

「一応・・・現場に落ちていた部分^{パーツ}は拾い集めたが・・・・・・・・見た
こともない技術だ・・・」

「何とかするじゃん

アンタは学園都市の英雄を見殺しにする気？」

「しかし・・・何処から手をつければよいか・・・」

「・・・・・・・・・・役立たず！！」

一応ベッドにサソリを寝させているが

傀儡の身体はバラバラとなり

修復は難しいそうである

サソリがチャクラ球に当たる寸前に

佐天が空力使いの能力により

サソリの急所にチャクラ球が激突するのを防ぎ

何とかサソリを生かすことが出来たが・・・

その命も消えかけてしまっている

サソリを取り囲むように佐天達がいるが
何も言葉が出てこない・・

あそこまで頑張って学園都市を守ってくれたのに
これ以上頑張ってなんて言えない

絶望に包まれる病室に

「はい、失礼するよ・・・」

バンダナを付けメガネをかけた研究員が現れた

「必要な機材運んで・・それは・・彼の右側に置いて」

女性の研究員に続き

5人程の研究員が機材を次々と運んでいき

サソリの周りに並べていく

「なんだね!!!君達は？」

許可なく入ってきて」

バンダナの女性はサソリの身体に機材を取り付けながら

「この少年に普通の医療は無理だよ

この身体には特別な治療が必要だ

そのやり方はこの少年の頭脳が握っている

さらに今回は尾獣のエネルギーテイルピースがあるから・・人間に戻すことが

出来るかもしれない」

淡々と説明するバンダナの研究員に佐天が驚いたように問う

「ほ、本当ですか!？」

「ん・・・何だ・・・君はこの少年の恋人かね」

「ち、違いますよ／＼／＼／＼／」

顔を真っ赤にして顔をブンブンと振り佐天は否定する

「成功するかわからないがやってみる・・・この少年には科学者の在り方を説いてくれたからな・・・
助けたいな」

準備が終わると機材に電源が入れられる

サソリは真っ暗な道を歩いていた

わかるのは自分が歩いている部分にしかボンヤリと光る程度

しばらく進んで行くと

焚き火の淡い灯りが出現する

さらに近づくとな誰かが焚き火の側の石に腰掛ける
人影が・・・

「サソリか・・・？」

サソリは我が眼を疑った
その人物は

サソリの祖母である

チヨバアであつたからだ

「ち、チヨバアか・・・？」

「久しぶりじゃな・・・サソリ」

謝らないといけない・・・

「驚いたぞ・・・サソリ

お前が・・・人助けをして

世界を救うとは・・・」

待てよ・・・そんなことじゃねーだろ

「すまなかつたな・・・サソリお前の父と母が死んだ時に何も出来なくての・・・」

チヨバアは仄かに燃える焚き火の灯りをうつむきながらみる

違つたろ・・・オレはアンタを殺そうとしたんだぞ

「サソリ・・・辛かつたな・・・」

「待てよ・・・チヨバア！！」

オレは、アンタのことを何にも考えてなかつた・・・
すまない・・・オレはダメな孫だ」

サソリの素直な発言にチヨバアは驚きで目を丸くした

「じゃあな・・・チヨバアオレは地獄に行つてくるぜ・・・父さんと母さんにゴメンと伝えてくれ・・・」

サソリはチヨバアの前を通り過ぎて道の奥へと向かって行こうとする時

「フフ・・・その世界はお前に戻ってきて欲しいみたいじゃな・・・」

「ん・・・!!!!?」

サソリの身体が焚き火の炎と同じように淡く光始めた
「サソリ・・・お主はわしの孫として誇りに思っておる」

「お、おい・・・」
するとチヨバアの後ろに二人の人影が見える

「と、父さん・・・母さん」

生前と変わらない笑顔でサソリを見つめる眼差し
サソリの身体が一筋の光となり天へと消えていった

パチッ

サソリが病室で目を覚ました

真っ白な空間に放り出され自分の置かれている状況が理解出来なかったが

「サソリ！！！！」

目の前に佐天がサソリの手を握りながら
涙声でサソリを凝視している

サソリは自分の身体を確認すると

「人間に・・・なっている・・・」

仕込みを施した傀儡の身体が傷痕すらない
綺麗な人間の身体となっていた

「何言ってるんですの！！」

あなたは元々人間ではありませんか！！それも佐天さんの彼氏としてですわ！！」

「ちよつ／＼／＼白井さん

止めて下さいよ／＼／＼／＼／＼」

「あら！嫌ですの？」

「え、嫌じゃないけど／＼／＼／＼」

凄い顔が真つ赤の佐天

「それは・・・無理だ・・・

御坂と白井には話したな・・・オレは昔・・・人間を多く殺してきた
オレは犯罪者だ・・・」

サソリは半ば諦めたようなセリフで返す

「そんな噂話、誰も信じないわよ」

「そうですよ・・・ここにいるのは学園都市の英雄です」
御坂と初春が満面の笑みで答える

サソリは失ったはずの左腕を口元に当て

「フフ・・・アハハハハ
お前らやっぱ面白い・・・」

（え！！！！サソリが笑った）

いつも無表情を貫き通しているサソリが
無邪気な十代の笑顔を佐天達に向ける

「か、かわいい！！！！／＼／＼」

「マスター・・・笑顔もキュートです」

「ところで・・・サソリさんの眼はそのままですか？」

「！！！！」

サソリが確認すると
輪廻眼のままじゃねーか
どういうことだ・・・

完

とある暁の傀儡師
エクスマキナ

登場人物

サソリ

佐天涙子 初春飾利

御坂美琴 白井黒子

上条当麻 フウエイ

ミサカ

婚合光子

湾内絹保泡浮万彬

固法美偉木山春生

アケミ

マコちゃん

むーちゃん畜生道

ペイン 温泉女将

寮監

ジャッジメント アンチスキル
風紀委員警備員

黄泉川愛穂

シスターズ一方通行

不良達

三代目 風影

バンダナと眼鏡の研究員

眼鏡の研究員

マシン

看護師

アレイスター!!クロウリー十円ハゲのオヤジ

医者

中邑

チヨバア

サクラ

サソリの父と母

大学生

畜生道の口寄せ動物

犬 サイ 蟹 蚣 鳥

一尾

二尾三尾

四尾五尾

六尾七尾

八尾九尾の影

原作

とある魔術の禁書目録

(インデックス)とある科学の超電磁砲

(レールガン)

作 鎌池和馬

×

NARUTO

作 岸本斉史

執筆者

平井純謨

応援ありがとうございます！！！！

では・・・オマケとして
その10年後の世界をどうぞ

p m m m m ♪

ピッ

「もしもし・・・ああ初春
どうした・・・」

「佐天さん・・・久しぶりです今度御坂さん達と集まりませんか？
小夜ちゃんも連れて来て」

「いいね！！サソリにも相談しておくよ
また日程が決まったら連絡するよ」

「お願いします」

ピッ

みんなと会うの久しぶりだな
佐天が携帯電話を折り畳んでいる時に

「ママ」

赤く長い髪をした4歳程の女の子が佐天の足元に抱きつく

「小夜」 今日もかわいいなうりうり!!」

「ママ、くしゅぐつたいよ」

ニコニコと佐天に遊ばれる女の子の両目には

あの伝説の瞳術 「輪廻眼」が顔を覗かせている

「今からパパの研究所に行くけど・・・小夜も来る?」

小夜はニパア」と笑い

「行くいく!!! パパの所に行く」

「じゃあ、行こうか」

サソリは輪廻眼の能力を駆使し研究を重ね
今では研究所の所長を勤める程になっていた

専門を問わず全てのことに通じているため

最高の能力者であり

最高の科学者と呼ばれている

「佐天所長!!このデータなのですが・・・」

「ん・・・現象論から考えていけばわかるぞ・・・」

「あ、ありがとうございます!!!」

白衣を着て相変わらずの無表情のサソリが
椅子に座り思考を続けている

「マスター……」

同じく白衣を着た黒髪の女性が扉から入ってきた

「マスターはやめろ……フウエイ……お前とオレは兄妹になっ
たんだから……」

「わかりました……お兄さま……」

「それは止める……で、何の用だ……」

「兄さんの妻とお子さんが見えてますよ」

「わかった……すぐ行く……」

研究所 待合室

佐天が椅子に腰掛け

小夜が興味津々に周りを見渡している

「前持って連絡くれよ……そうすれば待たせることも無いのだ
が……」

「それじゃあ……仕事にならんでしょうが!!!」

サソリに指定すると、とんでもないことになります

「パパ〜」

小夜がサソリの白衣を掴んで抱っこをせがんでいる

「小夜か・・・」

サソリは自分の娘を軽々と持ち上げ
抱き抱える

「わ〜いわ〜い

小夜・・・パパ好き」

小夜がサソリにピタッとくっつく

「で・・・どうした・・・？」

「えっと・・・今度御坂さん達と集まろうとしてるんだけど・・・サソリも来る？」

「御坂達が・・・懐かしいな・・・行くか・・・」

「わかったわ!!!」

サソリは小夜を抱き抱えたまま窓の外を眺める

まさか・・・オレがこんな事になるとは・・・

オレは今・・・人間の人生を生きている

人形ではない本物の人生を

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9615k/>

とある暁の傀儡師(エクスマキナ)

2010年10月12日14時11分発行